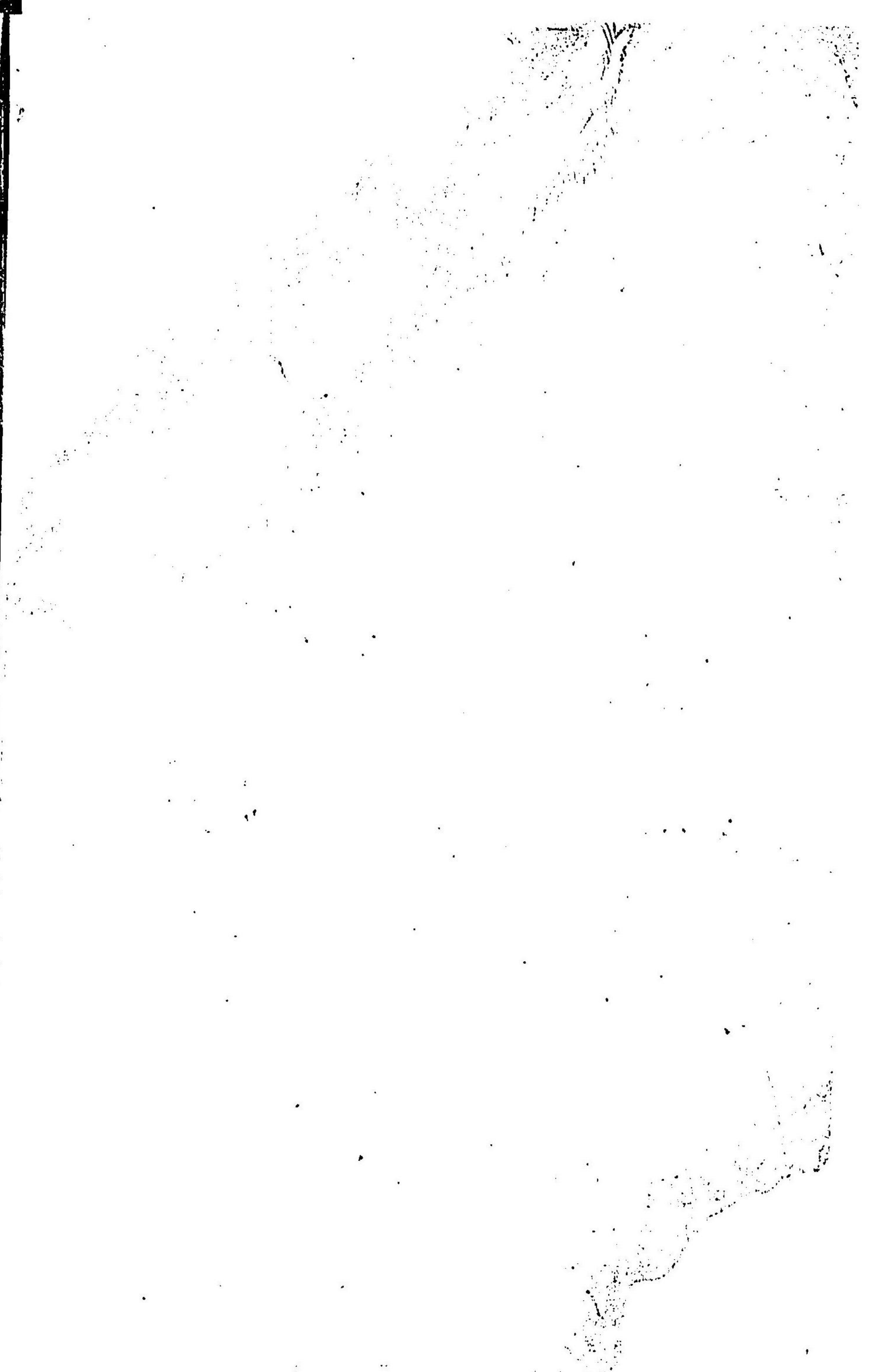
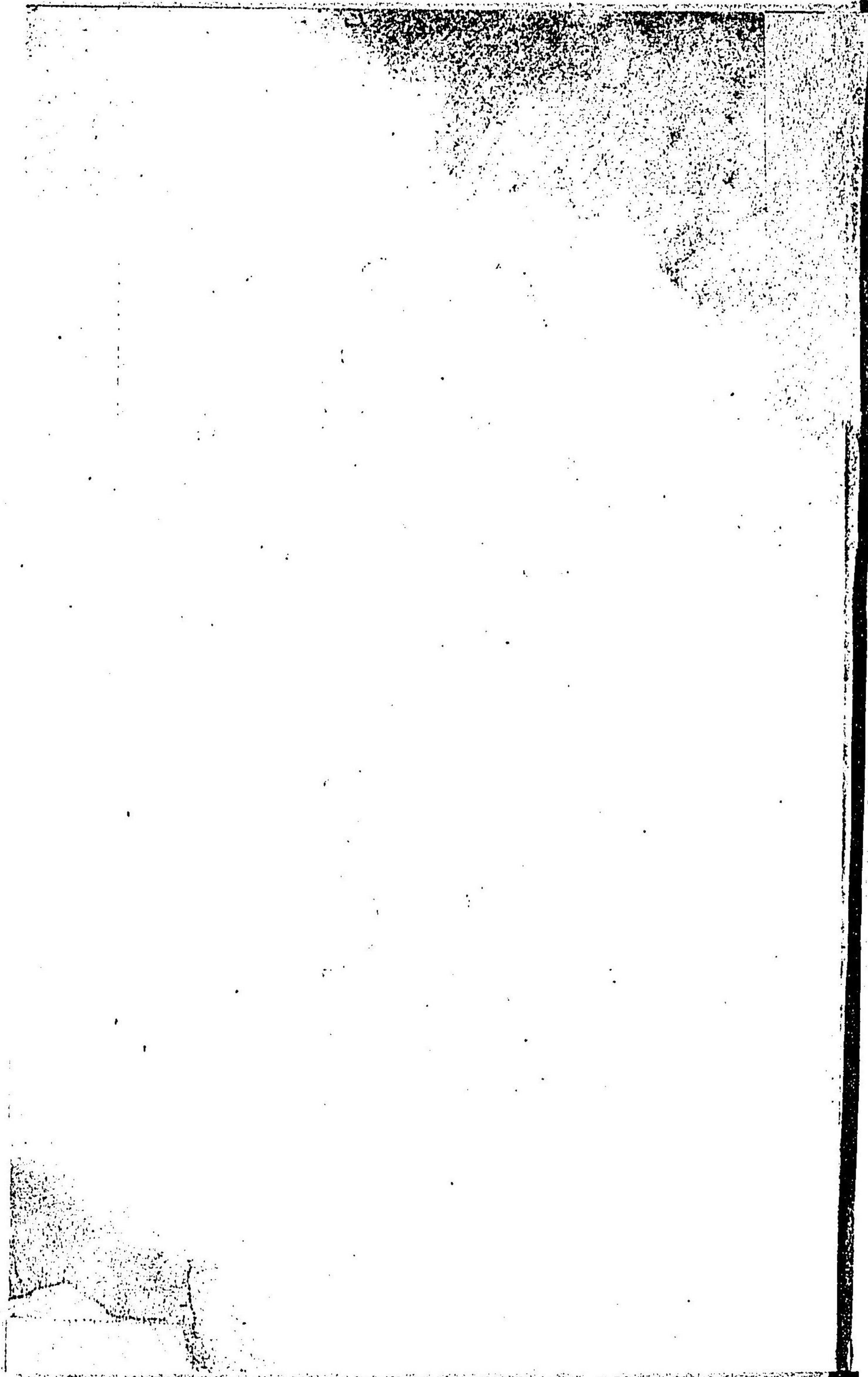


高田案内

注平田内相閣下題字
玩古齋田川先生序文
香嶽散史編纂

高田繁昌記
上越の名所舊蹟
上越の地理と歴史

明治
43 1 10
丙亥



小淨聖靈躍
橫林尚厚歸

流
皆
耀
英

西
淮

圖
運

叙

布施君は篤學の士なり、明治卅五年文部の中等教員國史及東洋史料の檢定試験に登第し、翌年山梨縣立第一中學校教諭に任せられ、頗る令名あり、同卅八年八月本校教諭に轉任し、勤續茲に四年餘、其間君はよく校務に勵精し、又よく自家の修養に努め、本年二月更に文部の試験に應じて西洋歴史科の教員資格を得るに至れり、初め君の本校に來るや、余に謂つて曰く、謙信公は我郷の偉人なり、其勇其俠世人の熟和する所、而も其尊王事蹟に至つては天下知る者稀なり、詳に之を研究して教育に施さば、以て後進を裨益するを得ん、余も亦公を

以て天下の偉人なり、上越の代表的人物なりとなし、常に其遺風を發揚して子弟を鼓舞振作せんと勉めたるもの、大に君の發意を賛し、共に公の研究に従事せり、爾來春秋二星霜、君博聞深討、或は史料を涉獵し、或は史蹟を踏査し、公の事蹟と郷土の史誌とに就きて造詣甚深し、明治四十年四月廿九日本校公の三百三十年祭並に遺品展覽會を舉行し、紀念として謙信文庫を設立するや、君を以て其主任とす、君研鑽益々勉め、上越繁昌論を草して高田新聞に寄稿し、稿を續くること前後百回、其郷土の史誌に就きて所論の該博なる、大に上越の讀書界を驚かし、行文の輕快亦大に讀者を喜ばしめたり、西

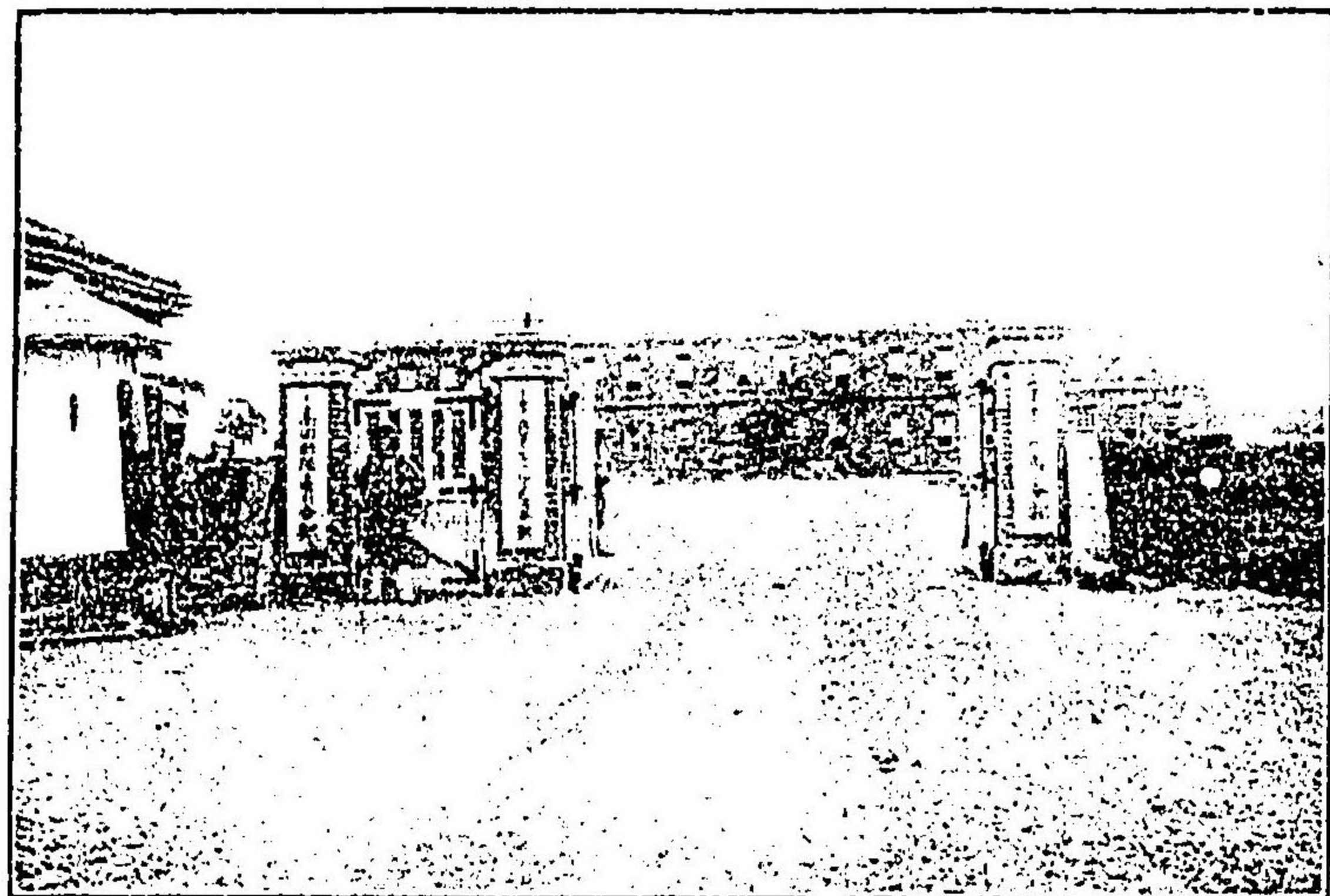
澤書肆之を剗削に付せんことを請ふ、君曰く、こは只研鑽の一端のみ、未だ廣く世に問ふに足らずと、居ること一年、高田は新たに第十三師團の基地となり、一大進轉をなすべき機運に逢着せり、麥秀を歌ひし霜臺公及び名人左衛門の後裔も、蒼桑の歎を反復せし越後中將乃至式部大輔の遺民も、一齊に高田復興の歡聲を以て五千の貔貅を迎へたり、蕭條たりし鮫ヶ城址は今や王侯の干城を以て充され、春日山頭天を摩するの青松も、福島址畔岸を噬むの怒濤も、亦等しく古を跨るに似たり、高田は實に復活せんとしつゝあるなり、否當きに復活すべきなり、此復活すべき高田の現状は如何、高田をし

て今日あるに至らしめたる過去は如何、抑高田將來の使命は如何、史は鑑なり、過去は以て現在を徴すべく、現在を以て將來を卜すべきなり、高田が高田を語るべき時機は方に到來せり、西澤書肆君に請ふこと急なり、君是に至りて始めて快諾し、上越繁昌論を骨子とし、爾來二年間の研鑽を以て之を損増改訂し、名けて高田案内といふ、高田の現勢を説くこと最も詳密なればなり、然れども君苦心の跡は寧ろ高田附近の名所舊蹟と上越の史誌とに在り、稿成る、偶々本年七月七日西涯内相親しく我校に臨み、謙信文庫を視察せらる、此夜余縣の内命を受け、布施君を伴ふて内相を旅館清香園に訪ひ、公

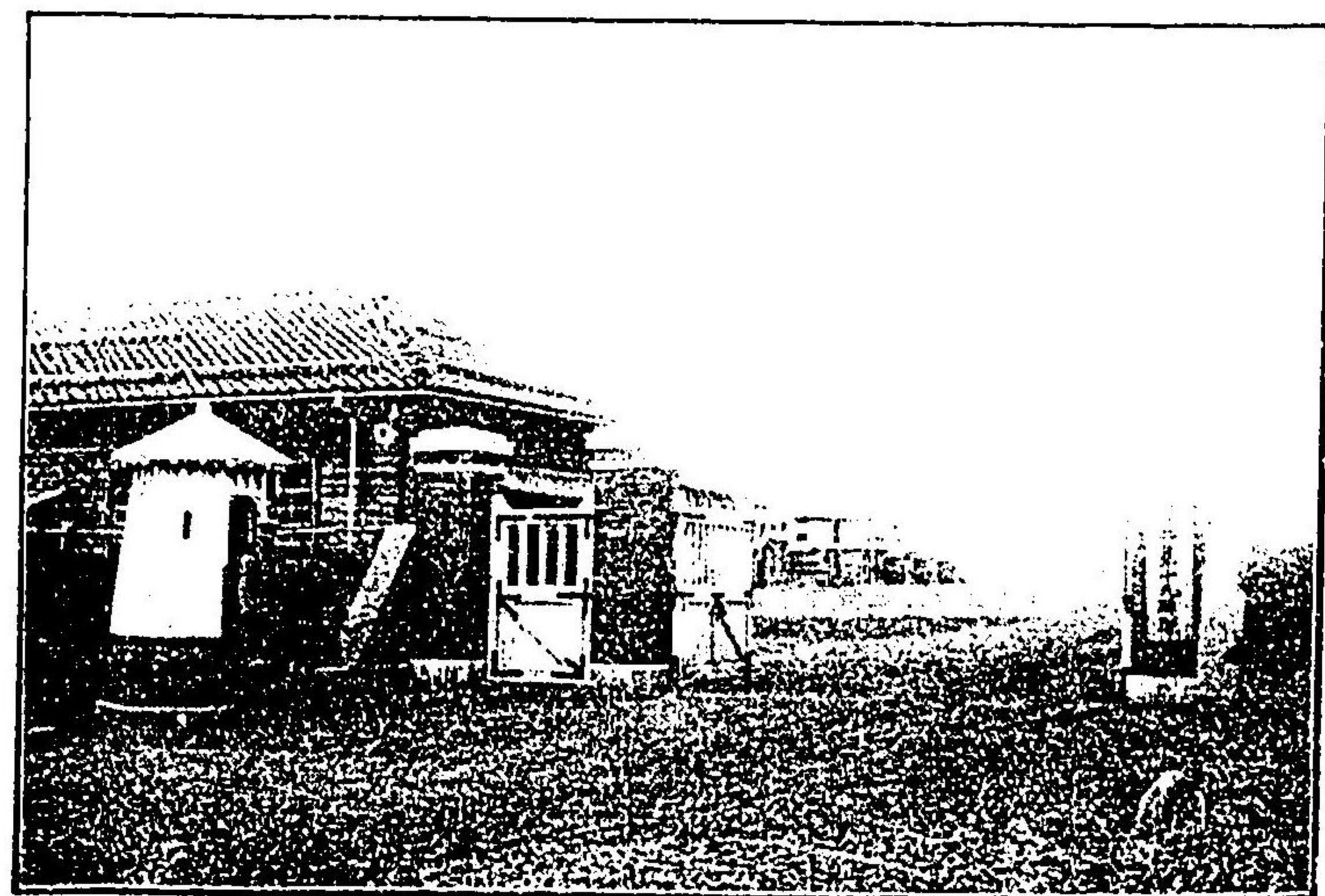
の事蹟に就きて其高教を辱うし、謙信研究の由來と謙信文庫將來の計畫とを述べ、談布施君の此著に及ぶ、内相大に君の此舉を賞し、題するに「流耀含英」の四字を以てす、此數字能く本書の性質と君の篤學とを證して餘りあり、といふべし、余は高田を知らんと欲する人に向つて、將た、上越の地理と歴史とに就きて常識を養はんことを欲する人に向つて、此書を推奨するを憚らざるものなり、刻成りて君叙を余に請ふ、則ち君が研究の苦心と本書の由來とを述べて叙となす、

明治四十二年十一月新嘗祭
高田中學校謙信文庫に於て

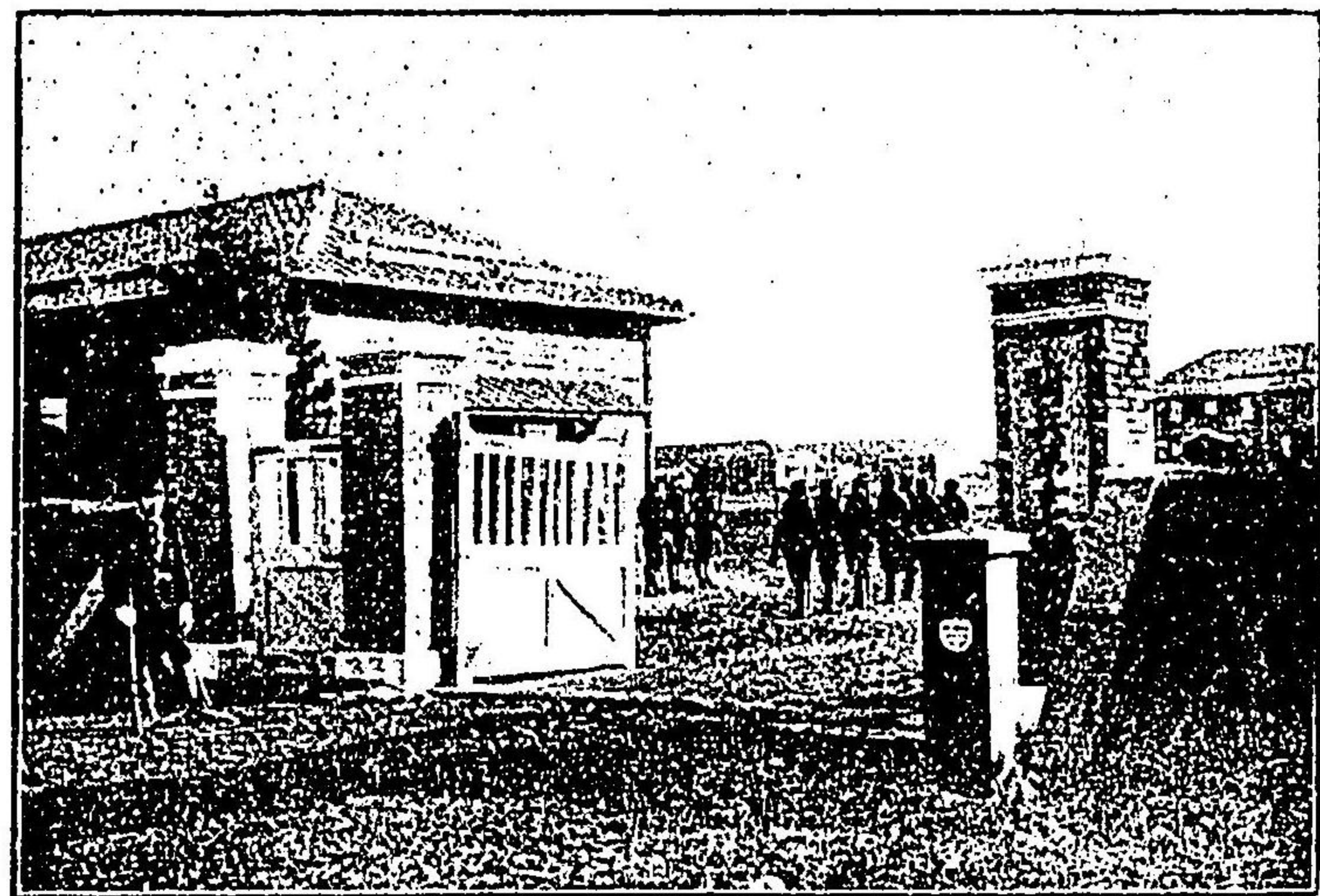
田川辰一



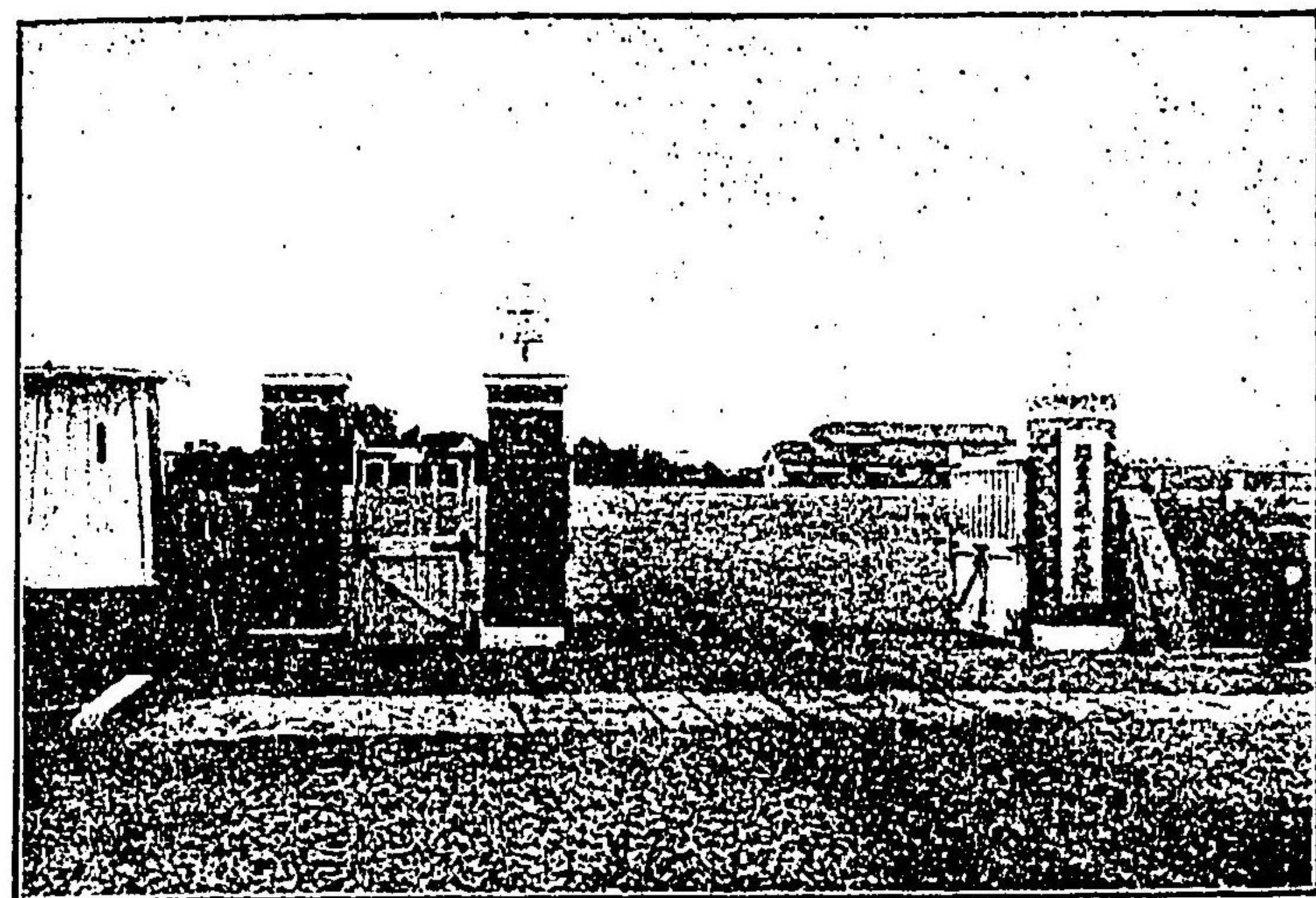
部令司團師三十第



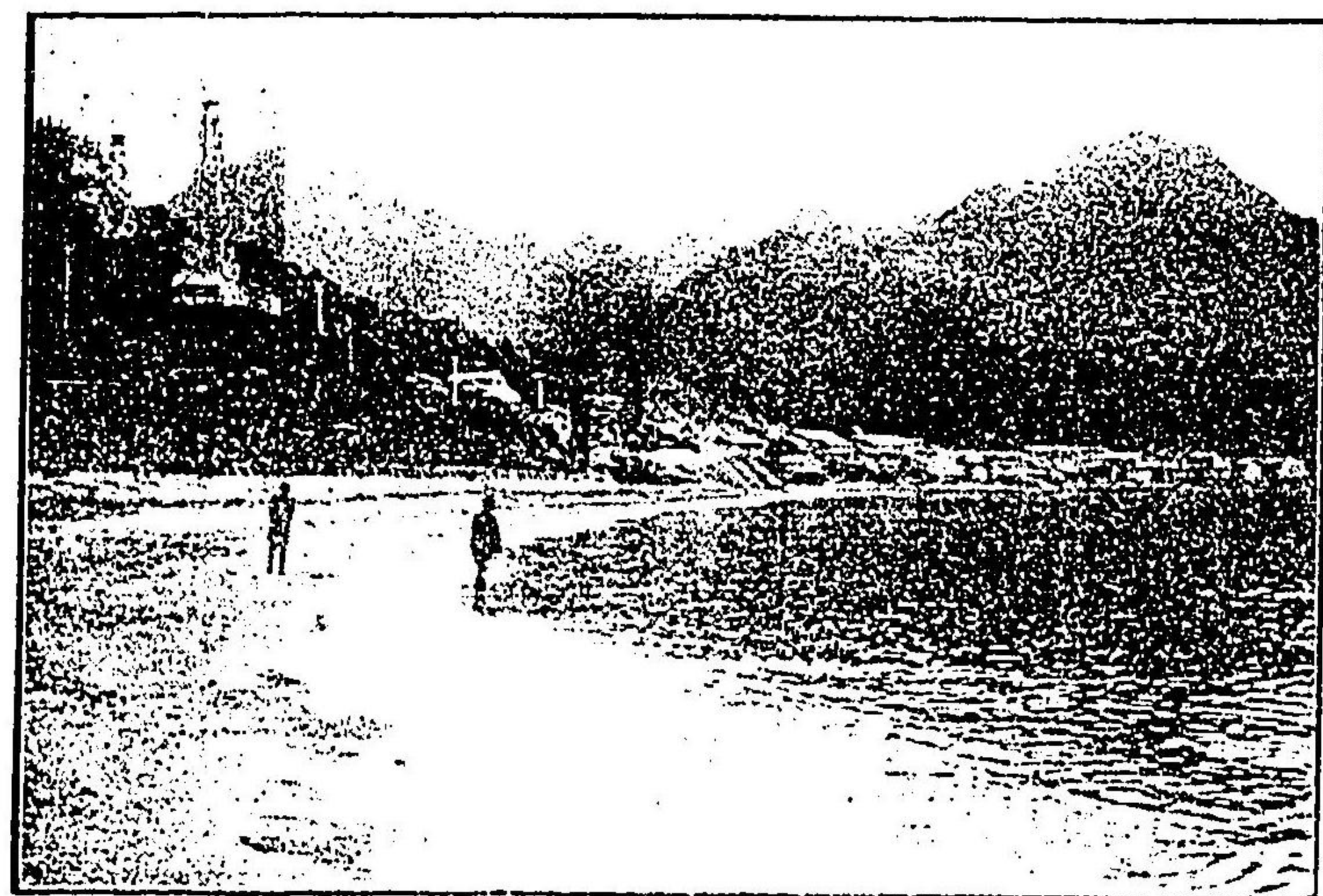
隊聯九第十兵砲野



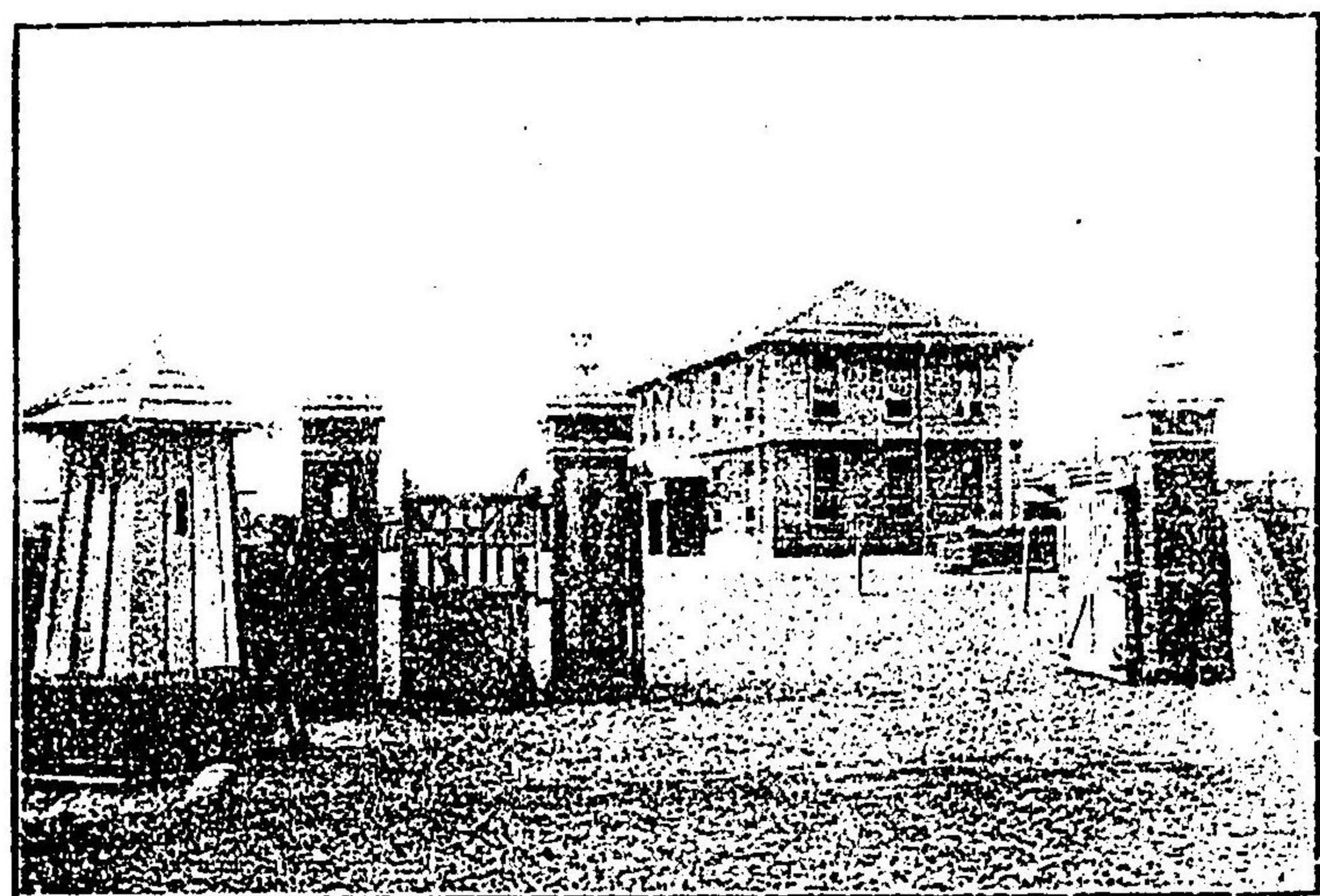
隊聯七十第兵騎



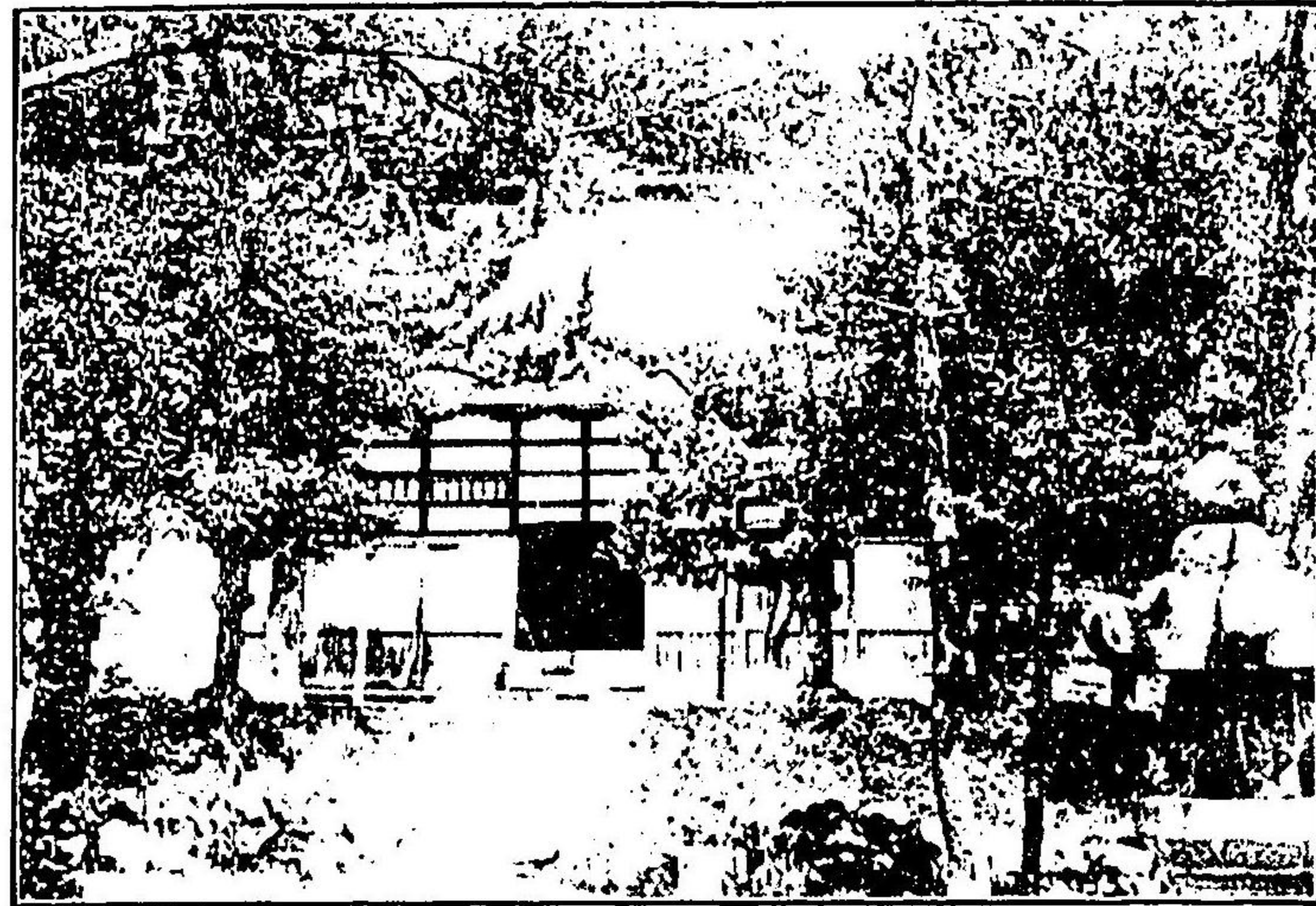
隊大三十第兵重輜



灣 津 鄉



隊聯八十五第兵步



寺泉林山日春



趾城田高

左有栖川宮第一代好仁親王妃殿下ノ御墓

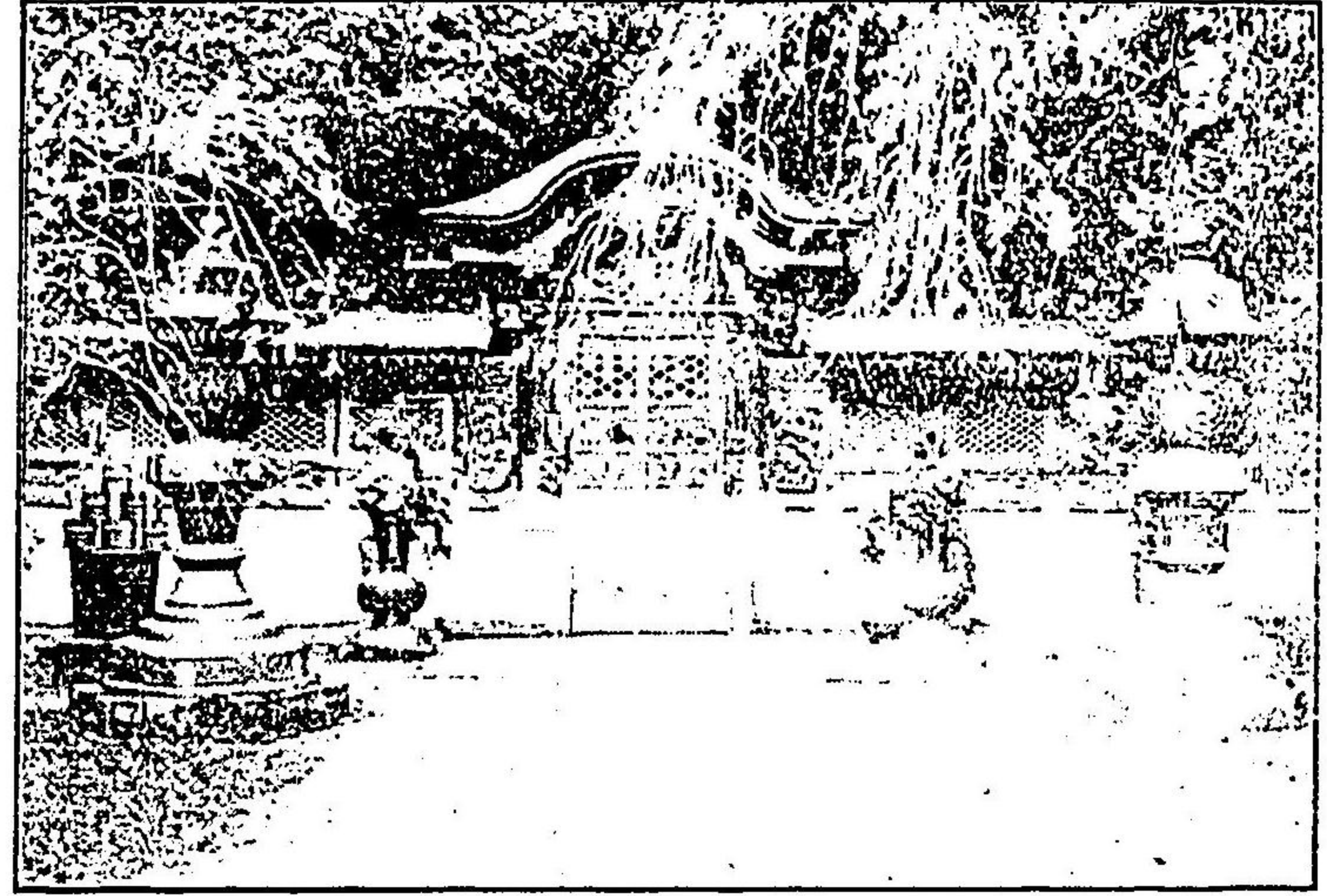


寺崇天田高

右高田姫ノ墓



上越名勝苗の瀧



淨興寺(納骨堂)



春日山

自序

我高田が第十三師團基地に選定せらるゝや、編者自ら
揣らず、上越繁昌論を高田新聞に連載すること前後壹
百回、稿畢りて後、幾ばくもなく五千の疵跡は堂々とし
て我高田に入城し、高陽は全然面目を一新すべき氣運
に際會せり、書肆西澤支店主人來り請ふて曰く、當地從
來此種の著あるなく、頗る地方紹介の方法に苦しめり、
請ふ之を剗削に付して一般人士に頒つを許せし、編者
も學淺く識薄し、然れども郷土の研究に腐心するこ
と年あり、聊か信するところなきにあらず、乃ち前述上
越繁昌論を基礎として省くべきは之を省き、加ふべき

は之を加へ、書肆の注文を容れて極めて通俗的に稿を
 改め、玆に之を剞劂に付するところなせり、刷成りて再
 讀するに、繁閑其宜しきを得ざる所あり、編者自身不滿
 の點亦尠からざれども、此等は他日復訂正の期あるべ
 きを信じ、今は之を以て大方諸賢の博雅を乞はんごす、
 讀者若し聊なりとも採るべきものありごなさは編者
 の幸榮之れに過ぎざるなり。
 本書編纂につきては故庄田直道翁に負ふもの尠から
 ず、又本年初夏西涯内相當縣巡察の際、其旅館清香園に
 於て、本書原稿を一覽し、即時筆を揮つて題字を賜はり
 しは編者望外の光榮とするところなり、學士田川先生

亦本書の爲めに序文を惠まれ過分の褒辭を辱うす、編
 者敢て當らざるのみならず、本書内容の之に伴はざる
 を愧づ併せ記して玆に感謝の意を表す。

明治四十二年新嘗祭日

高田中學校内謙信文庫に於て

編者識

高田案内 (上越の地理と歴史)

目次

前篇 高田繁昌記

高田の位置

高田の歴史

高田城主一覽表、高田城勤番表、高田の繁昌、高田の歴史

市街

戸口

交通

官廳公衙

學校

圖書館

新聞社

病院

救濟團體

神社

一

一

九

二

二

二

四

七

九

九

〇

〇

一

佛 寺	二二三
基督教會	二二九
辯護士事務所附公證人執達吏役場	三〇〇
銀行	三〇〇
會 社	三一
工 場	三一
市 場	三二
著名商店	三二
娛 樂	三七
年中行事	四一
著名産物	四一
舊 址	四四
遊覽地	四五
遊覽地	四七
中 篇	
高田以外上越の名所舊蹟	
一、 <small>鐵</small> 信越線高田直江津間の沿道	
直江津町	五〇

戊辰殉難墓	五二
名古繼橋	五二
應化橋	五三
長松寺遺跡	五三
至徳寺遺跡	五三
國府舊址	五四
福島城址	五四
府中八幡宮	五五
諏訪神社	五五
居多濱	五五
安國山國分寺	五六
竹ノ内草庵	五六
鏡の池	五七
居多神社	五七
岩戸の窟	五七
愛宕神社	五八
光源寺	五八

小丸山……………五八
 春日山城址……………五九
 春日山神社……………六〇
 春日神社……………六〇
 林泉寺……………六〇
 小峰原……………六〇
 和敬孤兒院……………六一

二、鐵信越線高田田口間の沿道

鯨ヶ尾城……………六一
 新井町……………六一
 鳥坂城……………六一
 關山……………六二
 原温泉……………六二
 燕温泉……………六三
 赤倉温泉……………六三
 苗の瀧……………六四

三、鐵信越線の沿道

田切……………六四
 田口……………六四
 上越電氣會社發電所……………六五
 關川……………六五
 山寺舊跡……………六五
 關田……………六五
 箕冠城址……………六六
 坊ヶ池……………六六
 菅原の里……………六六
 鍋蓋御朱印……………六七
 風卷神社……………六七
 岩の原葡萄園……………六七
 川浦……………六八
 黒井……………六八
 三分一……………六八

功德寺濱	六八
犀瀉	六九
瀉町	六九
茶臼山城址	六九
顯法寺城址	七〇
長峯城址	七〇
馬正而桃花	七〇
柿崎	七〇
米山藥師堂	七一
猿毛城址	七一
朽窪の鑛泉	七一
大清水觀音	七一
鉢崎	七一
旗持山	七二
胞衣姫神社	七二
笠島	七三
青海川	七三

四、北陸街道の沿道

郷津	七四
蟲生	七五
長濱	七五
有馬川及び四海波	七六
名立	七六
能生	七六
月不見池	七七
八十八ヶ所觀音	七七
大和川	七七
糸魚川町	七七
蓮花七湯	七九
木曾義仲の古蹟	八〇
田海村鎮守山添神社	八〇
福來ヶ口	八〇
黒姫山布川	八〇
八千八穴	八一
青海	八一

勝山……………八一

橋立金山……………八一

駒返……………八一

歌……………八一

親不知……………八一

上路山……………八一

市振……………八二

客遭寺……………八二

堺川……………八三

五、縣道大島線の沿道并東頸城郡一帯

春日新田……………八三

花ヶ崎及塔ヶ崎池……………八三

杉坪日光寺……………八四

顯聖寺……………八四

安塚……………八四

直峰城址……………八五

大島……………八五

松の山……………八五

観音寺……………八六

天水越及管領塚……………八六

松山鏡……………八六

松代……………八七

松苧神社……………八七

専敬寺……………八七

後篇 上越の地理と歴史

上越の地理

位置……………八九

地勢……………八九

 總論、山岳、川、湖沼、用水江、海岸、沿海、海流、湖沼、

地質……………九四

氣象……………九五

總論、氣溫、風向、雨、雪、

上越の歴史

名稱	九九
石器時代	一〇一
神代	一〇一
上古時代	一〇二
大化改新後奈良朝時代迄	一〇三
平安朝時代	一〇四
鎌倉幕府時代	一〇五
建武中興時代	一〇五
足利幕府時代	一〇六
群雄割據時代	一〇六
織田豊臣氏時代	一〇九
徳川幕府時代	一一〇
維新後の頸城	一一七

現今の上越

土地	一一八
住民	一一九
交通	一二〇
道路、鐵道、馬車、人力車、汽船、郵便、電信、電話	
産業	一二五
農業、商業、工業	
行政	一二八
行政區劃、警察、稅務及財務、工務	
司法	一三〇
軍事	一三一
陸軍、海軍	
教育	一三一
初等、中等、女子、孤兒院、圖書館、團體、新聞雜誌	
宗教	一三四
神道、佛教、基督教	
人情風俗	一三七

附 録

高田驛汽車發車時間表……………一
 電話使用料一覽……………一
 市内人力車區劃表……………二
 市内外人力車賃錢表……………三

高田案内目次終

高田案内

香嶽散史編

前篇高田繁昌記

◎高田の位置

曾て北越の重鎮として三百年間の歴史を有し、今は第十三師團の所在地として國家重要な位置を占め、尙ほ封建市街の餘風を存じて一種の雅趣を保てる高田町は、南に妙高燒山の火山を仰ぎ、米山尾神を睥睨し、北日本海に近く、荒川を右にして青田儀明の兩川に跨る、東經百三十八度十六分、北緯三十七度七分に位し、中央標準時に後れしむる事約十六分、鐵車轟々北すれば五時間にして新潟に到り、南すれば十有餘時間にして東京に達する地點にあり。

◎高田の歴史

高田の地は、昔關の庄菩提ヶ原と稱せしが、高田城築るゝに及んで發達せり、往古の歴史は知るに由なけれども寛治年間（一〇九一—一〇九四）の古圖に高田と記せるを見る、上杉霜

高田の位置

高田の歴史

高田の位置 高田の歴史

臺公歿して二養子景勝景虎の争ふや、天正七年景勝捷ち景虎を逐ひて鮫ヶ井城(豊田村)に迫る、此時景虎の兵高田川に踏み止まりて戦ふとあるによりて察するに青田川を當時高田川と云ひしにや、慶長十二年堀忠俊城を福島に築くや福島の本誓寺は高田に移轉し高田陣屋の保護を受たる文書によりて觀するに、天正の頃既に高田村落を形成し慶長の頃は陣屋を置きしものとすべし、慶長十五年堀忠俊領地を沒收せられて徳川家康の子忠輝の福島城主となるや、その地怒濤枕頭に騒ぐを忌みて高田築城を許され、慶長十九年工を起す、諸國の人夫雲の如くに集り、菩提原頭喧囂耳を聳し僻地寒村忽然熱鬧の地となる、城廓を築くと共に市街地を區劃し、福島城下及び直江津の民衆を招く、然かるに築城の工未だ成らざるに大阪の役起り、忠輝從軍せしが陣中罪あり、元和二年七月五日領地を沒收せられて伊勢に流さる、高田町が將軍家の連枝に依つて經營せられ、北越の中心として權勢の夢に驕ること僅かに三年、忽ち此非運に遭遇す、正に之れ搖籃中の嬰兒が母を失ひたるが如し、僅に酒井家を迎へて北越の旗頭たるを失はざりしも之より復振ふ事能はざりき、元和五年松平忠昌信州松代より二十五萬石を以て入部す、五年の後忠昌去つて越前福井を嗣ぎ其甥光長

二十五萬石を以て元和九年高田に封せらる、所謂越後中將時代は之より始る、光長は越前家の祖秀康の孫にして父は忠直母は二代將軍秀忠の女勝子なり、是を以て中將家の威權頗る振ひ、高陽の活氣頓に加はり上越は實力に於いても名聲に於ても北越に首たり、高田が無稅地となりしも實に此時代なり、寛永十年光長初めて高田に入部するや母勝子も共に來るに際し將軍贈るに高田の地子錢を以てす、此土産こそ高田町が維新まで二百三十餘年間無稅の恩典に浴せし所以なれ、發展の機に際して非運に遭遇したる高田町は光長時代に漸く整頓す、城市南北凡そ一里、東西二十餘町、城は本九二ノ九三ノ九に畫して結構輪奐の美を盡し外廓は所謂家中にして一ノ橋土橋を以て西を堺し、關町口馬塚口矢場下口(遊池)塵取口は南方を、稻田本誓寺長門町口を以て北を界し、見付の構へ頗る壯嚴なり、侍屋敷としては今の家中(土族屋敷)全體は勿論、既に水田に拓かれたる藪野新田乘國寺の周圍より關川に近く、高田廻箱井耕地神明川原町一帶中島田圃稻田に及び、更に本町を飛んで寺町との間悉く士族の屋敷にして儀明川を跨いで北は陀羅尼裏通りに達す、山屋敷は重臣等別莊のありし處にして今の金谷村にあたり、上は向橋より下は飯に至る、市街の南北に藩主の米藏を設け

て人馬市中に絡繹たり、高田の過去に於ける最も盛觀を極めしは實に此時代なりとす、光長入封以來五十九年にして騷動起り、元和元年光長は伊豫に流され領地は沒收せられ一藩離散しぬ、建設以來多難なる高田は再び此災に遭遇して頓挫す、然るに之れより勤番時代六年を經、稻葉、戸田、松平の諸侯を送迎し、寛保二年榊原家を載けり○(上越の歴史参照)

▲高田城主一覽表(越後國御城主略年譜による)

序順	城主	在城年代	在城年數	石高	來移	現藩	今名
一	松平忠輝	慶長十九年	三	七十五万石	來松	代	天和三年九十二歳にて信州諏訪に歿す
二	酒井家次	元和二年	四	十萬石	來高	代	信州諏訪に歿す
三	松平忠昌	元和五年	五	二十五万石	來松	代	信州諏訪に歿す
四	松平光長	元和九年	五	二十五万石	來松	代	信州諏訪に歿す
五	勤番十藩	天和三年	六	年間	沒落	與再	信州諏訪に歿す
六	稱業正道	貞享三年	一	十萬三千石	來小田	代	信州諏訪に歿す
七	戸田忠真	元禄十四年	一	六万七千石	來佐	代	信州諏訪に歿す
八	松平定重	寶永七年	一	十一万三千石	來桑	代	信州諏訪に歿す

高田城勤番表

▲高田城勤番表
(毎年五月二十一日更代)

八	榊原政永	寛保二年	一二九	六	十五万石	來	姫路	今	在番年代
一	水野準人	正松	新發	田本	上	水野忠敬	子	自	天和元年
二	相馬彈正忠	中	村	同	上	相馬順胤	子	自	天和二年
三	内藤紀伊守	棚	倉	同	上	内藤信任	子	自	天和三年
四	仙石越前守	出	石	同	上	仙石政固	子	自	貞享元年
五	堀周防守	飯	田	同	上	堀親篤	子	自	貞享二年
六	井上相模守	美	田	同	上	井上正己	子	自	貞享三年

高田が越後中將家を失ひしより市勢の盛衰交々到り、代り来る大小の藩主政法或は寛に或は嚴なれども、等しく納税の義務を免じ、各町に各種専賣の特權を與

へて保護せざるはなし、しかも城下としての利益以外何等發展の餘地なき高田は終に大に振ふ能はざりき、加ふるに地震火災に遇ふて上下益々困憊せしが、榊原十一代の主政令(本所)出で、勤儉主義を以て藩勢を挽回するに及んで、市況も稍生氣を發するに至れり、後幕府多難の時に際して榊原家が長州征伐の先鋒となり將軍の上洛に隨ふ事二回にして毫も資金に窮することなかりしは其勤儉の餘德に因る、明治戊辰の歲佐幕黨は會津藩を盟主として東北に據り、會津米澤の兵進んで越後に入り長岡之に従ふや卒先して尊王の意を至し鎮撫使を迎へしは高田藩にして先づ川浦に古屋作左衛門の徒を敗り、鯨波に會津兵を走らす、功により賞典祿一萬石を受く、明治二年版籍返上、四年廢藩置縣と共に榊原家は高田を去れり、慶長十九年築城以來茲に二百五十七年、八人の諸侯を戴き十人の勤番大名に従ひたる高田は、私領政治を脱して柏崎縣に屬し、間もなく新潟縣に轉じ、或は區、或は組合制度を取りしが、明治十三年郡制の下に戸長十三名を置き、二十二年三月町村制實施せらるゝや、更に高田町高城村の二箇町村に分れたり、抑封建時代の保護に甘んじ納稅免除の特典に浴したる高田は、今や僅かに中頸城郡政治上の中心地たるを、諸學校の所在地なると、近在村落

に日用の貨物を供給することによりて僅に餘喘を保ち、高田城址は陸軍省の所有となりしが明治二十三年に至りて舊藩主に拂ひ下げられ收益は舊藩子弟の學資と舊藩士族授産の資に用ゐ、幾多榮華の夢を包みし古城の老松は悉く伐られ、徒らに夢秀の嘆を歌はしめしが、日露戦後の經營として師團新に設けらるゝや明治四十年城趾陸軍に復し第十三師團司令部を置かる、是に於いて封建の殘骸を擁して前途を悲觀せる高田は復活の氣運に向ひ、一躍して帝國重要な地となり諸種の事業勃興し、遂に四十一年十一月一日を以て高田町高城村合併せられ發展の機愈々熟して將に面目を改めんとするに至れり。

▲高田の雪

此下に高田ありきは雪中の高田を形容したるものなり、西比利亞より吹き來る寒風は對島暖流の水蒸氣を奪ひ來つて越後山脈に衝突し、凝結して降り來るもの即ち此の雪なり、九月下旬既に妙高燒山の峯頭白きを見る、十一月の末より天空淡曇を流すが如く、霜を先驅として寒之に次ぎ、十二月に入りて六花紛々たり、積雪は多く十二月の末か一月上旬のものさす、積雪或は六七尺に達する事ありて全市街は雪を以て包まる、

舊藩時代には大手前に凡八尺の竿を建て、雪量を測れり之を機竿と稱す、

天和元年大雪、「此下に高田あり」の高札を建つ、加賀の飛脚某書添て曰く
諸國まで高く聞えし高田さへけふ來て見れば低くなりけり

享保十七年大雪、寛延二年二月二十九日紅雪降る、此年一丈六尺積る、

寶曆二年十月廿日大雪降る、天明三年大雪、文化十年一丈五尺、天保十二年一丈餘、
安政二年紅雪、此年積ること九尺五寸、

明治二十五年一丈餘、山間一丈五尺より二丈に及べる處あり、

三月に入りて降るものは淡雪と稱し忽ち消散す。雪消の時季は道路最も困難を感ず、四月に全く雪
を見ず梅花漸く開く、

雪深き越路は春を知られどもけふ春日野は若葉つまなむ

橋 爲 仲

冬こもり雪に友垣すむばすばこし路の空をいかで思はん

曲 亭 馬 琴

▲森の高田

一陽來復して積雪消散し、玉山崩れて習風起る、雪より脱したる上越の新装は又格段の好景實に揃
すべし、上越の黄金時代は方に此時にありとす、樹木蒼鬱として、翠色滴らんとする夏日、遠く望め
ば市街の何處に在るかを知らしめず、雜鬧の巷、幽靜の情趣を加へて雅致愛すべきは之れ亦高田の
特色なり、青田儀明兩河岸の叢々として茂れる、寺町一圓の森々たるあたり、青苔滿地に布きて涼味
人に迫れる、高田城畔樹蔭濃かに疎竹婆娑たる、幽雅閑靜の風情は高陽の一名物たるを失はず、
若し夫梅櫻桃李柿銀杏栗無花果の累々たる、實に田園都市を兼ねて趣味津津たりと云ふ可きにあ
らずや、

單に風致を添ゆるのみならず、防風に、火防に、衛生に、生産に、森の高田を益する少からずと云
ふ可し。

越の山雪解の雲も晴ゆきてみこりを分るかりのころこゑ

慈 録



市街

◎市街

市街總面積六百五町六反七畝七步三合、南北一里余、東西二十餘町、大字合せ
て九十九、市街の構造は高田築城の際新に設計せるを以て街衢整然たり、雪中
の往來を慮り一様に雁木街道を作れるは雪國特種の構造法にして、且つ町々に
よりて職業を専門にせしめたり、今其町名と昔時専門の商業とを左に記さん、

町名と昔時の専門業

▲本町通り

伊勢(馬場) 出雲(馬場) 開(馬場) 横春日(馬場) 堅春日(馬場) 府古(馬場) 横(旅籠屋)
 吳服(吳服大物上呉服) 上小(問屋) 中小(問屋) 下小(旅籠屋) 下紺屋(吳服大物) 土橋(初め呉服) 後維商
 陀羅尼(上) 善光寺(上) 長門(上) 中屋敷(薪炭) 直江(直江津より移轉) 本誓寺(元二人町寺所在) 中頃本誓寺
 地維商) 稻田鍛冶(農具鍛冶) 鍋屋(物鍛冶)

▲西裏町通り

藏番(米倉番所) 上紺屋(染物) 新須賀(日屋) 須賀(日屋) 上田端(魚問屋) 下田端(魚問屋)
 桶屋(桶屋) 本杉鍛冶(左官) 本府古(商) 大工(大工) 大鋸(木挽) 寄大工(旅大工)

▲東裏町通り

上職人(武職) 下職人(諸職) 新職人(上) 馬喰(馬商) 椀屋(漆器)

▲路次町

勘左衛門(日屋) 兩替(兩替) 檜物屋(檜細工) 杉の森(官左) 刃物鍛冶(刃物) 新本杉鍛冶
 冶(釘類維鍛冶)

▲寺町

上寺(寺院所在地) 中寺(同上) 下寺(同上) 裏寺(同上)

元高城村たりし所謂家中は昔街衢を成すを許さず、町人の住むを禁せられ、樹木鬱蒼城池と相待つて森殿の氣人を襲ひしが、維新後町内及家中共に何等の規定もなく、師團新設に及んで諸種の建築混合するに至れり、字名は越後中將時代因めるもの多し、岡島壹岐の屋敷を岡島町、片山主水の屋敷跡を主水長屋と稱するが如し。

國名を冠せる伊勢、出雲、長門、紀伊國、尾張町等は高田築城の際各國の人夫和群集飲食せし處なると云ふ、其他は多く春日山城下の舊名にして、福島に移り、高田に轉するもなほ改めざりしなり。

維新後榊原家江戸屋敷及び同家領奥州釜子陣屋より移轉し來れるもの、爲めに新に設けし字名左の如し。

北出丸、新川原、外馬塚、五分一ノ一、五分一ノ二、五分一ノ三、五分一ノ四、五分一ノ五、五分一ノ六。

維新の際榊原家が新にかへし家臣住居の爲めに設けしは、新四ノ辻と六軒町の二字にして之を新兵長屋と稱す。

戸口

◎戸口

「六千軒は高田の城下」とは古來人口に膾炙する處なり、蓋し最盛時代の家中及町家の總計ならん、高田築城以來、有司城下の繁榮を謀るに汲々たりしかば、他に何等の發達の途無きにかゝはらず、戸口繁殖して名邑となりしが、屢々藩主の變動に會し、盛衰交々至り。維新後藩主の保護なく生産の力なきを以て徒らに衰頹するのみなりしが、師團所在地となりし結果戸口の増加顯著なるものあり。

戸數五千九十九軒

人口總計二萬八千三百二十六人

内

男一萬三千八百七十一人

女一萬四千四百五十五人

(明治四十二年一月一日調)

交通

◎交通

昔は高田より江戸まで碓氷を越えて七泊を要し、飛脚は五泊五日、早飛脚は三日、御用急飛脚は二日半にて達せしが、今や道路の改良新開、鐵道の布設によりて交通の便日に加はり、昔日の事想像にだも及ばざるに至れり。

▲國道。信州街道は本町を貫きて南北に通ず、南は新井關山を経て信濃に入り、北は追分にて右すれば直江津に入り、左すれば春日山麓を經、五智に出で、越中に向ふ、前者を今町街道といひ後者は加賀街道とも云ふ。

▲縣道。東稻田橋を渡りて安塚に入ると、關區より針に至るとの二あり、其他停車場に到るものも縣道なり。

▲鐵道。信越線は明治十九年を以て本町を貫き、客車は日に各六七度上下す、高田町より重なる地方への距離。

新 潟	三十三里十五町	長 岡	四十九哩五釐	柏 崎	十三里二十七町
安 塚	八十九哩銀	村 松	三十七里二十六町	新發田	二十六哩七釐
糸魚川	六里八町	富 山	三十三里十四町	長 野	四十二里十五町
東 京	十三里七町	長 野	四十一哩九釐		
	七十六里七町				
	百六十七哩七釐				

▲郵便。局は吳服町にあり、明治四十二年三月一日二等局となる、無集配局は關

縣道 鐵道 郵便

交通

直江、下紺屋の三箇所に置く。

集配一日六回、

小包集配一日二回、

電信

▲電信。高田郵便局及び高田停車場に於いて取扱ふ、

電話

▲電話。明治四十年十二月を以て直江津長野間の通話を取扱ふ、市内電話は四十二年三月十一日を以て開始す、(附録参照)

◎官廳公衙

官廳公衙
第十三師團司令部

▲第十三師團司令部。(舊鮫ヶ城本丸)

抑本師團は明治三十八年四月一日日露戦役の際編成せられ、同年四月原口陸軍中將に率ゐられて青森に集合し、七月樺太南部に上陸して之を平定し、更に北部に進んで樺太全部を占領す、凱旋後一部は臺灣に、一部は韓國に駐屯し、岡崎中將に率ゐられて或は暴徒を鎮め、或は在韓邦人を保護し、國威を支持發揚する事多大なりしが、四十一年十一月歸還入城せり、

●第十三師團の編成表

- 一 歩兵第十五旅團(新發田)
 - 一 歩兵第十六聯隊(新發田)
 - 一 歩兵第三十聯隊(村松)
- 一 歩兵第廿六旅團(高田)
 - 一 歩兵第五十聯隊(松本)
 - 一 歩兵第五十八聯隊(高田)
- ★ 第十三師團(高田)
 - 一 騎兵第十七聯隊(高田)
 - 一 野砲兵第十九聯隊(高田)
 - 一 工兵第十三大隊(小千谷)
 - 一 輜重兵第十三大隊(高田)
 - 一 高田憲兵隊本部(高田)

▲歩兵第二十六旅團司令部。(城内本丸) 松本なる第五十聯隊と高田なる第五十八聯隊とを管轄す。

▲高田聯隊區司令部。(城内本丸) 新潟縣東頸城郡、中頸城郡、西頸城郡、刈羽郡、長野縣長野市、上水内郡、下水内郡、上高井郡、下高井郡の壯丁徵集事務及び在郷軍人兵事事務を司る。

▲兵器本廠。(城内二ノ丸) 火藥庫(出丸) 衛戍監獄。(城内十字曲輪)

▲騎兵第十七聯隊。(城内三ノ丸)

▲野砲兵第十九聯隊。(高田中學校の東元紀伊國仲町)

旅團司令部
高田聯隊區司令部
兵器本廠
騎兵聯隊
野砲兵聯隊

歩兵聯隊 輜重兵 大隊 衛戍病院 憲兵隊本部 高田憲兵隊 裁判所 高田警察署 新潟監獄分監 高田稅務署

▲歩兵第五十八聯隊。(横春日町裏)

▲輜重兵第十三大隊。(關町裏)

▲衛戍病院。(歩兵聯隊の裏手)

▲憲兵隊本部。(城内三ノ丸)東京憲兵司令部に屬し十三師團管下の憲兵事務を管す。

▲高田憲兵隊。(下紺屋)

▲裁判所。(上職人)舊觸元役所の跡に在り、明治八年八月新潟縣裁判所支廳と稱し、十二年新潟始審裁判所高田支廳治安裁判所と改め、二十三年高田區裁判所新潟地方裁判所高田支部と改稱し、中東兩頸城郡の司法を掌る。

▲高田警察署。(一ノ橋) 明治四年十二月柏崎縣高田取締所を設けしを初とす、六年六月新潟縣に屬し、十年一月高田警察出張所となり、同二月高田警察署と改む、十六年今の地に移轉し、高田及び高田附近の警察事務を司る。

▲新潟監獄高田分監。(中殿) 舊藩の監獄は府古町東裏にありしが、明治四年高田監獄と稱し、後柏崎縣に屬し、新潟縣に轉す、

▲高田稅務署。(西二ノ辻) 初め高田收稅所と云へしが明治三十二年今の名に

長野鹽務局出張所 中頸城郡役所 土木工營派遣所 學校 小學校

改め郡内の稅務を管掌す。

▲長野鹽務局高田出張所。(高田稅務署内) 中頸城郡内の鹽務を管掌す。

▲中頸城郡役所。(一ノ橋)明治十二年五月創立、郡長たりもの左の如し。

渡部健藏、遠山千里、辰野宗治、赤津克郎、中村正彦、渡邊新吉、山田泰一、福永兵太郎、稻垣宗正、阿部 致、

▲土木工營派遣所。(中頸城郡役所内) 頸城三郡の土木を管理す。

◎學校

▲小學校。

高田高等小學校、(吳服町)

同 第一尋常小學校。(上藏番) 商業補習學校併置す、

同 第二尋常小學校。(長門) 商業補習學校併置す、

同 第三尋常小學校。(西二ノ辻)

同 高城尋常高等小學校。(岡島)

高田師範學校附屬小學校。(四ノ辻通)

高田中學校

▲高田中學校。(馬場先)明治七年五月舊高田藩發修道館を廢して創立し、變遷今日に至る、生徒定員六百名、明治十一年九月十一日 天皇陛下北陸御巡幸の際行在所となり、同三十五年 皇太子殿下行啓金一百圓を賜ふ、校庭に紀恩碑表忠碑あり。

高田師範學校

▲高田師範學校。(四ノ辻通)明治三十二年三月創立、學校教員を養成す、

高田農學校

▲高田農學校。(表川原)明治三十三年四月郡の經營として創立せられ、同四十年縣立となる、

私立高陽女學校

▲私立高陽女學校。(馬出し)明治十九年開校、本科及專修科に分れ裁縫手藝を教ゆ、

私立訓蒙學校

▲私立訓蒙學校。(上寺町)盲人矯風研技會員の發起する處にして、明治二十四年創立し盲人を教育す、

私立裁縫女學校

▲私立裁縫女學校。(下寺町)明治三十七年三月九日開校、普通科、速成科、高等速成科を置き裁縫手藝、家事及び普通學を教授す、

私立女子技藝學校

▲私立女子技藝學校。(馬出し)明治四十一年七月創立、裁縫手藝の外普通學を教授す、

主敬館演武場

▲主敬館演武場。(稻田)鹿島神傳直心影流第十六代倉知陽次郎源正久氏の創立にして、今は嗣子正實氏師範たり、

圖書館

◎圖書館

高田圖書館

▲高田圖書館。(岡島)舊藩祖榊原康政公三百年祭紀念として創立せられ、明治四十一年六月廿七日開館す、

通俗高田圖書館

▲通俗高田圖書館、(第一尋常小學校内)明治四十一年創立す、

謙信文庫

▲謙信文庫。(高田中學校内)上杉霜台公三百三十年祭紀念として明治四十年四月二十九日創立す、

新聞社

◎新聞社

高田新聞社

▲高田新聞社。(上職人)明治十六年四月一日創立、日刊高田新聞を發行す、

高田日報社

▲高田日報社。(善導寺前)明治四十年七月十八日上越日報と稱して日刊新聞を發行せしが、四十一年十一月一日高田日報と改題す、

高田時報 信越新聞 北越新聞 夕報高田 新高田社 病院 郡立高田 田立病院 私立知命 命立堂病 院立病 私立藤 林内科 病院 救濟體 團 日本赤 十字社 清風園

▲高田時報社。(五分一)一ヶ月三回づ、新聞發行す、
 ▲信越日々新聞社。(下小町)明治四十一年七月一日創立す、
 ▲北越新報高田夕報。(下紺屋町)明治四十一年九月一日より夕刊新聞を發行す、

◎病院

▲新高田社。(下小區)明治四十二年毎月三回「新高田」を發刊す、
 ▲郡立高田病院。(岡島)明治五年創立す、附屬として産婆養成所を設く、
 ▲私立知命堂病院。(四ノ辻)明治二十四年設立醫學士瀨尾原始院長たり、
 ▲私立藤林内科病院。(二ノ辻)明治三十九年醫學士藤林道德氏設立、
 右の外市内開業の内外科齒科眼科婦人科等の醫師三十人、産婆十二人あり、

◎救濟團體

▲日本赤十字社新潟支部中頸城郡委員部。中頸城郡役所に在り、
 ▲清風園。(中殿)明治三十九年六月二十日創立、慈善財團なり、出獄者にして頼

るべき者に對して保護を與へ産業を授け、秩序ある生活をなさしむるを目的とす、

◎神社

神社 神神社 日枝社 春日社 關町神 出丸神 明宮

▲神神社。(岡島)明治九年一月創立、祭神神原康政公、明治三十九年十月八日縣社に列せらる、
 ▲日枝神社。(下寺)祭神は大山咋命、天照皇大神、豐受大神、建御名方命、文德天皇仁壽三年高田の東北畚野に創建し、堀家時代に福島に遷り、高田築城と共に今の地に遷座し、明治十五年六月郷社に列せらる、
 ▲春日神社。(壑春日)祭神武甕槌命、經津主命、天兒屋根命、姫神、文正元年上杉氏府内に勧請す、爾來春日山城と共に移り、慶長十八年四月現今の地に鎮座し、明治五年村社に列せらる、
 ▲關町神明宮。(關)祭神天照皇大神、創立年代未詳、初め春日山に鎮座せしが後福島に移り、高田築城と共に今の地に轉す現に村社たり、
 ▲出丸神明宮。(出丸)祭神天照皇大神、高田鬼門除の神として舊藩の氏神たり

今村社に列す、

直江八幡宮

▲直江八幡宮。(直江)祭神譽田別命、息長足姬命、玉依比女命、往昔直江の里に鎮座して江野神社と號す、後高田に移り村社に列す、

陀羅尼八幡宮

▲陀羅尼八幡宮(陀羅尼)。祭神品陀命、元榊原家の尊信厚かりしと云ふ、

招魂社

▲招魂社。(金谷山)明治戊辰の役、越後口合戦の時官軍に従うて戦歿せる土人二百二十四人を祀る、

高田藩士 八十六人 鹿兒島藩士 六十四人

山口藩士 五十五人 豊浦藩士 十六人

親兵(川津) 三人

右の内著名なる鹿兒島藩士中原猶介(三十七才)の辭世

よしや身は越路の雪に埋むともさくる清水に名をやながさむ

川村宗之丞景範(十九才)は故海軍大將川村純義の義兄に當り、西郷吉次郎隆廣(三十六才)は西郷隆盛の弟、市來喜初次政雄は隆盛の從弟なり、

瓦焼稻荷

▲瓦焼稻荷。(新須賀)稻荷大明神を祀る、高田築城の際此境内に瓦を焼きしと云ふ、文化年中塚田五郎右衛門、新中江用水開鑿に際し此神に祈願して功成就せりとて新中江用水組の尊信厚し、

猫俣稻荷

▲猫俣稻荷。(土橋)天和二年二月二日桑取谷に猛獸現れ害をなすこと甚しかりしかば、同年六月二十五日之を狩り殺す、中野俣里正吉十郎爲に死す、狩り殺せし猛獸猫俣を祀りしは此祠なり、

乙吉稻荷

▲乙吉稻荷。(馬出)舊藩時代の町奉行所の裏手に在りて昔乙吉丸と云ふ貴人住みし所なりと云ふ、

◎佛寺

淨土眞宗

▲淨土眞宗、

善福、眞宗、淨國、常榮、照蓮、本覺、寂勝、光國、最尊、願念、願重、金光、唯願、西光、光照、長福、養福、善念、寂賢、圓福、長樂、了源、本淨、祐正、滿願、專稱、勝見、玄與、正念、正光、淨正、明善、淨蓮、法林、安傳、林西、常念、念妙、長圓、安養、王梅、雲妙、光運、照行、蓮受、勝應、明嚴、流源、上宮、光勝、長徳、樹徳、最賢、善福、淨照、常念、專念、淨林、正蓮、林西等の諸寺の外著名なるは次の如し、

高田別院

▲高田別院(上寺區)。大谷派本願寺の別院にして、享保七年六月、元小栗美作の

淨興寺

本誓寺

瑞泉寺

中戸常敬寺

扣地大六屋敷に建立す、毎年九月二十三日より六日間の引上會には當町の賑ひ無双なり、

淨興寺(中寺區)。歡喜踊躍山と號す、元仁元年常陸國稻田に建立、本宗開闢寺號初の靈場たり、上杉氏の招により春日山麓に堂宇を建てしが高田築城と共に今の地に移り、明治二十一年五月見真大師頂骨塔を建て納骨所を設く、境内に聖徳太子堂及び天満宮あり境内末寺九ヶ寺あり、

本誓寺(下寺區)。笠原御坊と云ふ、井上滿政親鸞に歸依し、落飾して教念と稱し、信州笠原に創立す、十世超賢戰亂を避けて加州小山に移り、後霜臺公の招きによりて福島に移る、堀氏福島城に築くや、高田に移る今の本誓寺町は其跡なり、松平氏高田に城くに及び復今の地に轉す、脇坊八ヶ寺あり。

瑞泉寺(横春日)。永久三年下總にありて勝願寺と號し、越中井浪瑞泉寺と同宗なり、後信濃に移り、慶長年間松平忠輝に招かれて今の地に移る、明治六年焼失して未だ再建せず、

中戸常敬寺(裏寺區)。弘安年中親鸞の孫唯善房開基たり、惟康親王の恩遇を受け、龜山法皇勅額を賜はり中戸山西光院と云ひしが、第六世善鸞の時常敬寺

性宗寺

淨土宗

善導寺

小栗美作墓

天崇寺

と改め、文祿年間當國に來る、「すだれの御名號」と云ふを藏す、

性宗寺(下寺區)。高雲山最照院と號し、眞宗佛光寺派の別院にして和田御坊と稱す、貞永元年親鸞の弟子信性の開基にして見真大師越後謫居時代即ち親鸞三十五歳の寫影を藏す、

▲淨土宗。來迎、淨林、大巖、稱名、慶法、素叟、光樹、近藏、大仙寺洞仙庵等の外著名なるは左の如し、

善導寺(中寺區)。文明五年(一説寶徳二年)蓮開直江津に創立し修南山と號す、善導大師の像を安置し後今の地に移る、境内に左の墓所あり、

●小栗美作墓。美作が中江用水江を經營せしを徳として同用水組合は明治に入りて此墓を建つ、美作又善導大師を尊信する事厚かりしと云、

●天崇寺(上寺區)。元法久山長恩寺と稱せしが明治二十年十二月同宗極樂寺と合併して今の名に改め、極樂山と號す、天正年中上杉霜台公の開基にして四百石を給せらる、松平光長の入部するや菩提所と定め東照宮を境内に建つ、境内に左の墓所あり、

有栖川宮御一代好仁親王殿下御墓所

●有栖川宮御一代好仁親王殿下御墓所

妃殿下は高田城主松平光長の妹にして父は越前侯忠直母は高田姫なり、初め龜子と申す、二代將軍秀忠の養女となり寧子と改めて寛永七年後陽成天皇の皇子高松宮好仁親王の妃となる、(高松宮は三代目にて)寛永十五年親王薨去後第二王女と共に高田に歸り給ひ、城内三の丸の御殿に春花秋月に詠じ給ふ事二十八ヶ年、延寶九年一月十七日六十五歳を以て薨せらる、寶珠院殿光譽摩冲意大姉と諡して此處に葬り奉る、

高田姫墓

●高田姫墓

寶珠院殿御墓と相並びて東面して立つ、姫は高田町民の恩人として崇めらるゝ人にして徳川秀忠の女なり、勝姫と稱して越前宰相忠直に嫁し、光長龜姫外一女を擧げしが忠直幕府に忌まれて豊後に流され光長高田に封せらる、寛永十年光長と相伴ひ初めて入部するに當り町民への土産として、地子錢を免除す、之れに依りて高田町民は、納税の義務を免せらるゝ事二百三十餘年以て明治維新に及ぶ、姫寛文十二年江戸に歿するや天崇院殿穩譽泰安豊壽大禪定尼と諡し牛込の天徳寺に葬りしが遺言により三回忌に當れる延寶二年今の

高源院墓

●高源院墓

處に改葬し此墓を建つ、

妃殿下の御墓と道を隔て、南方斜に相對す、越前宰相忠直が豊後の配所になりし頃の女にして、永見市正同大藏の妹なり「おかんの方」と呼び、越後中將家の重臣小栗美作に嫁して掃部大六を生む、美作が主君光長の嗣無きに乗じ、大六を立てんと陰謀より越後騒動の慘劇を演せしものにして、抑此おかんの方の美作に嫁せしが原因をなせしものなりとの説あり、高源院は寛文五年五月十五日即ち越後家取潰され美作死刑に處せられし天和元年より十六年前に落命し、高源院殿清譽春法大姉と諡して此處に葬る、

▲曹洞宗

洞仙、久昌、高禪、孝巖、養徳、海隣、正眼、神宮、天林(延命)、國巖、宗恩、眞慶、慈詳、瑞峯、光榮、高安(觀音)、太岩、長徳(延命)、淺溪(延命)等の諸寺及び左の寺あり、

常國寺

●常國寺(藪野)。結城三郎左衛門尉政勝の開基にして初め越前にありしが、光長に従つて今の地に移り、頸城三島二郡の曹洞一派の總祿たりしが今はいたく

衰頹す。

臨濟宗。正輪寺。

法華宗。

常願、善行、養明、妙國、壽遠、常國、顯本、法顯、淨法、長遠、常顯寺及び左の日朝寺あり、

日朝寺
毘沙門堂

日朝寺毘沙門堂(中寺區)。初め直江津にありて眞言宗なりしが文永十一年日蓮佐渡より赦されて歸るや之に歸依し吉祥山日朝寺と改めて法華宗となる、後上杉氏に従ひ米澤に移る、十三世日用今の地に堂宇を造營し毘沙門天を安置す、毎月廿五日を縁日とす、

眞言宗

華園寺、寶藏院、本寬院、密藏院(師)、金藏寺(虚空)、威徳院(金比)、及び左の寺院あり、

大杉毘
沙門堂

大杉毘沙門堂(上寺區)。元春日山にありしを後此地に移す、總持寺と號し二百石を領せり、堂は上杉氏陣小屋を其儘に建設せしものにて縁は鴛鴦にして人の歩むごとに聲を發せしが明治三十一年火災に罹りて今はなし、境内に忠輝

時宗

の寄附せし八ッ房梅の老樹及び巨大の老杉ありしが明治四十一年伐採しぬ、

稱念寺

稱念寺(中寺區)。西方山無量壽院と號す、正慶二年國府に創立し應稱寺と云ふ開山遊行六代一鎮和尚(世に撥上)の開基たり、元百五十石を領し、今に上杉堀兩家より下賜の文書を藏す、境内長阿彌有親の塚あり、

黃檗宗

▲黃檗宗。

慈眼寺

慈眼寺(中寺區)。福聚山と號す、黃檗山二世紫雲木庵和尚の開山にして、開基は中島善右衛門なり、稻葉氏時代に其老臣稻葉勘解由周旋勸むる處ありて貞享年中創建す、

佛教諸
團體

▲佛教諸團體
敬愛會は善導寺に事務所を置き、是眞會は本誓寺に事務所を置き共に僧俗の佛説研究の機關たり、

基督教
會

◎基督教會

▲日本メソジスト高田教會(岡島)

辯護士事務所

▲日本聖公會高田講義所(下小町)

◎辯護士事務所

附公證人及執達吏役場

和泉(一ノ橋)。宮川(馬出)。石塚(吳服)。川上(中小)。小瀧(新須賀)。松本(岡島)。神岡(新土橋)。寺澤(上職人)。栗原(一ノ橋)。諸氏の辯護事務所を置く、大鹽公證人役場は上小町に在り、瀬上及小出執達吏役場は岡島にあり、

銀行

◎銀行

- ▲株式百二十九銀行(吳服)明治十二年創立資本金百萬圓
- ▲同 成資銀行(上小)明治十四年創立資本金五十五萬圓
- ▲同 貯蓄銀行(府古)明治三十三年創立資本十萬圓
- ▲同 直江津倉庫銀行支店(横春日)
- ▲同 直江津銀行支店(關)
- ▲同 長岡銀行支店(下小)

會社

上越電氣株式會社

- ▲同 越後銀行支店(下紺屋)
- ▲同 商業銀行(下小)

◎會社

- ▲上越電氣株式會社。(須賀)創立明治卅九年資本卅萬圓、發電所を名香山村大字大谷内藏々に置き、關川の水を引きて八百馬力の電氣を發興し、新井高田及高田附近直江津及其附近の點燈及電動機に用ゆ、點燈は四十年五月三日開業し、四十一年の末には一萬燈に供給せり、本年に入りて電燈の需用益々増加し九月中旬更に八百馬力の發動機を起工せり。
- ▲高田製糸株式會社(關)創立明治廿八年同六千圓、
- ▲田端協盛舎(下田端)創立明治十七年同四千八百圓、
- ▲高田機業株式會社(下職人)創立明治三十三年資本三萬圓、
- ▲株式會社信慶商會(關)創立明治卅八年資本金二萬圓藥品教育品販賣を業とす
- ▲盛益合資會社(中小)四十物商、
- ▲高運合資會社(桶屋)運送業、

工場

▲開運合資會社(桶屋)運送業、

◎工場

▲山九鐵工場(鍋屋)創立慶長十七年鍋釜器械製造、

▲信慶酒造場(關)創立文化十二年清酒製造、

▲高田羽二重會社(西會所)創立明治卅三年六月羽二重製織業、門前に有明の松あり

何一つのこゝろやど、思ふなよ松の梢に有明の月

越後家の臣 某

◎市場

市場

元下小區に縮布市ありしも、勤番時代に其株を小千谷に譲れり、又堅春日横春日兩町に隔年馬市ありしも今は絶えぬ、現行はるゝは左の如し、

▲下小町夜店。明治十一年より初まる六月ヨリ開市、九月マア

▲植木市。高田別院お引上會の際、四方の植木商横町に集つて植木市を開くを例とす、

◎著名商店

著名商店
吳服太物商

▲吳服太物商 (四十戸)

洋服商

丸山(吳服) 旭屋(上小) 八木太(上小) 松屋(中小) 渡部(吳服) 梅川(下

紺屋) 佐藤孝(下紺屋) 平井(横春日)

▲洋服商 (二十五戸)

廣島屋(吳服) 飯塚(上小) 佐藤(吳服) 西澤(吳服) 本野(職人町)

▲洋品商 (八戸)

吉休(堅春日) 吉田(吳服) 丸山(吳服) 齋藤(中小) 倉石(中小) 多田金

(下小)

▲時計商 (二十八戸)

中野(吳服) 榎野(上小) 樺澤(下小)

▲書籍商

西澤(吳服) 室(吳服) 高橋(吳服) 玉川(下紺屋)

▲筆墨商 (十二戸)

成章堂(吳服) 好文堂(同上)

▲紙商

鈴木(吳服) 小川(横) 竹ノ内(下紺屋)

寫真師

▲寫真師 (九戶)

鹿野(善導寺前) 柴田(同上) 西卷(兩替) 大島(横) 沼(相生) 河原(下小)

長尾(馬出) 小熊(吳服) 渡邊(尾張)

▲印刷業 (六戶)

高橋(中小) 和久井(同上) 光山(横春日) 早坂(馬出) 高田印刷會社(吳服)

▲藥種商 (七戶)

信慶(關) 町田(吳服) 高橋(下紺屋) 小川(下小)

▲陶器商 (九戶)

加藤(吳服) 森(同上) 伊勢屋(長門)

▲小間物商 (二十四戶)

森平(吳服) 谷原(同上) 石澤(上小)

▲金物商 (九戶)

山九(鍋屋) 吉田(横春日) 鍋屋(吳服) 小川(下小) 栗原(中小)

▲菓子商 (五十二戶)

長谷川(關) 高橋(横春日) 敷島屋(堅春日) 小川(吳服) 石橋(同上) 見波

茶商

(同上) 袋輪(上小) 木村(中小) 多田屋(下小) 陸奥屋(下小) 吉田(鍋屋) 大杉(土橋)

▲茶商 (二十戶)

加藤(吳服) 塚田(下小) しほの友(上職人)

▲味噌醬油商 (十戶)

水野(堅春日) 西卷(吳服) 上田(桶屋) 田中(田端) てんまや(陀羅尼) 町

田(直江)

▲酒商

信濃屋(關) 保坂(府古) 武藏屋(中小)

▲四十物屋

小林(關) 石(横春日) 竹内(堅春日) 一小(上小)

▲旅館 (五十五戶)

三館(上職人) 高田館(下小) 茨木(同上) 上原(吳服) 大坂屋(同上) 高陽館(相生)

▲料理屋 (三十九戶)

高陽館(相生) 柳糸郷(同上) 長養館(淨興寺前) 上越俱樂部(善導寺前) 太
田樓(下田端) 山口屋(上田端) 近藤屋(上田端) 寶家(馬出) 紀伊國屋(下
田端)

▲牛肉屋

牛安(濠端) 喜樂亭(吳服) 千歳(桶屋) 加藤(堅春日)

▲牛乳屋

高築舎(上等) 横田(上寺) 新潟屋(四ノ辻) 金子(作事)

骨董商

▲骨董商 吉田(吳服) 竹本(同上)

彈藥商

▲彈藥商 陶山(上小)

荒物商

▲荒物商 陶山(中小) 小妻屋(下小) 五十嵐(堅春日)

靴商

▲靴商 竹内(吳服) 浦澤(同上) 山善(同上)

◎娛樂

俳諧

▲俳諧。元祿二年芭蕉翁奥州を廻りて七月當國に來り、直江津の左雪亭右雲亭
を訪ひ、當地にて病み、藩醫細川昌庵に治を求めたり、其時の句に曰く、
藥欄に何れの花を草まくら
昌庵は脇を付けて曰く
萩の籠を卷あける月

此頃より高田に俳句流行し、今は其隆盛を極む、著名なる雅會は左の如し、

無名會、高陽吟社、魁青吟社、ニツケル會、

和歌

▲和歌。舊藩時代より上下の好む處にして大河内直信、中根貞信の名流あり、
現今著名なるは八雲會と云ひ毎月雅會を催ふす、

詩文

▲詩文。當地には有終文社とて詩文を樂む會あり、隨時隨所に雅遊を開く、
▲畫家。故人としては増田佳堂(鳥) 倉石乾山(山) 青木坤山(人物) 富岡九華

畫家

(山) 樋口雲仙(花) 等名高く、現今吉田玉潤(四條) 菅井蘭亭(南) の諸氏あり、

圍碁將

▲圍碁將。天保の頃藩士に萩野良左衛門と云ふ人ありて將碁は五段碁は上上

の初段たり、其他に富河岸嘉左衛門、宮川嘉兵衛、齋藤彌助、森左馬之助等の名手ありたり、今園基には宮川小一郎氏三段、和久井太三郎氏二段、鹿野浪衛氏初段たり、

謠曲能
狂言

▲謠曲能狂言。高田には榊原家が御國流と云ふ謠曲を姫路より持ち來りしも流行せざりき、又寶生流も同時に持ち來りしが文化文政の頃箕高五郎江戸より流浪して新井に來り教へしより流行す、維新後直江津人渡邊巖此流の名手たり、觀世流は安政の末年佐渡の人遠藤藤九郎の來つて教へしより盛んに流行す、其高弟に牧野角馬あり、牧野氏の高弟にして現存の名手は來海田中益子の諸氏なり、狂言には森繁右衛門名人たり、其門人にして現存せるは石橋町田の諸氏なり、

茶道

▲茶道。高田に於て茶道の名家には文化文政の頃鈴木甘井あり、荒井宗二、森繁右衛門、瀧見九郎兵衛等も名手たりしが皆物故す、荒井宗二の門人にして千家流の名手には三上氏保坂氏あり、古川氏は高陽女學校に教ふ、

插花

▲插花。初め貞因齊岡部一操遠州流を教へたるを元祖とす、後大沼田誠清風流を教ふ、今日名あるは黒田二所宮山口齋藤の諸氏なりとす、

琴曲

▲琴曲。むかし淀野塚田等の女流の名手あり、府古町上小町にも教ふるものあり、今日の名手は園田河端の女流とす、

獵と漁

▲獵と漁。獵場としては御殿山、愛之風、岩木山、春日山、五智けんたい沖、大瀧等高田に近し、告天子黄鳥等は金谷山相包、門前沖、木田、西村裏等可なり、

網は蘇、石橋、釣魚は關川、保倉川、新川、瀧川、犀ヶ池、朝日池其他近郊に其場所乏からず、

大弓

▲大弓。馬出しに五樂亭あり、下小町にもあり、

玉突場

▲玉突場。馬出しに在り、高田俱樂部といふ

相撲

▲相撲。舊藩時代には儉約の趣意より芝居相撲其他の勸進は町内に於て容易に許さざりしが、榊原政令の時代に赤倉にのみ興行するを許可せり、蓋し赤倉開拓上の政略なり、徳川幕府の末葉より其禁漸く寛となりぬ、相撲にては東京大相撲を中寺區金藏寺境内に興業するを定とし、花相撲は神社佛閣の境内に興行するを例とす、頸城より名力士を出したる事も少からず、安永年間上曾根より出でたる九文龍、直江津人越の海の如きは其名天下に聞ゆ、

劇場	見世物	寄席	藝妓	遊廓
<p>▲劇場。昔は芝居の興行を禁せられしが、維新以後東京より名優の來高する事も少からざりしかば、田端に大漁座建築せらる、明治三十三年株式會社田端大漁座を組織し、演劇の外貸席を營業とせしが四十一年大改築工事を起し、同年十一月一日開場せり、</p>	<p>▲見世物。舊藩時代には一切の見世物は別院淨興寺本誓寺の引上會に許すのみ祇園には機械を公許せりと云ふ、今日に於いては町内の到る處時の如何を問はず諸種の興行物を見受く、</p>	<p>▲寄席。吳服町に高盛館と稱するもの一箇所のみ、高盛館は明治三十二年十二月株式會社の組織となる、他町にありては臨時民家を用ゐて興行す、</p>	<p>▲藝妓。舊藩時代高田には藝妓なるものなく、宴席の餘興には座頭若くは替女を用ゐるのみなりしが今日に於ては藝妓百四十七人を數ふるに至れり、</p>	<p>▲遊廓。維新前は妓樓を高田に置く事を禁ず(直江津に)然ども横區三十一戸中廿八戸は旅籠屋の名稱の下に雇人を留女或は飯盛と唱へて醜業を營む、維新後貸座敷公に許さるゝに及び、年々増加し、今や娼妓百八十一名を數ふるに至り樞要の位置にありて風教に害ある甚だ大なるを以て、五分一に移轉せり、</p>

◎年中行事

年中行事	一月	二月	三月	四月	五月
	<p>▲一月 元日四方拜、官民合同新年宴會商家其他一同休業年賀廻禮、二日買初め、書初め三日元始祭、七日七草、八日陸軍初め、十一日藏開き、十五日十六日蕨入り、三十日孝明天皇祭、</p>	<p>▲二月 寒明き(節分)、十一日紀元節、</p>	<p>▲三月 十日陸軍祝日、十五日涅槃、春分日彼岸中日春季皇靈祭、</p>	<p>▲四月 一日野砲兵第十九聯隊紀念祭、三日神武皇天祭、節句、十三日善導大師萬部經(善導寺)十五日騎兵第十七聯隊軍旗祭、二十五日より二十六日金谷山招魂社春祭、三十日輜重兵第十三大隊紀念祭、</p>	<p>▲五月</p>

六月

六日七日招魂祭、七日より八日乙吉稻荷祭、八日釋尊降誕會、金谷薬師、密藏院薬師祭禮、九日より十一日秋葉神社祭禮、十三日より十四日榊神社春祭、十四日より十六日日枝神社大祭、十六日高田中學校創立紀念運動會、十七日より十八日春日神社大祭、十九日より二十日出丸神明祭、廿五日より廿六日關町神明地久節、三十一日田端稻荷祭、須賀町稻荷祭、此月諸學校に運動會あり。

▲六月

七月

一日須賀町稻荷祭、田端稻荷、梵天祭、五日節句、猫俣稻荷祭、十三日鹽荷谷虚空藏、廿一日より廿八日淨興寺報恩講、廿三日より廿四日長徳寺、延命地藏廿五日より廿六日天満宮祭(淨興)

▲七月

八月

七日より十五日祇園會、十九日より、廿一日瓦焼稻荷祭、二十五日天神堂祭、一日頃より中元賣出し、七日より八日お蟲干(寺町)八日歩兵第五十八聯隊軍旗祭、九日より十日濱觀音四萬六千日、横手の鬼子母神、太岩寺閻魔、十三日より十

▲八月

九月

七日干蘭盆招靈式墓參、十九日より二十日日枝神社祭、

▲九月

七日より十日中戸常敬寺お引上會、八日須賀稻荷、九日より十日五ノ辻稻荷、十四日榊神社廿三日より廿八日別院引上會、秋分日彼岸中日秋季皇靈祭、廿五日より廿六日金谷山招魂社秋祭、

▲十月

二日より六日稲田光明寺引上會、九日菊の節句、十五日より十六日日枝神社、十七日神嘗祭、廿五日關町神明宮祭、

▲十一月

三日天長節、二十一日より廿八日淨興寺引上會、二十三日新嘗祭、二十五日より三日間恵比壽講、大師講其他一向宗各寺の報恩講引上會、日蓮宗の御妙講御十夜等あり、

▲十二月

一日川浸餅、下旬歳暮賣出し、大みそか總勘定、歳暮禮、

▲月々

月々

八日密藏院薬師、九日十日金毘羅、二十二日太子講、二十五日日朝寺毘沙門縁日、

著名産物

◎著名の産物

舊藩時代の名物として人口に膾炙せるは、加賀屋の鳥犀圓、茶屋町お焼、長谷川餡餅、お秀饅頭、茶町白餅、景勝團子、追分饅頭、栗おこし、鍔鍛冶等ありしが何時の頃にか衰頹若くは廢業す、其内にて連綿として榮ゆるは左の數種なりとす、

鑷子

▲鑷子。下紺屋區うぶけや製造販賣す、其種類に鬚毛拔、鬚毛拔、鼻毛拔、睫毛拔、楊子毛拔、襟毛拔、刺毛拔、節拔の八種あり、うぶけ家の元祖小林七郎右衛門初め越前に製作しつゝありしが、慶長年中越後に移り、鑷子師肥後大塚と銘をうち藤原喜宿と號す、後高田に轉じ城主より今の屋敷を賜はり其業を營む事十一代現主に及び、製品は鐵質柔軟にして折曲せず、放壓適宜、交及整齊を以て世に稱せられ高田の一名物たり、

栗飴、翁飴

▲翁飴。昔より高田の一名物として天下に其名を知らる、享保年間高橋

孫左衛門初めて製出す、後研究を積み、寛政年中淡黄透明之を堅めて久しきに耐へ味甘美にして滋養に富める良品を精製することを得たり、今は高橋の外市内諸所に製造すれども大杉石橋諸店を有名とし、近來香料入翁飴を案出せり、

虎肉丸

▲虎肉丸。舊藩主榊原家の秘法にして舊藩醫杉本文伯の子孫世々製薬に従事す

五香湯

▲五香湯。吳服町森繁右衛門家傳の婦人薬にして、昔より高田の一名産たり、

鑄物

▲鑄物。鍋屋區鑄物師山岸九郎兵衛は慶長十七年五月創業以來、鍋釜梵鐘其他器械類を製造し、下越佐渡信州地方へ輸出す、

羽二重

▲羽二重。高田羽二重會社にて製出する羽二重産額は新潟縣の首位を占め、輸出品として好評あり、

葡萄酒

▲葡萄酒。岩の原葡萄酒園にて醸造の純粹菊水葡萄酒は當地にて販賣す、

バテン

▲右の外。バテン、木綿縞等の製品を出す、

舊址

◎舊址

高田城址

▲高田城址。高田城は關の庄に在りたるを以て關城と云ひ、築城工事中鉸の齒

城内

外廓

を發見せるより鮫ヶ城と稱し、其形より螺城と呼び、又高陽城の別名あり、慶長十九年松平忠輝の築く處、繩張は伊達政宗、繩取は片倉小十郎城和泉守にして、前田溝口村上眞田仙石上杉蒲生南部津輕相馬佐竹最上等北陸奥羽の諸大名工事を扶く、總面積七十二町步、本丸二の丸三の丸に分ち結構頗る壯大なり、

本丸東西百三十四間、南北百四十四間、内堀一名やげん堀、地獄堀、を廻らし、淨真郭と稱し、三橋、南極樂橋、北御茶屋橋、東繩手橋、を架して、二の丸に通ず、郭内城主の第宅を構へ、三重檜檜臺多門檜御茶屋臺諸寶庫を設く、

二の丸東西百五十間余、南北二百七十八間、郭内虎の丸、必勝郭、北の丸、卍曲輪、矢込曲輪、栗木曲輪、榛林、人質曲輪に分ち、濁堀橋留を廻らし、柳橋舟留橋を以て、三の丸に通じ、御花畑、茶屋、武具庫、諸番所等あり、

三の丸、虎亂郭、陽戰曲輪、八幡丸、狐丸、又山、狐丸、里丸、瓢箪曲輪、琵琶島、琵琶島、等に分ち、外堀堀桶水等の字あり、を廻らし、城代屋敷諸役所諸番所米藏武器庫等を置く、

大手門は三の丸虎亂郭外にあり、長三十二間餘の橋を架して大手先に出つ、外廓。西面には一の橋口、幸橋口、土橋口、南面は關町口、馬場口、矢場下

城下總構

高田城の要害

御殿山

遊覽地

口、鹿取口、北面は稲田口、町小口、本誓寺町口、其他小路を開き、一の橋内北を總て不破曲輪、南を甲陽曲輪、蓮池より東二勝曲輪、東を出丸と稱す

城下總構。南伊勢町口、北陀羅尼口、東北角稲田口、東南角藪野口、西南角藪番口、西北角及物鍛冶町口とす、

高田城の要害。信濃方面には近く瀬端渡り大曲小出雲坂、遠く大田切小田切關川俗に中山道あり、越中方面には近く赤岩虫生、遠く姫川駒返り親不知、糸魚川城あり、下越奥羽方面には近く保倉川遠く米山峠、魚沼妻有三國方面には松の山郷の嶮難あり、北海を擁し山川嶮要を扼して頗る要害の地と號す、

△御殿山。市街の戌亥(西)北十餘町に在り、四つ池廻りて細手道あり、又尾上に池あり辨天池と云ふ、北方に當りて縮池あり、池水縮を洗ふに功あるより名く、此地元小栗美作の屋敷城にして堅固の構ありしが、美作城主光長の母高田姫に獻じ替地として大六屋敷(今別院境内)を賜はる、舊藩時代は要害の地とし火藥庫を置く、維新後私人の有に歸して開墾せらる、

◎遊覽地

市内遊覽地

●寺町。樹木蒼々として幽雅閑靜なる寺町一帯は、佛寺參詣に加ふる春夏秋の散策に適す、

▲市内遊覽地

別院、天崇寺有栖川御一代妃殿下御墓所、高田姫墓、おかんの方の墓、稱念寺長阿彌墓、密藏院藥師、善導寺小栗美作墓、淨興寺、日朝寺毘沙門天、和田御坊性宗寺、日枝神社、本誓寺、高安寺濱の觀音、大岩寺閻魔田丸中務大輔墓、等參詣の價あり、

市外遊覽地

▲市外遊覽地

●金谷山。市街の西南數町、禿山にして男山女山の二峰に分れ、眺望開濶北日本海を見、遙に米山を望み南妙高山を仰ぎ、俯して頸城平原を一眸の中に集め、高田市街は眼下に來る、山腹に藥師堂あり高田姫の勸請にして、醫王寺も亦其建立なり、越後中將時代には家老連の別莊地にして山屋敷と云ふ、墓地は榊原家時代に成り、招魂社は維新殉難の士二百二十四人を祀り春秋大祭を執行す、藥師堂の側に芭蕉翁の俳碑あり、
藥爛に何れの花を草まくら

愛之風

今は山上山腹に茶亭酒樓ありて客を待つ、(二十頁參照)

田舎なれども金谷の藥師 花の高田を眼の下に

●愛之風。市街の西北約二十四町、春日村岩木にありて字名奎太夫と云ふ、面積二十五町歩、上杉氏時代には家臣の邸宅ありし處なり、始め相の風と云へしが、明治十一年茶店設けられて遊ぶもの多きに至りて愛の風と改む、山海平野の光景双眸に集る近郊に得難き佳景なり、林中春はニラブサ、落夏は躑躅、秋は松茸シメヂを産す、

宇津保鑛泉

●宇津保鑛泉。高田の西北約一里の山中にありて元湯新湯の二に分れ、夏日浴客多し、

向橋湯

●向橋湯。金谷村にあり、鐵鑛泉にして疥癬疝氣に功ありと云ふ、此他湯谷、赤阪、瀧寺等に鑛泉あり、

上篇 高田繁昌記終

鐵道信越線の沿道

直江津町

中篇 高田以外上越の名所舊蹟

一、鐵道信越線高田直江津間の沿道(高田より直江年に下り、五智街道を経て高田に歸る)

●直江津町。

▲位置。高田の北四哩、日本海岸の要港にして信越鐵道の終點北越鐵道の起點、直富線の接續點に位する名邑なり、

直江津望春日山

宮内赤城

二水相逢向北流。人家簇立港津頭。西望春日山光碧。入道城墟古木抽。

▲名稱。初め府中濱と云ふ、元名古浦江間町又今町と云ふ、或は直江津江間町高田今町等の名ありしが。廢藩置縣後直江津と定む、

▲歴史。往古國府の所在地に近く、海上の便益あるを以て早く群衆の注目する處となりしが如し、白河天皇の頃直江次郎此地にありて豪族たり、北越の領主轉々更代するも直江家は依然土豪の位置を保ち、直江大和守實綱に至りて上杉霜台公の重臣となりなほ直江津を領す、山城守兼續之に繼ぎて名聲大に揚れり、上杉家會津轉封後堀家に屬し、其福島城を築くや當津の人民多く城下に集りしが、慶長十九年高田移城と共に再び高田に移り、爲めに津頭一時

寂寥を感せしも海陸の要路に當れるを以て四方の人民雲集し、間もなく繁盛の都會となる、高田藩は城下保護の政策として直江津人民を壓抑する事甚しかりしも毫も衰へずして維新に及ぶ、明治十九年信越線開通と共に勃興し、戸口日に増殖し市況月に加はる。今や海上は伏木佐渡新潟に定期航海の便あり、北海道の貨物又輸入せらる、陸上は信越北越兩線の集合するありて交通の要點を占め北海道の生産物を呑んで甲信兩毛に吐く、裏日本樞要の地たるを失はざるも、惜むらくは港口船舶の淀泊に便なく、北海の怒濤は貿易の利を殺ぐ事多し、

▲戸口。最近調査戸數二千五百八十三軒、人口一萬二千六百八十六人

▲官署 公共團體其他。

- 直江津警察署(川原) 停車場を距る四町、
- 直江津小林區署(川原) 長野大林區署管下なり、
- 高田區裁判所出張所(鹽谷新田) 停車場より六町、
- 直江津郵便局(新町通) 停車場より四町、
- 商業會議所(諏訪區) 明治三十二年二月創立、

米穀取引所(新町) 明治二十七年一月創立資本金十萬圓、

直江津新聞社(新町) 明治二十六年十二月創立、

右の外銀行及銀行支店五、會社工場十一あり、

▲交通。信越線によれば約十二時間を以て東京に入るべく、五時間を以て北越全線を過ぎ新潟に入るべく、乗合馬車の便は糸魚川方面に開けて、六時間乃至八時間を以て十一里を経過するを得、大島縣道によりて東郡に入る、海運は四月より開け、汽船御代島丸は當港と佐渡との間を隔日往復し、越中伏木間は朝夕出帆の便あり、十一月北海荒るゝや航海の難多く、港口不完全にして碇船に不便なり、

なこの海の朝けのなこりけふもかもしそのうらわに亂れてあらん 萬葉集

なこのあまのつりする船はいまこそはふなたなうちであへてこぎてめ 大日泰忌寸八千鳥

なこの海の霞のまよりなかわれは入り日をあらふ奥津白浪 後徳大寺左大臣

磯まくらこのうらの名のなほえつはふるさを見ゆる夢や結ふと 鯉川親世

渡越海到佐渡 龜田鵬齋

大瀧環繞波翻白 歷雨鞭風海色駭 莫怪荒砂飛石罅 朝來霜愴暮迴潮

戊辰殉難者の墓

直江津に於ける戊辰殉難者の墓 若州小濱の藩士山田庫之進(三十)

名古繼橋

墓は光明寺に、同藩士伊澤甚藏(三十)同中山石之助(四十)の墓は義經に因ありと稱する觀音寺境内に在り、

名古繼橋 往古荒川に架けありし橋を云ふ、今や其跡さへ知るに由なし

吹風のためにつけてふみみれごまだ渡らすよ名古の繼橋 烏丸光廣

いそきしも越路のなこのつきはしもあやなく我や歎きわたらん 和泉式部

いさしく戀路にまよふ我身かな名古の繼橋たはしくにして 夫木集

春の日のなこの繼はしなこやかに霞わたれるなちこの里 宗祇法師

杜若咲てや花のへたつらんさたはかくるゝ名古の繼橋 光俊

ありま川名古の橋渡られば世にふる道もあやふかりけり 式乾門院御匡

應化橋

應化橋 往下又は逢岐橋と云ひて荒川に架せり、福島城の高田に移るや

長松寺遺跡

橋名も共に移さる、舊橋の橋杭維新の頃まで水涵るゝ時認め得たりと傳ふ。長松寺遺跡 直江津鹽谷新田の眞行寺は謠曲「竹の雪」に見えたる長松

寺の跡にして、元の寺は桑取村小池に移る、昔直江某と云へるものあり、故ありて妻を離別し、一女某は妻に一男月若は自ら養ひ置きしに、後妻月若を惡み、夫の宿願ありて他所に參籠せるを幸ひ、雪積る一夜、後庭竹の雪を拂はせて無情にも庭口の戸を閉ぢ、月若をして雪中に凍死せしめしに、月若の

至徳寺遺跡

實母と姉とは人の知らせに驚きて駆け付け、折柄歸れる月若の父と共に、亡骸に取籠れるに、月若ふと蘇生しければ親子は悔恨の涙に搔暮れて、茲に長松寺を建立せりとぞ、

至徳寺遺跡

直江津停車場の背後に在り、今に字名を至徳寺と云ふ、上杉憲政の兒龍若の建立せし巨刹にして永祿年中霜臺公關白近衛前嗣を請せし時暫く旅館とせし所なり、上杉氏會津移封の時從ひ行けり、

路出府中尋一村 國師行道非猶存 歸度盡臥橋外 唯有松聲說曹門

備 万 里

國府舊址

國府舊址

太寶令によりて定められたる北越の治所は何處にありしか其墟址定かならねど國分寺八幡宮祇園社其他の名稱より推せば五智の東直江津の南に在りたるが如し、始めは國府、後には府内或は府中と云ひ、大手を大鹽口、搦手を居多とし、上杉氏の時代に御館と稱す、霜臺公が雄飛せし頃は春日山に本據を置きしも、尙府中館は存じて管領憲政を奉す、堀氏の來るや府内城を修理したる事ありしも、福島に築き後松平氏の高田に移るに及んで其址次第に荒廢し今は僅に御館川、御館橋に昔を偲ぶのみ、

入越府

備 万 里

福島城跡

福島城址

荒川橋を渡れば古城と云ふに到る、之れ即ち福島城址なり元此地方水仙の名所にて水仙原と稱す、今や舊址多く田畑牧場となりて僅かに殘壘を見るのみ、此城は堀忠俊徳川幕府の山城廢止令を奉じ春日山より移り築きしものにして、慶長十五年家臣中内訌起り、忠俊鎮定すること能はざりしを以て領地沒收せられ、同年松平忠輝來りしが、同十九年高田城に移りしを以て廢墟となる、

府中八幡宮

府中八幡宮

字八幡に在り停車場を距る四町應神天皇を祀る、神護景雲三年の建立にして上杉氏世々崇敬厚く、徳川氏の世も百石の朱印を領せり、境内幽邃老藤風致を添ふ、

諏訪神社

諏訪神社

字砂山停車場の西北三町、祭神は建御名方命、大山咋命、素盞鳴尊の三柱にして世に八王子と云ひ直江津全町の産神なり、祇園會は天王祭と稱して毎月七月七日神輿高田に上り駐まること七日間、十四日稻田より荒川を下り片原區の假殿に奉置すること二日、十六日夜に入りて本社に還

居多濱

○居多濱。名古の海は直江津町一帯の海岸を云ひ(又奈吳の浦)、居多濱は其西長濱の東北磯濱を呼び一に小田濱とも名く、

ふく風も名古の浦松ほのくさ霞む楯に春は來にけり
あた浪を立もへたてぬ越の海のもしほの煙高くもあるかな

不知誰人
税所 萬子

國分寺

○安國山國分寺。直江津の西十五町五智にあり、聖武天皇天平十三年國家安全を祈らんとて諸國に國分寺を建立し給ひしが本寺は其の一なり、本尊は丈六の座像大日、釋迦、寶生、藥師、彌陀の五體にして胎内佛は黄金の鑄像なり、開山は行基、僧房七十餘宇、輪奐の美當國に冠たりしが、後いたく衰へ、元和の頃俊海僧正之を再興してより叡山に屬し天台宗となり寺祿二百石を領す、今の堂は寛政年間の再建にして三重法華塔二王門經藏等、綠樹鬱蒼の間に立つ、寺域一萬餘坪、地高燥にして海を背にし、老松古杉楓櫻を交へ四季眺望佳なり、境内佐田介石の墓、算學者小林百甫の碑あり、同寺寶什中絹本着色夢窓國師像一幅は明治三十九年國寶に指定せらる。

堂宇如山冠海涯 如來盛五寶蓮華 白首聞昔得明眼 梁上至今留琵琶 僧 万 里

竹の内草庵

○竹の内草庵。國分寺の境内にありて親鸞堂とも云ふ、土御門天皇承元元年三月親鸞三十五歳にして越後に流され、名を藤井善信と改めて京都を發し、頸城の郡司萩原民部少輔年景の館に着す、同年四月此草庵に移り配所の月に詠すると前後六年、順德天皇建曆元年十一月赦され翌年八月京に歸らんとして自ら木像を刻み此草庵に遺す、今の本尊是也、

鏡の池

○鏡の池。五智街道の傍にあり、親鸞此池水に姿を映じて木像を彫刻せられたりと傳ふ、池の東岸に日の丸の名號堂あり、親鸞曾て居多神社に參詣し弘法を祈念せられけるに、夕陽波に映じて微妙云ふべきなかりしかば、親から朱の丸を染め六字の名號を記して、

末遠く法をまもらせ居多の神彌陀と衆生のあらむ限りは
の一首を添へ、此宮に納められしを傳へしなりと號す、

居多神社

○居多神社。國分寺の西南二町に在り、大國主命を祀る、貞觀三年彌彥神社と共に從四從下を授けられたる式内の古社にして、弘安四年元寇襲來の時は正一位を授けらる、近世まで田祿百石を供せられ、今は縣社に列せらる、始め躬能輪山に鎮座ありしが、慶應二年山崩の爲めに移轉し、明治十二年四境

鐵道信越線の沿道

岩戸の窟

の南なる松山に新殿を建つ、然るに近年祝融の禍に罹りて傷く荒廢せり、
天の原くものよそまで八島もる神やすしき沖津沙風
北國紀行

愛宕神社

●岩戸の窟 國分寺の西十餘町郷津より南、山路八町の處にある神代の
古蹟岩殿窟を云ふ、大國主命はるく出雲より此處に奴奈川姫を訪ひ、建御
名方命を生み給ひりと傳ふ、僧行基國分寺草創の際此地を相して奥の院とな
し親作に係る丈餘の金界大日如來を安置す、明治三十九年國寶に指定せ
らる、往古は僧舎十二坊ありしと云へども今は明靜院の一寺存するのみ、

光源寺

●愛宕神社 居多神社の南二町、地高くして前に愛宕池あり、延暦元年の
創建にして伊弉諾尊及び軻遇突智神を祀る、始め愛宕大權現と號し春日山麓
にありしが、上杉霜臺公今の地に遷し二百石を寄附す、社に公の軍扇及び祈
願文を存す、今は氏子惣代中澤氏奉藏す、

小丸山

●光源寺 國分寺の南二町、國府御影堂と號し、眞宗大谷派に屬す、堂後
に小塔あり村上義清の墓なりと傳ふ、
●小丸山別院 愛宕神社の東方に在り、本派本願寺の別院なり、親鸞國
分論居中散歩の際及れし柳清水又袈裟掛の松あり、後人の松の根に草庵を結
び阿彌陀如來を安置して親鸞の舊跡を紀念せしに、天明年間本願寺法如の勸

春日山城址

めに依り一寺を建つ、明治九年大谷光尊別院とす、伽藍清麗、愛宕池に臨み、
清肅の氣人を襲ふ、

●春日山城址 一名鉢ヶ峯と稱し直江津の南一里にあり、南葉連山の一峯を
占めて屹然として城址上越の野を睥睨し、日本海を脚下にして遠く刈羽蒲原
を眺め、信州街道より妻有方面に通ずる諸口を一眸の内に集むるを得る要害
の地なり、築城の年代不明なれども上杉霜臺公は此城を本據として能信越に
關東に雄飛し、勤王の誠意を致したり、當時山下の中門前中屋敷國分木田附近
は府城の一部及び城下にして霜臺公及び景勝時代には防備頗る嚴なりしな
り、今や尙城址本丸二の丸の字を存し、城樓佛閣の跡、家臣邸宅の址皆歴々
指點すべし、山頂古松あり後方に降れば當年の古井存す、

春日山頭鏡曉霞、驛驛嘶止有啼鴉、惜君獨賦能州月、不詠平安城外花、大槻磐溪
世平城壘久荒廢、客子登臨想壯圖、竹杖生風塵動騎、鐵槍橫月際吟猿、安積良齊
一群窮鳥開懷入、幾輛精鹽向敵輸、義風矯然知白日、老姦猶欲託孤雛、
涙くむ人の爲みや春日山なほ水かれぬふる井なるらむ

本居豊頼

春日山神社

甲斐がれをふもこになして春日山をひゆる峰の高くもあるかな
春日山神社。春日山腹元老母屋敷跡に在り、霜臺公の遺徳を欽仰するもの協力して明治二十六年建立す、同三十五年五月廿八日皇太子殿下御行啓金幣を賜り、同年六月五日有栖川若宮親仁王の御登山あり、同三十九年十一月十五日縣社に列せらる、

原 宏 平

春日神社
林泉寺

春日神社。春日山麓にありて創立頗る古く、元五十石の神領を有せり

林泉寺。春日山東北の麓、中屋敷に在る曹洞禪院にして霜臺公の祖長尾重景の子能景の文安中に建立せし長尾家の菩提所なり、霜臺公幼時此寺に學び、長じて尊重せられしが、公歿して景勝會津に移るや、從ひ行きて今米澤にあり、其後堀家時代に舊址に再興せるは今の寺院にして朱印百二十四石を賜はる、什寶として霜臺公自筆の二大額面(元山門に掲ぐ)其他數種を藏す、境内左の墳墓あり、

堀秀政、松平綱賢、後中將、光長室、の墓、小峯原

堀秀政及秀治の墓、松平綱賢(越後中將)の墓、越後中將光長室(毛利秀)墓、柳原政岑墓、
小峯原。春日山より高田に到る途上藤卷大豆間にあり霜臺公の閱兵場

和敬孤兒院

たりし處なり、小峯原の東傍に古圖に示せる臼清水と云ふ井あり、清冽の水常に湧出す、昔前田侯參勤の往復霜台公の武威を慕ひ此原に休憩するを例とせりと云ふ、
和敬孤兒院。春日村大字木田に在り、

鮫ヶ尾城

一二、信越線高田田口間の沿道(高田より田口關川に至り更に) 荒川右岸を経て高田に歸る)
鮫ヶ尾城。高田より新井に向つて行く道の西方に當り稍山城の形を成せるものあり、之れを宮内なる鮫ヶ尾城とす、始め鮫ヶ尾城と稱す、天平中防人在營所の一なりと傳ふ、木曾義仲の郎黨此の城に據りて城氏と戦ひ、新田義治も籠城せし事ありと云ふ、上杉氏の時代に攝津守澄之據居す、霜台公歿後相續争起るや景虎に屬し、天正七年六月澄之景虎と共に力盡きて自殺す、同年九月片貝城主片貝式部能連は景勝の命により城廓を修繕して之に移り鮫ヶ尾城と改む、麓に斐太神社あり、

新井町

新井町。高田の南六哩に位する頸南の名邑なり、信州街道中山八宿の一にして元荒井と書けり、高田以南の商業の中心にして大鹿煙草の産地を控へ

鳥坂城

て小出雲煙草專賣支局あり、同町眞宗大谷派の別院は貞享二年の創立にして毎年十月下旬の報恩講は一六の市と相待つて市況を賑はせり、加茂神社は停車場より八町を隔て、別雷命を祀り今は村社たり、白山神社は停車場より二十町を距つ、小出雲は飯山街道の分岐點にして坂の東方三四町の處に狐塚の古墳あり、文化の頃此古墳を發掘して石劔曲玉管玉等を得たり、

鳥坂城

新井の南約一里鳥坂村にありて列車の窓外東に見ることを得る山城なり、一に雞冠とも書き城址方七町許、七百年前平家時代に越後に割據せる城氏の據りし處にして、魚沼の富坂、蒲原の鳥坂と相應じて北陸に雄飛せしが、源氏に亡ぼさる、

關山

關山

停車場は驛を距る數町なる田圃の中に置かれ、新井の南約七哩の處に位す、此驛は昔新井關川間の驛店ありて人馬絡繹たり、今は原及燕温泉に到る道に屬す、關山神社は關明神三社權現と稱し、天台宗寶藏院別當たり、朱印田百石を附せられ妙高山阿彌陀堂を兼帶せり、

原温泉

原温泉

關山停車場より西二里、妙高山の裾野に在る鑛泉にして火山丘より樋を以て通す、

燕温泉

燕温泉

原温泉の西南一里餘妙高火口原と火山丘との際なる湯河原に在り、泉質炭酸泉(華氏百四)にして無色透明皮膚病に特功あり、夏時浴客充満して頗る賑ふ。

赤倉温泉

赤倉温泉

田口停車場の西一里半、妙高山の裾野海拔二千五百尺の處にあり、背後には巍然たる妙高を仰ぎ、前には重疊せる青巒を望み、北の方頸城平野田畦村落一々指呼すべく、遙かに左島を水天の間に髣髴たるを眺め得べし、南方は信濃國、飯綱黒姫の諸山長揖し來り芙蓉湖水樹間に浮ぶ、空氣乾燥、風景山海を併せ、而かも車馬の便備はるは幾多温泉中に異彩を放つものなり、此の地文化十二年神原政令の開湯せるものにて來客年々多きを加ふ。

赤倉二十勝

三島中州

香嶽殘雪、米山浮雲、神名驟雨、黒姫斜暉、遊園鶯語、古池出聲、蓮湖明鏡、苗澤降龍、斑尾皎月、關田清暎、關川水鶴、關山汽烟、中山霧海、板郷稻雲、春日古壘、鳥坂壘壘、直江漁火、高田炊烟、左島青巒、越海白帆、

温泉は妙高火山丘地獄谷とて五千四百尺の高より引き來り元湯赤湯の二に分つ、泉質は炭酸泉にして温度百度以上、皮膚痔疾に功あり、轉地療養には

最も適す、

赤倉 六宜

南摩 羽峰

氣候清爽宜遊樂

眺望曠濶宜娛目

温泉渾沸宜醫病

常有鮮魚宜養體

人朴客少宜樂心

距鐵道近宜來往

浴舎旅館頗る清潔にして美麗、鮮魚常に日本海より來る、且つ浴中妙高山に登るべく、野尻湖に遊ぶべく、紅葉賞すべし、苗の瀧を見、信濃及び上越電氣會社發電所、笹ヶ峰牧場を視察するを得、或は一峰を越えて燕温泉に出づるも可也。

苗の瀧

●苗の瀧。

苗名瀧とも云ふ、赤倉の南二里許杉の澤にあり、一の瀧より四

田切

●田切。

關山より關川に至る間の崖谷にして、大田切小田切とて火山岩の斷

田口

●田口。

關山の南にありて信越國境の停車場あり、直江津へ二十三哩信州柏

上越電氣會社發電所

●上越電氣會社發電所。

田口の南約十町、名香山村字藏々にあり、列車

關川

●關川。

信越境上の山驛にして舊藩時代に關所を置く、頸城三關所の一にし

山寺舊跡

●山寺舊跡。

寺野村附近に山寺の舊蹟と稱するあり、往古裸形上人の開關

關田

●關田。

高田の東南五里余にあり、此時は上杉氏信州入馬の往來にあたり

山脈中石油を出す、

七つ坊主。毎日申の刻遠方より望めば關田山中自然に筒形の陸を現はすより此名あり、

●**箕冠城址**。鳥坂城址の北東板倉村にあり、上杉氏の時代に大熊備前守朝方、同越前守朝季の居城たり、

●**坊ヶ池**。青柳池とも云ひ櫛池村にあり、水深くして藍色を帯び、水面妙

高黒姫飯綱の諸山を浮べ四邊の山水頗る幽邃なり、里人云ふ此池に龍神住み半眼の鮒を産すと、池邊式内神社たる水島磯部神社及び櫛池あり、又石油の

産地として早く知られたる支藤寺及び達野あり、

●**菅原の里**。高田の東二里餘の處に岡の峯とて恰も軍艦を浮べたるが如

き清肅愛すべき丘あり、丘上菅原神社を祀る、岡の西武士村の物部神社と共に延喜式内頸城十三社の一にして往古隆昌なりし跡は、丘上の古墳と口碑と

によりて察すべし、今や丘上に園地を開き道路を通じ、學校を設く、これ亦上越の一名所たるを失はず、

眞玉付越乃菅原我不茹 人乃刈卷惜菅原

しらすりき越の菅原かれはてゝかりにもあはぬ契りなりきは

懸わびぬありしばかりの隙もかな越の菅原ひさめもりつゝ

萬葉集

家隆

衣笠内大臣

箕冠城址

坊ヶ池

菅原の里

鍋蓋御朱印

風卷神社

岩の原葡萄園

いつの世に跡をたれけむこゝにしも名もなつかしき越の菅原なりさまた人のからまくふしむらんじゆめはまじを越の菅原

權僧正公朝

顯季

宗禮

●**鍋蓋御朱印**。岡の峯の東丘、字深澤に眞言宗美福院高禪寺と云ふあり

大同二年弘法大師の開基にして一時隆盛なりしが、延應年中兵火に罹り、住僧越前に逃れ去りて廢頽を極む、會て最明寺入道時頼行脚の際同寺に一泊し

住僧高禪に有り合ふ鍋蓋に三石六斗と記し賜ひしによりて鍋蓋の御朱印とて珍重されしが、今や住む僧だになく、其鍋蓋の如きは何れに在るやを知らず、

●**風卷神社**。上杉村岡田にある郷社なり、天曆二年の創立と稱し、昔は

里五十公郷二十七ヶ村の總社たり、隣地所山田には山五十公郷八十三ヶ村總社たりし五十公神社あり、

●**岩の原葡萄園**。高田の東三里高士村字北方にあり、川上善兵衛氏の明

治二十三年六月より經營する處にして、園の面積二十餘町歩、葡萄の種類四百餘、栽培五萬株醸造高五百石に上る、菊水葡萄酒は其醸造する處なり、明

川浦

治三十五年五月、東宮殿下當國御巡啓の折有栖川宮殿下御同列にて御行啓の榮を負ひ、同年八月四日有栖川裁仁王殿下御視察の名譽を辱うす、
萬代の臣のかみさなりにけり流れもきよき菊の下水
東久世通禮

川浦

高田の東二里半、飯田川の右岸にあり、寛保三年徳川幕府陣屋を置き代官を派して直轄領五萬石を支配せしめし所なり、維新の際佐幕の徒古屋作左衛門六百人の一隊を率ゐ來つて高田藩を脅從せんとす、高田藩之を入れずして川浦に戦ふ、古屋敗れて松の山に奔る、時に明治元年四月二十六日にして越後に置ける戊辰戦争の初めなり、

鐵道北越線沿道

三、鐵道北越線沿道(直江津を基點として新潟(行の途上青森川に至る))

黒井

直江津の北東一哩六鎮の地にあり、停車場附近には日本石油會社の製油所(元インダ)及び直江津鐵工場あり、福島古城址も此邊に見るべし、

三分一

黒井停車場の東二十町、大永元年(一脱天)上杉定憲の長尾爲景と戦ひし古戰場なり、

功德寺の濱

黒井より瀉町までの濱を云ふ、

犀瀉

犀瀉

我なくも御法はつきじ功徳濱瀨陀と衆生のあらん限りは寒くとも袖につまんだの風彌陀の國よりふくま思へば聲なくばいかにそれとも知らまじ雪ふりかゝるあじ原の露草も木も枯たる秋の道のへに松のみひざりちりのこりけり

瀉町

瀉町

黒井より二哩餘を距て、犀瀉停車場あり、漁家點々松林の間に隱見す驛の東南八町の地に蜘蛛池瑞天寺及び千手觀音堂あり、大同三年弘法大師の開基と唱ふ、越後中將光長は高田の鬼門除災として再興す、

直江津より七哩の一驛にして、陛下北陸御巡幸の際御休憩遊ばされし處なり、停車場は御手洗池畔にあり、此邊を犀瀉と稱し七里の沿海松林遠く列なりて積翠滴らんとし林中松露防風を産す、東方六町にして朝日池に達す、

茶臼山城址

茶臼山城址

沙風にえやは向ひの枝も葉もそむきに立てる越の松原

瀉町の東北一里餘、明治村字手島にあり、建武年中より新田氏の一族河野彈正通信の居城たり、延元二年三月越前金ヶ崎城にて討死の後、家の子郎黨當城に據り高、上杉の強敵に抗せしが力盡き貞和年中落城す、次に上杉憲顯の將鐵(後黒金)攝津守居る、其後鐵上總介安朝に至りて霜

顯法寺城址

長峰城址

馬正面桃花

柿崎

親鸞の舊蹟

台公の命により喜平治景勝の傳たり、後年溜池築造の際、城址の一部を發掘して、青磁の皿、鐵瓶及び銚子等を發見し、今に同村に藏す、

●顯法寺城址

吉川村にあり、上杉氏時代の番城にして井崎治郎右衛門丸田左京將たり、其東方入河澤に吉江喜四郎の城址あり、

●長峯城址

鴻町の東北二十町犀ヶ池と坂田池との中間なる丘陵上に在り、元和二年七月牧野右馬允忠成上州多胡(三萬石)より移り來つて城く、同四年長岡に轉じて廢墟となる、

●馬正面桃花

柿崎の南十町縣道新井線の西にありて花時頗る美觀あり、

●柿崎

直江津より十哩を隔つる海岸にある名邑にして黒川吉川流域地の産物の集散地なり、高田區裁判所出張所、警察分署、郡立病院、郵便局、銀行等あり、往昔親鸞の舊蹟地とし名高く、越後十六家の一柿崎氏の城下なり、扇屋窓蹟。親鸞流されて當國に在るや、一日此地に到りて日暮たれば、扇屋に一夜の宿を求む、主婦應ぜざりしかば親鸞餘儀なく軒端に入り、石を枕にし笠の蔭に伏し、終夜稱名念佛す、主人之を聞き忽ち發心懺悔して親鸞を引入れたるに親鸞感に、柿崎にしぶく宿をとりけるに主人の心じゆくしたりけり

米山藥師堂

猿毛城址

枋窪の鑛泉

大清水觀音

●米山藥師堂

と詠じて九字の名號を書き與へしに、主人返歌して、
かけ通る法師に宿をかきけるにかきくれたりや九字の名號
翌朝親鸞扇屋を出て米山川を越え行くに扇屋の妻走り來り、妾にも御筆蹟をま乞ければ、親鸞則ち笈中より筆硯を取り出して六字の名號を畫き與ふ、世に之を川越の御名號と稱し此橋を見返り橋と云ふ、後親鸞親書の名號を納めて一寺を立つ之を淨福寺と云ふ、今上天皇陛下北陸御巡幸の際行在所なる、善導寺は淨土宗の名刹にして境内に柿崎和泉守の墓あり、

米山は頸城と刈羽との堺にある火山にして海より直に崛起すること三千二百五十尺、山容米俵を積みたる如くにして秀麗なり、山頂に藥師堂あり、往古五輪山と稱し泰澄の開基なり、泰澄自ら藥師像を彫刻して安置せりとぞ、毎年五月八日より十月八日まで山上に奉じ、十月九日山麓の別當米山寺密藏院に歸るを例とす、

●猿毛城址

かほれるや米山をろし一粒選

柿崎の東二里黒川村にあり、柿崎和泉守の居城と云ふ、上

●枋窪の鑛泉

杉憲政其臣篠窪某を置きしを以て篠窪城とも稱す、
柿崎の東北一里、天然瓦斯を以て鑛泉を温む、疝氣痔疾に功ありと云ふ、

●大清水觀音

鉢崎の西南二十町に在りて大泉寺と稱す、持統天皇の勅

願にして越前越智の泰澄建立せりと傳ふ、寺院の前山を降りて清泉あり、巖に流れて三段となる、上を關伽水、中を清淨水、下を功德水と稱す、泰澄居る事二年自ら千手大悲の像を彫刻して安置す、今の本尊佛是なり、上杉霜臺公の歸依深く景勝の時觀音堂に二王門を建て百五十石を給す、伽藍は明治三十九年國寶と指定せらる、

鉢崎

○鉢崎

鉢崎より三哩、米山峠の坂口にあり、今は鐵道山腹を通して米山三里と歌ひし昔日の難路を知らず、舊藩時代には關所を置きて警備せり、

僧 万 里

自柏崎行至柿崎。左山右海踏危巖。矮屏一夜波吹枕。不獨無何露旅衣。

旗持山

○旗持山

鉢崎の東米山の北西に在る孤峯なり、海拔一千百六十六尺、頂上平地十七間餘、永祿年中上杉家砦を構ひて斥候に備へ、春日山城と相應じて信號の旗を振つて三島郡小木城に傳へ、追々古志蒲原魚沼地方に通信す天正六年の頃に佐野善藏竹俣兵庫等居るれり、

旗持や馬の飼料春の草

輝虎の威や鹿もなき旗の峰

こらくこ旗持山の寒さ哉

御駐營所

越全線中第一の勝景地にして頸城最北の停車場あり、

御駐營所。青海川驛に近し、明治十一年陛下御巡幸の際鳳蓋を茲に駐めさせ給ひ風色を賞し給へりと承る、今石に刻して紀念とす、

福浦八景

福浦八景。青海川西海岸にあり、佐佐位名岩、達摩岩、猩々岩、惠比須岩、大黒岩、鞍懸岩、籠岩、鷗岩等の奇岩空洞を有す、日暖にして波靜かなる時小舟に棹さして周遊せば又以て靜散に價あり、

籠客、于青海浦客棧

水落雲濤

赤岸千尋海氣秋。照波縹渺夕陽愁。潮聲吹撼能登國。嶽色晴分佐渡州。樓上人如天上坐。眼中舟在畫中浮。怕他冥若鷺河泊。莫向江湖說此遊。

四、北陸街道の沿道

(五智を基點として加賀街道越中境に至る)

北陸街道の沿道

○郷津

五智より海に沿うて北陸街道を進む事一里にして郷津に達す、地形西南に彎入し、灣内東西千二百呎、南北六百呎水深十二呎、口は東方に展開して北西風を避くるに便あり、海底の地質は砂礫及硬質の粘土なり、往古國府海運の要地にして國府津と稱せしものなり、今も海波荒る、日は直江津港にある船舶の避難所にして、北陸鐵道停車場を置く、直江津港口の不具

胞衣姫神社

胞衣姫神社。鉢崎の東十五町上輪に在り、國道より石階數百段の上に息長足姫尊(神功皇后)を祀る、文治年間源九郎義經蝦夷へ落ち行くに當り、此地に來りしに龜割坂にて妾京の君難産に遭ふ、辨慶當社に祈願して産するを得、辨慶取り揚げて其胞衣を納めたりと傳ひ、里人子安の神と云ふ、傍に辨慶井あり之を産湯に用うれば功驗ありとて遠近の婦女參詣するもの多し、龜割坂の上に茶亭あり、白湯を源氏の白茶、餅を辨慶の力餅と號して賣り縁起を讀んで旅人を惹く、

源氏の白湯辨慶の力餅笠島

笠島。上輪の北にあり、磯濱に岩礁布き、所謂笠島と云ふあり、海苔を産し越の雪海苔と云ふ、城址あり山に據りて海に臨み大須賀三郎吉國居る、永正七年長尾爲景及び景忠五十嵐但馬守大須賀志摩守と戦ふ、天正七年景虎に屬せし爲に景勝に攻められて落城す、明治戊辰の役には此附近より鯨波にかけて戦闘す、今も此役に戦死せし人の墓あり、

山縣有朋

青海川

青海川。鉢崎より三哩餘、直江津より十八哩餘米山の山脚に狹まる、北

蟲生

を補はんとて文化年中國役普請として築港する事二回、遂に成功せざりしが、明治十五年以來復築港問題の聲高し、此地石油を産し、瓦斯噴出少ならず里人之を引いて炊爨の用に供す、背後の山には舊藩時代の物見場あり、

長濱

長濱。郷津の西一里、之より以西を西濱又は山の下と云ふ、長濱の名の起原を按ずるに此浦濱は海士の苦屋もまばらなる長途の濱なるより出で、阿比多神社とて式内の古社あり長濱天神と稱す、

長濱天神

行かへる雁のつばさをやすむてふ是や名にちふ越の長濱 黄昏に行來の人の跡たはて道はかごらぬ越の長濱 行末の道な思へば長濱の眞砂を旅の憂き數にして わよ見つや世を長濱に跡たれてかゝる浮身をみそないしたまい 白波の踏る日數をかそふればまだ遙なり越の長濱

家持 讚人不知 道興 菊亭爲兼 高崎正風

有馬川及四海波

三越路の浦はるく長濱のながめはこゝか越の長濱
有馬川ありまがは及四海波しよかいなみ 長濱より一里、驛は有間川の左岸に立つ、四海波と云ふは有馬川より名立に至る青木坂登り口の岸近き海中風の吹き廻はしによりて波浪四方より寄せ來つて通舟に難き處あり、磯山より下瞰すれば白波四至打寄せては又引くの奇觀あるより此名あり、

讀人不知

名立

名立。有馬川より二里、既に西頸城郡に入れり、不動山より流れ出づる名立川の口に位して名立谷の門戸たり、延喜式には鷄石と水門の中間に在りとせり、明治十一年九月二十五日、長くも行在所を置き給ふ、

讀人不知

能生

能生。名立より三里、西濱第二の都會にして縣立水産學校あり、能生谷の名物たる白山大権現はくさんだいこんげん（川姫）の祭禮は例年四月廿四、廿五兩日に行はれ小泊まで巡幸するを常とす、境内小高き處に樓を設け小鐘を釣る、之を汐路の鐘とて汐の満ち來らんとする時は人觸れずして響く事一里四方に達すと、明應の頃焼亡せしが後其殘銅を拾うて鑄替たりと云ふ、

芭蕉

月不見池

白山靈廟幾經年 數樹大椿春帶妍 早晚妝裝欲解纜 風波間可護香船
月不見池。梶屋敷の南一里、早川谷鳥帽子岳の麓上出にあり、出の池とも云ふ、清冽の水を湛へ、池畔老樹鬱々として怪岩奇石多く、老藤碧巖を抱いて花時紫雲棚引くに名あり、

偈萬里

八十八ヶ所觀音

八十八ヶ所觀音。梶屋敷より入る、奇岩怪石千態萬狀の間を縦横に橋を架し穴を鑿ちて八十八番の觀音を安置す、文化文政の頃西海谷眞言僧の創めし處なりと云ふ、

讀人不知

大和川

大和川。姫川の東に併行して一名海川と云ふ、今此邊を大和川村と稱し早川の流域を合せて早川谷と稱し、梶屋敷（能生より二里）を中心とす、

准后道興

糸魚川

糸魚川町。直江津の西十一里新潟を距る事四十二里二十四町
位置、北は日本海南は根知谷にして北陸街道の要地に當り南方松本に通ずる縣道あり、西濱第一の都會なり、
名稱。此地糸魚を産するより名起ると云ひ、或は弘法大師管に糸を巻きて川

に投せしに忽ち魚となりたるより名くと附會し、又此地戰場たりし時兩軍挑み合ひしを以て挑み川と稱せしより起ると唱ふ、又詩人は厭川と書く、城址龜岡にあり故に龜岡城又は清崎城と云ふ、

▲歴史。上杉氏の時代に支城を置く、初め其臣丸田伊豆守居りしが、後萩田主馬の居城となる、萩田氏一時没落して越前松平家に屬せしが、光長高田城主となるや再び糸魚川一萬四千石に封せらる、越後家没落の後貞享二年城を毀つ、其後高田城主稻葉正通、本多助芳、有馬永純に屬せしが享保二年松平直之糸魚川一萬石の領主となり、陣屋を置きて支配せしむ、

●糸魚川藩主松平家系圖

糸魚川松平家系圖

家康一秀康一□一□一直賢一直知一直好一直榮一直紹一直益一直春一直靜一直幹
(糸魚川を領す) (現主子爵)

維新後清崎藩置かれて松平氏知事たり、廢藩置縣の際柏崎縣の治下の屬し、間もなく新潟縣管下となる、明治十一年、今上天皇陛下北陸御巡幸の時御駐輦二日間、無上の光榮を負へり、此時都なる 皇后陛下の御歌を拜するに
はつかりをまつともなしにこの秋はこしちの空のなめられける
明治十三年西頸城郡の置かるゝや郡役所所在地として郡の中心となる、

天津神社

蓮池七湯

▲戸口。最近調査戸數一千四百三軒、人口八千八十五人、

▲官署。西頸城郡役所、糸魚川區裁判所、糸魚川警察署、糸魚川収稅署、糸魚川鹽務局出張所、縣立糸魚川中學校、郡立女子職業學校、

▲交通。北陸街道に當り直江津方面に馬車の便あり北陸線の停車場設けられんとし、松本街道によりて魚鹽を信州に輸出すべく、海上汽船の寄港するあり、和船帆船常に碇泊す、

▲名産。柚べし、魚類、

▲天津神社。一の宮と稱し天兒屋根命を祀る、元社領百石を給せらる、

名所糸魚川には名物御座る豆腐支伯(奇妙丸)稚兒の舞
世の中はいかゝ有けむいさひ川いさひし身さへ行ふしられず

聞矢上子生北遊、死于糸魚川上哭之

糸魚河水糸魚躍 知汝吟骸埋傍河 從此編藤銀燭衣 聽歌不聽越獅歌

蓮花七湯

糸魚川の南九里半大蓮華乘鞍兩山の下安山岩の裂罅より涌き出づるもの七湯あり、就中有名なるを黄金湯と云ふ、鹽類泉にして温度百度胃弱腺病に功あり、上杉時代より入浴する者ありしが天保年間蓮華山銀鑛發掘せられてより浴するもの多し、

木會義仲の古蹟

○木會義仲の古蹟。西中村大丈夫山八幡宮は、義仲上洛の際鏑矢と日の丸の鐵扇とを奉納したる由緒を有す、此邊は義仲の臣今井四郎兼平在陣せし事あるを以て川西谷を一名今井谷と云ふとぞ、

田海村鎮守山添社

○田海村鎮守山添神社。奴奈川姫命を祀る、傳へ云ふ姫福來ケ口に機を織りて此處に遙拜し給へりと、

福來ケ口

○福來ケ口。黑姫山。布川。田海より一里二十五町、糸魚川よりすれば二里半、黑姫山(百尺三十三)は大國主命の妃奴奈川姫の母の名に因めるなりと、此山の溪間に洞窟あり福來ケ口と云ふ石灰岩より成る、洞口方三間清水湧出して布川となる水涸るれば二町の奥に入るを得べし、傳へ云ふ奴奈川姫福來ケ口に住みて機を布川に晒せりと、

万葉集

八千八穴

沼名川の玉の底なる玉、求めて得し玉かも、捨て得し玉かも。あたらしき君が老ゆらくたしも、
○八千八穴。福來ケ口の南約一里にあり、大小の巖石無數の穴あり、四時水の絶ゆることなく試に穴中に石を投ずれば、地下鳴動して穴中より濛々として雲霧の揚るを見るべし、

青海

○青海。歌外波の海濱一帯の山は石灰石に富むを以て近年各地に製造所を設けて石灰を輸出す、

勝山

○勝山。青海村にあり、一名墜水城又落水城と云ふ、上杉氏の支城たり、天正十三年五月豊臣秀吉越中征伐の途次、上杉景勝と會見盟約せし處なりと傳ふ、

橋立金山

○橋立金山。橋立村にあり、天保年間金鑛を發掘せし事ありて幕府直轄出雲崎代官支配たりしが、間もなく廢坑となる、銅も同所に出で蓮華山にも銀鑛あり、

駒返

○駒返。青海の西海岸道狭くして馬通じ難きこと六町餘傳へいふ木會義仲の馬を返せし處なりと、乗物岩、白岩、蝙蝠岩、尾岩等の奇岩あり、行く末をいそぐすれど跡にのみ心をかくる駒返かな

歌

○歌。歌の濱とも云ひて名驛にはあらざれども、古より詠歌多し、
宗 祇法師
萬代と波は立來て洗へどもかはらぬものは水壘のあこ
手向せむ幾萬代か越の海にさる楓の葉の濱風
舟人も心ありさや手向する歌の濱楓さりあへずして
聖徳太子假名傳
北國紀行
善光寺紀行

親不知

○親不知。市振と外波との間にある海濱七八町、北陸無双の難所にして中

間、大塚、小塚、大窟、小窟、浄土崩、大崩、先釜の岩窟あり、風波荒き日には旅客波間を計りて岩窟に避く、其危険なること親子相顧みるに遑なしと云ふ、俗に親不知子不知と唱ふ、古は寒原と云へり、

親知らず子は此浦の浪枕越路の磯の泡を消えゆく

波分て過行ほどはたらちれのたやのいさめもわすらるゝ身よ

今で知るいたればやすきことわりも唯遠からぬさかひなりきは

○

波吼崖崩頑石歎

傳聞父子不曾知

扶桑第一險難地

今日初嘗摩脚皮

明治五年新道を開き長走、駒返、蝙蝠岩の難を免れしむ、

上路山。市振より南一里二十一町國境に立つ、往古山姥の棲みたる所と

云ひ、謡曲「山姥」は此を謡ふと稱す、

市振。西より國境を超えて初めての驛なり、境川を隔て、越中國新山郡

と相對す、承久三年北條時朝宮崎定憲と戦ひ、又永正六年上杉定實長尾爲景と

戦ふ、舊藩時代には關所を設け世々高田藩の番所たり、古より此浦に屋氣樓

見ゆと唱ふ、

ひさつやに遊女も寝たり萩と月

市振にて 芭

蕉

客遭寺

市振玉の木にあり、西行法師暫く杖を止め閑居せし所にして、

堺川

後白河法皇より賜はりし觀世音の靈像を安置せり、

堺川。越後越中の國境を流れ、昔時渡川に難義せし川なり、

舟もなく岩浪高き堺川水増さりなは人も通はじ

顯 季

縣道大島線の沿道

五、縣道大島線の沿道并東頸城郡一帶

春日新田

直江津停車場の東、橋を隔て、荒川の岸に在り、往古臥間屋

原と稱し、今は有田村に屬す、曾て北後線停車場を設けし事あり、大島線の

起點にして馬市を以て有名なり、

花ヶ崎及塔ヶ崎池。保倉川の北岸に在りて直江津へ二里餘を隔つ、

寛正六年慈惠法師の紀行に花笠と云ふは此里とす、

鶯の聲も聞こゆ秋の雨にしほればきぬる花笠の里

鶯 惠

塔ヶ崎池は大池と云ひ、用水に供す、水深く池廣くして三方に山を遶らす、

池中鯉鮒を産し毎年十月中旬漁獲するを例とす、なほ昔より鳥留めと稱し鳥

類の捕獲を禁するを以て秋冬雁鴨等の水禽池中に充ち、頗る奇觀を呈す、

杉坪日光寺

●杉坪日光寺。下保倉村にあり眞言宗にして大同二年の建立なりと傳ふ

顯聖寺

●顯聖寺。下保倉村にある曹洞宗の巨刹にして應仁元年直峰城主吉田氏美濃國より快庵妙慶和尚を請し開山として建立する處なり、認可僧堂の設あり

安塚

●安塚。

▲位置。釜淵より大島線を去つて虫川線に入り二里二十四町余にして達す、新

潟へ三十五里三十二町、高田へ六里八町を距つ、

▲歴史。往古直峰城の城下にして今に古町中町横町等の名を在す、明治十三年

東頸城郡を置かる、や郡役所所在地に選ばれ今や同郡の中心たり、

▲戸口。最近調査 戸數一千二百七軒、人口七千七百三人、

▲官署公共團體。東頸城郡役所、安塚警察署、小學校、稅務署、

▲交通。安塚線（六里八町四十七間）によりて高田に通じ、虫川線によりて大

島線に接続す、車馬の便開け毎年十一月の市日には四方より群集す、

▲諏訪神社。背後の山麓にありて建御名方命を祀る、鬱蒼たる林中より小黒川

を望むべし風景佳あり、

▲添景寺。元眞言宗福壽寺と稱せしが、弘治二年九月上杉氏の祈願所となり、

直峰城址

●天正十年七月上杉景勝より諱の一字を賜はり添景寺と改め淨土眞宗に轉じたる名利なり、

▲賞泉寺。曹洞禪院にして長尾信濃守開基と云ひ又直峰城主吉田周防入道能景

とも云ふ、默室周言の開山、明應七年四月の創立なり、吉田氏及長尾氏の靈牌

及び寄進狀を藏す、

●直峰城址。安塚の東北約半里の處にありて昔春日山城より妻有（魚沼）

上田へ通ずる往來に當るなり、城主として記録に存するは風間妙見奎田主膳

正、吉増伯耆守、庄田彦六、吉田周防入道房忠、宮崎甚助、長尾伊勢守、樋

口伊豫守（一に伊織）堀伊賀守等なり、

●大島。元保倉谷の名邑にして妻有方面に通ずる山路にあり、今は縣道大

島線路の要點にあたり、年々の市日には頗る賑へり、

●松の山温泉。松の山は元頸城魚沼の間に一別區を成す、一郷六十六箇

村の總名なり、温泉は新村松の山村字湯本にありて温度百三十度鹽類泉なり

地勢四面山岳屏立、東西二十餘町南北二町許り、旅舎十數軒、松代へは縣道

を通じて二里二十三町、安塚へは四里を距てて高田より十二里あり、

観音寺

●観音寺。松の山村にあり、長祿四年六月三桶高立城主盛富盛種兩士の開

基なりと傳ふる曹洞禪院にして、翠巒園遶し、溪水流れ、池あり、浮島あり、

幽邃閑雅掬すべき情味を有す。

天水越及管領塚

●天水越及管領塚。湯本温泉より一峰を越せば七八町にして天水越に達

す、信越兩國の境にあり永正年中上杉房能の定實爲景等と戦ひ歿せし處を紀

念して管領塚と稱す、附近に鎧掛の櫻と云ふ老櫻ありしが今は枯死して無し、

管領塚も近年迄小堂宇存せしが頽廢の後再建するものなし。

○松山鏡

松山鏡

松の山わきて奥深き山家あり、今は何處の里にや知られども、中昔夫婦の者振分髪斗りなる娘を一人もてり、妻病にふし今はの時形見を残して身まかりけり、娘餘りに悲みければ對屋(女部屋)を作りて慰め置けり三年を経て父香花を捧げばや所持佛堂に参りけるに、娘顔も面やせて何か取かくす風情なりければ、父が云様我來れるを珍しく悦ぶべきに如何なることぞや尋ねければ、娘が云、母今はの時、なき跡に戀しき折節見よさか、る物をたびけるまで鏡を出し、此中に、母の御影を残し置れて見え給ふまで嘆きけり、父が云ふ、我一年京都に上りし時求めせしが、賤き鄙の奥山なれば、鏡さ云もの知れる人もなかりしなり、母の見ゆるに非ず、己が影のうつれるなり、子は親に似るものなれば、戀しき時には鏡を見るさばかゝることなるべし、稚心の哀れさよと悲みけるさかや。

今も猶ふりし鏡の片われにもかけのこる松の山里

興之

松代

●松代。松の山郷の中央に位して十日町線大島線岡の町線松の山線の交叉

點に位す、登記所、郵便局、銀行等の機關備はり、毎年十月の市日には各地

の商人雲集雜鬧を極む、其取引の大なるは縮布及苧なりとす、

松苧神社

●松苧神社。松代の東南、犬伏地内松苧山に鎮座す、松の山郷六十六ヶ村

の總社にして、祭神は大山昨命杵島姫命を祀る、神殿は頂上にありて大同二

年の建築なりと云ふ、

専敬寺

●専敬寺。小黑村にあり、貞觀年間眞雅僧正の開基にして初め眞言宗な

りしが、後住圓道坊親慈に歸依し眞宗に改宗して大谷派に屬す、壇徒三千餘、

毎年九月報恩講執行と同時に市場開け、遠近より群集し來りて頗る雜鬧す、

中篇上越の名所舊蹟終

後篇 上越の地理と歴史

◎上越の地理

◎位置

蛟龍の雲雨を得て將に天に昇らんとするが如き形を有する日本帝國の中腹に當りて、日本海岸に延亘する北陸道中最も大なる國は越後なり、上越の地頭城三郡は越後の西部を占め、南は信濃に西は越中に境し、米山を以て中越に接續す、西北方は夕陽眷く邊に瀟々たる佐渡を距て、煙波渺茫亞細亞大陸と相對す、

東は 東經百三十八度四十一分廿秒
西は 東經百三十七度四十七分
南は 北緯三十六度四十三分
北は 北緯三十七度二十一分四十分

上越の中心たる高田は東京へ汽車路百八十哩、新潟へ八十九哩、直江津より海上佐渡の小木へ三十八哩、越中伏木へ六十二哩、露領浦鹽斯德へ（敦賀を經て七百四十九哩）を距つる處に在り、

◎地勢

上越の地形は恰も扇面状をなしは日本海に傾斜す、西南の國境は飛驒山脈の北端に當り、峻峯重疊馳せて海に入る處は斷岩絶壁親不知の嶮をなし、支脈

上越の地理の位置
地勢
總論

蟠居して西濱七谷を作る、富士火山脈を引ける妙高山は峨々として信越の國境を歴し、關田班尾南葉を率ゐて北陸の霸者たり、右翼菱ヶ岳附近より、幾多の峯巒に分れて東郡内に起伏し蜿蜒延びて上越の北門を守るものは米山なり、西郡は七谷の排水路に沿うて狭長なる平野をなし、中郡は關、保倉の兩川に依つて越後第二の頸城平を開く、保倉川の遡る處、澁海川の流る、岸は東郡主要の生産地とす

山岳

▲山岳。妙高山(海拔八〇〇)明香又は妙高若は妙光に作る、富士火山脈に屬する熄火山なり外輪山は東方に缺け三方完し、構造頗る複雑にして北越の雄峯なり、關山より八里、頂上遙に富士山及び白山を見るを得、山上の阿彌陀堂は關山寶藏院に於て管理す、登山者は赤倉より登りて燕に下るを便とす、米山(五〇)上越と中越との境上に峙てり、山上藥師堂ありて毎年五月八日登山者甚だ多し、登山者は柿崎に下車し黒川村大字水野より登るを便なりとす、其他黒岩口及び刈羽口の二あり、南葉山(二七)高田の西南に峙てる連山にして、前南葉、裏南葉の二峯あり、桑

取谷名立谷を東限とし、南は不動妙高に連絡し、北は春日山に向ふ、頂上南葉大明神を祀る、和銅年間の勸請と云ひ、桑取谷の氏神なり、春日登山一日にて足れり、

八つ瀧。山麓字後谷の上にある、土用後より秋社日に至る迄、毎日八つ時(午後二時)頃眞白に瀧の流下するが如き岩石を見る、之を八つ瀧と呼ぶ、大男。春雪消え際の現象にして、其形巨男種子袋を提げたるが如し、地方の人此現象を見て種子蒔の時季來れりとなす、

▲大蓮華山(一〇〇)西頸城郡の西南隅糸魚川より十餘里を隔つる險山にして、高山植物、物及び小規模の氷河あり、高田より登山せんとするものは往復六日を要す、班尾山(五八)尾神山(三二)旗持山(六六)、駒ヶ岳、阿彌陀山、雨飾山、鬼面山、烏帽子山、關田山、菱ヶ岳、白鳥山、上路山、

あしなへて山の白雲つもれさもしるきは越の高根なりけり 櫻咲く山邊を過るかりかれはここの高根をこゝろをかまもふ 治部卿通俊 後 惠

▲川。境川(七)外波川(未)青海川(五)田海川(二十)姫川(廿二)海川(一名大)三十一町 早川(五)能生川(十三)名立川(十六)有馬川(四)關川(高田附近より下流を荒川に)

湖沼

云 全流十、
 五里、屋代川五、
 飯田川五里、
 儀明川二里、
 三、小黑川半、
 里、
 高谷川里、
 湖沼。朝日池（周囲一里廿一間）、
 大池（周囲一里十五町廿四間）、
 不見月池、
 坊ヶ池（名一、
 池、
 榊池、
 鵜ノ池、
 小海池、

用水江

▲用水江。

上江用水
 中江用水
 新中江用水
 西中江用水
 大濠用水
 大道用水
 海岸
 海岸線は凡二十七里、日本海岸の特色を表はして平滑單調を極む、僅かに鳥首崎鉢崎鼻の突出せると、郷津に灣入するを見るのみ、海濱は北西風砂石を飛揚して砂丘を作るか、若くは怒濤の嚙む所地盤漸次陥落し汀線次第に

沿海

陸地を侵す、

北 越 行

龜田 鷹齋

長江廣斥渺無窮 萬里波濤漫碧空

遙識海天連廡愴

遠來石壑墜秋風

▲沿海。陸上の地形急斜せると共に海底も亦急に深さを増す、親不知邊にては百尋線一哩半の所に横はり五哩の沖は四五百尋を有す、然も東北に進むに従ひ百尋線次第に海岸を遠かり、鳥首崎沖は三哩半に退く、直江津附近は十尋線は海岸近く走れども百尋線は約十二哩の沖にあり、海岸の屈曲少く港灣の價值を具へず、且つ人工の技を加へざる上に風波荒きを以て碇泊の安なし、爲めに冬季は交通を杜絶するに至る、

奈吳の海あさけの名残けふもかく磯の浦には亂れてあらむ

萬葉集 爲家

海流

▲海流。西南沖繩群島より來る暖流黒潮は九州の南にて大小二支に分れ、大支は本州の南を流れ、小支は朝鮮海峡を経て、日本海に入り、所謂對馬海流となりて能登半島を衝き、佐波を掠めて靜かに北流し去る、北越は此暖流によりて岸を洗はるゝを以て、冬の寒さを減じ、又多量の濕氣を供給して大陸風に交はり雪となつて降り下るなり、

潮汐

なこの海の霞の間よりなかわれば入日を洗ふ津津白浪
天津空一ツに見ゆる越の海の浪をわけつゝ歸るかりかれ
荒海や佐渡へ横ふ銀河

後徳大寺左大臣
源三位頼政
芭蕉

▲潮汐。潮浪外洋より來つて日本海に入らんとするや、朝鮮海峡の隘路に頓挫し、再び日本海面積の大きさと深さに驚きて益々其勢を減じ、満干の差の如き太平洋岸と同日の論にあらず、

●直江津にて測定せし潮汐の調査表

朔望高潮三時十五分	大潮升一	四呎	小潮升三	四呎	小潮差一	四呎
-----------	------	----	------	----	------	----

地質

上越の地質系統は極めて不規則にして新舊の地層雜然として分布す、

▲中郡。荒川及び保倉川流域地は沖積層にして、南葉連山地方は第三紀の砂岩層多く、石油石炭少しく雜ゆ、猿橋立藤寺青柳地方も同じく第三紀層なれども石油石炭に富む、柿崎以西潟町方面は第四紀古層洪積層に屬し、米山火山地方は集塊岩複輝石安山岩多く、中山米山寺大光寺には凝灰岩能く發育し、妙高火山彙地方は角閃安山岩を含む、

西郡

▲西郡。姫川流域地は沖積層、黒姫山地方は古生層にして石灰石に富む、姫川上流地は古生及中生層を交へ蛇紋岩最も多く石灰石を含む、橋立鑛山より親不知の地には花崗石能く發育せり、

東郡

▲東郡。全部第三紀層に屬する重粘土の地にして石油に豊かなり、上越は腹背火山に圍まるゝを以て温泉所々に湧出し従つて地震亦多し、

貞觀五年六月十七日

永祚元年海涌山崩

大地震

寛治六年大地震大津浪

寛文五年十二月二十七日

寶曆元年四月二十五日及廿七日

弘化四年三月二十四日

明治三十六年七月廿三日

氣象

頸城は北温帯の中央に位置を占むれども、地勢及び亞細亞大陸と日本海との影響を享け、温和平準とは云ひ難し、冬季太平洋岸は快晴打ち續くに引換へ、北國は風雪暗愴として殆ど霽日なく、而かも夏日の炎熱比較的烈しきは天帝の不公平を嘆すべしと雖も、然も對馬暖流の影響は氣温を調和して大に寒威を軽減し、彼信州諏訪湖の如き堅氷の鎖す處となる嚴冬も、頸城の沼澤未だ斯の慘あるを聞かず、假令雨雪甚だ多きも一陽來復して百花爛熳妍を競ふ候は、上越の山河亦絶景掬すべきものあり、是を以て敢て温和適順の樂土とは

氣温

▲氣温。云ふべからざるも、亦決して満目の風光蕭殺たる朔北の地と同じうすべからず、全國氣象區劃の上には明治十四年七月制定の第七區に當り新潟市に側候所を設け、頸城にては糸魚川、能生、上稻田、金谷、高田、關山、安塚の七箇所に於て測定す。

●明治四十年高田地方の氣温表

中頭城郡農事試験場調

月次	最高	最低	平均	月次	最高	最低	平均
一月	五一、六	一八、三	三四、八	二月	四九、一	二〇、八	三四、九
三月	六一、五	二四、八	四三、一	三月	七三、六	三〇、七	五二、一
五月	八〇、六	四二、三	六一、四	六月	八六、四	五〇、二	六八、三
七月	九一、六	六二、二	七六、九	八月	九六、一	六九、四	八二、七
九月	九一、二	五〇、九	七一、〇	十月	七五、七	三五、二	五五、四
十一月	七三、〇	三一、五	五二、二	十二月	六一、三	二五、九	四三、六

風向

▲風向。地勢によりて頸城各地方多少趣を異にすとも、春は南風及南東風、夏は北東の微風吹き來りて炎熱を和げ、秋冬は北風若くは北西の風吹き荒み

て天候險惡雨を降らし雪を飛ばし、怒濤岸を噛んで航海杜絶するに至る、



高田に於ける風向及名稱

雨

▲雨。雨量は一年に一千六百耗より一千八百耗の間にありて全國の中位を占む。

●明治四十年高田地方雨量表

中頭城郡農事試験場調

一月	二月	三月
一九八、九	一九二、四	七四、九
一四五、四	四	月

雪

五	月	八九、七	六	月	一六九、九
七	月	八四、五	八	月	一二二、九
九	月	二〇〇、〇	十	月	一八〇、七
十一	月	二二三、五	十二	月	五五七、三

▲雪。高田地方は雪を以て古來名あり、九月下旬既に妙高火打の峰頭に白冠を見、十一月に入りては盛に霽を降らし、十二月若くは一月根雪を積む海岸は一二尺に達するのみと雖も高田附近は六七尺を常とし、東郡の奥西郡の谷底は丈餘に及び、凍雲漠々雪片霏々として降る時は一夜にして五六尺に及ぶ事あり、乾坤白皚々頗る美觀ありと雖も時に風雪を捲いて慘憺たる光景を呈し、人馬汽車の交通爲めに斷絶するが如き悽絶を極むるあるを如何せん、節分を過ぎて降るは泡雪とて久しきを持せず、三月に入りてなほ止まざることあり其下旬には融解し四月に至りて梅花を見る。

三越路の雪ふる山を越えむ日は留れる香を懸てしぬばゆ越の山又このころやいかならんへての峰にそく初雪都たに夜寒になりぬいばかり越の山人ころもうつらん

萬葉集
定家
範宗

北越に降雪多き理由

なか／＼につらなりなる道たはて雪にさなりの近き山里
なか／＼に近きさなりの道たへて雪にへた／＼越の里人
我ひさり越の山路にこしかさも雪ふりにける道なみるかな
月のすきもすかさす越の吹雪哉

伊達政宗
讚人不知
佐忠
加賀の千代

●北越に降雪多き理由。北越の温度他に比して低きにあらざるに何によりて降雪多きや、そは地勢と海流と氣壓とに依れり、抑北越の地は後に蜿蜒長蛇の如き山脈を貫ひ、前に對馬暖流を流して遙かの彼岸は亞細亞大陸なり、冬季氣壓の配布は北西風を起し、極目蕭條寒烈なる西伯利の太平洋を吹き拂つて驟然日本海を過ぐるや、對馬暖流の放散する所の水蒸氣を奪ひて馳せ、忽ち連山に遮断せられて進む能はず、逡巡の間に齎し來れる水分を凝集して或は雨滴とし、或は雪霰を飛ばす、殊に上越の地勢は箕の如き形をなすを以て西北風の携帶せる濕氣を凝集せしむるに適せり、雨雲の他に比して多量なる偶然にあらざるなり、

きりすかし／＼出る雪の戸口かな
思ふこゝ雪さへいさ／＼つもるかな日かすふるとも越につたへよ
し
曲亭馬琴

◎上越の歴史

○名稱

▲北陸道。此名は文武天皇七道觀察使を置れしに初り、クヌカノミチ、クルカノミチ、キタノミチと云ふ、陸の道北の道と云ふ意なり、或は此邊一帯を高志

上越の歴史名稱

越後國

の道とも稱するは山坂を越えて行く國なるによれりと説くあり、或は日本を人體に譬へ北國は其腰に當れるを以て名くとし、又蝦夷の一部種名より出で國名郡名等に轉せしものなりと唱ふるものもあり、

越後國。上古は若狹より沿海百五十里羽前羽後の邊までを越と稱せしが天武天皇の時北陸を分ちて三國とし、沼垂以南越中方面を越中と號す、文武天皇太寶二年三月越中四郡を割いて越後國に屬するに及んで越後の西は親不知を以て境とするに至れり、元明天皇和銅五年九月岩船以北を割きて出羽となし越後の境域定まる、越後とは越前越中に對して云ひしなり、北越と唱ふるも南越前に對してなり、

頸城即上越

頸城即上越。頸城とは久比岐とも書く又伊保野とも云ふ、其名の出づる處を知らず、地形により越後を三分して上中下となす、中世上郡中郡下郡と云ふ、頸城は京に近かりしを以て上郡と稱し、八谷十四郷に分つ、又地勢上關田菱ヶ岳より米山に至る丘陵を東山と云へ、妙高燒山より西濱の諸峰を西山、西山と海との間を山の下と稱し、關川を中にして川東川西の稱あり、新井より關川までを中山と呼び又高田以南を上郡の郷、以北を下郡の郷と云ふ、東山を

石器時代

松の山郷と保倉谷とに分ち、西濱七谷を合せて頸城郡の八谷となす、

石器時代の頸城

此時代に於ける頸城の光景は地理上今日と異なる所多かるべく、桑田萬頃の地も曾てコロボツクルの舟を寄せし所なるかを知らず、茫々たる蒼海も當年の蝦夷人が往來居住せし所なりしやも謀り難し、天變地異人事の興廢頻繁にして探究の道なきも、口碑遺跡の存する處を探れば當時の事想像するを得ん、三頸城中にて發見せられたる石器時代の遺跡左の如し、

糸魚川、橋立、谷濱、春日山、瀨町、新井、黒坊、板橋新田、矢代神社内、風卷、赤澤、百木、馬正面、上小野、櫻島、

神代の頸城

伊弉諾伊弉册二尊の經營。神代の事漠として知るよしなけれども、諾册二神時代の頸城地方は異人種蝦夷の占據する處たりしは疑ひなからん、二神國土經營の順序は九州より東北に及び、當地方は第五乃至第七位にあるを以て開明の期他に比して遅く、佐渡に據つて異人種を征服せられたるが如し、其後高貴の人々の當地方に住居せしは近年發掘せる古墳に佩玉時代の遺物を發見す

神代

大己貴命の營

上古

神武天皇時代

崇神天皇時代
仁兩天皇時代

るによりて證すべし、

▲大己貴命の經營。日本の文明は西南より東北に及ぶ、我上越は交通上の便益と、人類移動に關係ある暖流對馬海流の東北に流るゝに乗じて早く出雲の感化を受けたるを知るべし、出雲の神大己貴命が越の奴奈川比賣を娶らんとて遙々と旅行せられ、暫く頸城郡躬能輪山居多に滞在し、附近の賊を平げて出雲の文明を移されし事少からざりき、

●上古の頸城。

▲神武天皇時代。天香久山命を越後の國造とす、命は天照大神の玄孫なり、初め熊野にありて高倉下命と號す、神武天皇東征に従ひて功あり、越後に下向して民に漁鹽の法を教ふ、越後一の宮として今に彌彥神社と奉祀するは此命なり

いやはこのおのれ神さひ青雲の棚引日すら小雨そほふる

萬葉集

▲崇神垂仁兩天皇時代。崇神天皇四道將軍を置き給ふや大彥命をして北陸を戡定せしむ、命一年を要せずして平定を奏す、後御戈命を久比岐國造とし給ふ、垂仁天皇の朝越國に凶賊阿彥なるものありて亂をなす、大若子命下向し

大化以後
後奈良朝時代

齊明天皇時代

天智天皇時代
天武天皇時代

天武天皇時代

元明天皇時代

聖武天皇時代

居多神社に祈りて賊を平定す、

●大化以後奈良朝時代の頸城。

▲齊明天皇時代。天皇の四年越の國守阿部の比羅夫をして蝦夷を討たしむ、阿部氏は大彥命の裔なり、古より越の豪族として此地方に重きをなしたりしが、比羅夫に至りて蝦夷を征し肅慎を討ちて大勳を建つ、

▲天智天武兩天皇時代。天智天皇の七年七月越國より燃ゆる土燃ゆる水を獻す天武天皇の朝北陸を三國に分ち沼垂以南を越中とす、

▲文武天皇時代。越中四郡を割いて越後に屬し、越後府を頸城に置き從五位下猪名真人大村をして治めしむ、

▲元明天皇時代。和銅二年越中の蝦夷人亂をなす民部大輔佐伯石湯を征越後蝦夷大將軍となし、内殿頭紀諸人を副將軍とし節刀軍令を授けて討たしむ、當年の上越人は既に王化に霑ひ、皇軍の爲めに盡せるは信越の民を出羽に移して鎮撫を謀りし事ありしによりて知るを得べし、

▲聖武天皇時代。國家安全を祈らんとて諸國に國分寺を建て寺田を寄附し給ふ、越後には國府所在地たる頸城に置く今の五智國分寺之なり、

思ひきや越路の雪をふみ分て来ませる君に逢はんものさは

越後守橋爲仲

返し

今さらに伊奈さちもひし道なれど君に逢地の國そうれさき

信濃守たかとも

平安朝の初め

平安朝時代の頸城。

△平安朝の初め。平安朝に入りて國政整頓し上越は越後國行政の中心信仰の中心として重きを持せり、平城天皇の朝紀躬高、文徳天皇の時源邦紀、清和天皇の御宇貞純親王の王子經生、其後藤原野風等越後守に任せらる、

藤原氏時代の平氏時

△藤原氏時代。藤原中央に盛んなるに及んで地方漸く紊る、堀川天皇の頃より上越の豪族中條庄司は國司の下向なきに乘じて頸城郡方十里の地を管せり、其他柏崎氏椽尾氏古澤氏等各地を分轄す、著名の豪族城氏の如きも當時既に其基を開けり、

平氏時代

△平氏時代。城氏は餘五將軍平維茂より出づ、其子繁茂出羽權介より越後介となり、子孫世々鶏冠城に據りて武威を四隣に振へり、平家隆盛を極めし頃、城氏も平家の一族たるを以て威勢増大遂に越後を押領し、資永長茂に至りて越後守に任し陸奥藤原秀衡と相並んで東北を壓しぬ、

鎌倉幕府時代

鎌倉幕府時代の頸城。

木曾義仲時代

△木曾義仲時代。平家衰へて義仲北陸に起る、城長茂之と戦つて敗れ出羽に走る、義仲即ち越後國府に入り北陸風靡す、後義仲敗死して越後は頼朝の有となれり、

源頼朝時代

△源頼朝時代。越後は頼朝直領九ヶ國の一に數へられ安田某守護たり、義經奥州潜行の頃は浦權頭なるもの目代たり、

北條氏執權時代

△北條氏執權時代。此頃城氏の勢力大に衰へ且つ承久の亂城資盛越後に據りて官軍に應せしかば、佐々木盛綱に亡さる、亂後順徳天皇佐渡遷幸の途、上越海岸を通過し給ふ、土御門天皇承元元年三月淨土眞宗の祖師親鸞當國に流され頸城の郡司荻原民部少輔年景の館に着し、四月國分寺の謫居に移り前後六年を経赦されて京に歸る、故を以て頸城に親鸞の遺跡を存するもの少からず、北條氏の末に北條友時府内にありて北陸諸軍を總管せしが、何時の頃にも越後は豪族十六家の分領する所となり、頸城は直江柿崎風間氏(直峰)等の割據となり、永仁の頃より新田氏の一族里見氏當郡を領す、

建武中興時代

建武中興時代の頸城。

足利幕府時代
上杉氏

新田義貞の子義顯越後守となり威を北陸に振ひしが後上杉憲將に破らる、

●足利幕府時代の頸城。

▲上杉氏時代。上杉憲顯の越後上野伊豆の守護となりしは足利二代將軍義詮の時にして貞治年間（一三九一—一四一三）にあり、憲顯越後を以て憲藤（のりたけ）に與ふ、是れ實に越後上杉家の祖と爲す、國持衆の待遇を受け、關東管領家に嗣絶ゆる時は越後より入つて之を繼ぐを例とし、支族上條（しせきかみじょう）（羽）に在りて榮ゆ、

長尾氏時代

▲長尾氏の時代。長尾氏は齋藤千阪石川の三家と共に越後上杉家の老臣として威權漸く盛なり、春日山に城き居る、後上杉房能暴戻なるを以て國內亂れ爲景房能の養子定實と共に之と戦ひ勝つ、越後は之より長尾氏の掌中に落ちぬ、

●群雄割據時代の頸城。

▲上杉霜臺公時代。長尾爲景上杉氏に代つて越後を定め、威を北陸に振ひしが天文五年歿し子晴景嗣ぐ、晴景の器量北越に號令するに足らずして國內又亂る此時嶄然頭角を顯はせしは即ち越後史上の精華と謠はれ、群雄割據時代に異彩を放てる上杉霜臺公（謙信輝虎）となす、霜臺公は爲景の子にして享祿三年に生る、幼名虎千代長じて平三景虎と稱す、十四歳、兄に代り三條椽尾の

群雄割據時代
上杉霜臺公時代

間にありて中越及び下越を統轄し、十九歳家督を嗣て春日山城に入り、二十一歳白傘、毛氈鞍覆を用るを公許され、二十三歳從五位下に叙し彈正少弼に任ず此年關東管領上杉憲政北條氏康に破られ潜に越後に入り援を請ふ、翌天文二十二年、村上義清等信濃より來り投じ仇を甲斐の武田氏に報いん事を請ふ、霜臺公之を納れ武田氏と事を構ふ、此年上洛し天盃並に御劔を拜戴し、高野山に詣で前大德寺僧徹岫宗九に戒を受け宗心と號す、弘治二年川中島に陣して武田信玄と相對せしが駿河今川義元の周旋を以て和す、弘治三年再び川中島に出で、信玄と戦ふ、永祿元年上杉憲政再び來り投ず、當時公は一方に義清等の爲めに兵法に熟せる信玄と戦ひ、一方には越中の敵を撃ち、今又管領の依託を受くること深くして關東出兵の必要生せり、而して京洛の風雲ますます急を告げ尊王の誠意亦切々たり、生來義俠心に富る霜臺公何ぞ逡巡するを得んや、永祿二年再び上洛す、五月朔日參内天顏を拜し御劔天盃を賜はる公御修理料を獻じ將軍義輝に謁して京師廓清の策を建て、歸る、翌年關東に入る關左風靡す、永祿四年小田原を攻め憲政の家督を嗣ぎて上杉政虎と改む、此年秋九月十日川中島に於て武田氏と激戦すると十數合、鞭聲肅々夜川を涉り

しも一騎敵陣に突入して信玄を傷けしも此時なり、翌年將軍の偏諱を受けて輝虎と改名す、之れより後も武田氏との交渉結んで解けず、關東に出で、は迅雷耳を掩ふに暇なき底の意氣を示し、東國慄悍の將士をして膽爲めに寒からしめ軍扇一度西に指揮すれば加能の山河爲めに震動し、或は七尾城頭に月明の詩を詠じて南飛の鳥鵲爲めに聲なからしめ、或は鹽を敵に送りて俠名を千古に傳ふ、北越の山河公に依りて一段の光を發せしが、天正六年再舉上洛の軍を整ひ、將に發せんとするに臨み俄に病んで歿す時に歲四十九、當年霜臺公が領する處は越後佐渡越中能登加賀及び飛騨上野下野の半國陸奥二郡出羽三郡に及び、勢力範圍は若狹より青森に達し朝倉佐竹里見小田今川佐野佐々木六角松永毛利等遠近の豪雄より使札春日山に絡繹たり、上越は實に此等諸國の政治上軍事上の中心たりしなり、故に春日山城下の繁昌も日本海岸第一にして南は飯、赤坂、岩木、追分に至り、北は居多、郷津、直江津の海岸に及び、東は至徳寺、瀧、木田、薄袋より關川の東岸富岡、門前に達し、四方凡二里戸數凡一萬五千餘人口七萬五千餘町數七八十を下らすと傳ふ、

いさきよき君がその名はいつまでも消ぬ越路の雪のしら山 山川 浩

不怪兵鋒獨出群。夙將滔略代糧軍。碧蹄蹂躪八州草。白羽指揮三越雲。橫梁繁霜秋滿陣。啣枚大霧曉藏軍。稜々俠骨千古高。老賊齊名長惜君。

○ 織田豊臣氏時代の頸城。

織田豊臣時代
上杉景勝時代

▲上杉景勝時代。霜臺公の歿後甥喜平次景勝と養子三郎景虎(北條氏)と家督を争ひしが景虎敗死して景勝春日山城主となる、此相續争の爲めに外敵の侵掠を受け、内上杉譜代の強臣没落せるもの多く内外共に上杉氏の勢力を殺げり景勝叔父に似て豪雄なれども器量は遠く及ぶ所に非ず、老臣直江山城守兼續輔佐して猶北方に霸たり、豊臣秀吉北陸を經營して越中に佐々成政を討つや越後に來り落水城中に景勝と會見して盟約する處あり、秀吉の朝鮮を征するに當り、景勝も彼地に航して釜山に城きて歸る、秀吉上杉氏の久しく北越の民心を懐くるを見、天下操縦の上に不利なりとし、遂に計略を以て景勝を會津に移す、實に慶長三年三月にして北越の民衆上杉氏を戴きしより茲に二百三十餘年にして分袂せり、上杉氏去り堀氏の入封まで石田三成暫く代官として越後を治む、

後上杉氏は石田三成等と謀り徳川家康を亡さんして慶長五年軍を起して敗れ、米澤に移されて維

徳川幕府時代

新に及ぶ、現主茂憲氏は霜臺公より十四代目にて伯爵たり。

徳川幕府時代の頸城。(高田の歴史参照)

堀氏時代。上杉氏に替り春日山の城主として越後を統治せしは堀秀治なり、秀治の父久太郎秀政は美濃の人にして秀吉の部將中最も經濟に通じ、天正十八年小田原陣中に病歿す、秀治父の功により越前北莊(福井)を賜はりしが慶長三年轉じて越後に入り四十五萬石を領す、今の溝口伯爵家の祖は大聖寺城主として堀氏の臣たりしが従ひ來つて新發田を領せしなり、慶長五年關ヶ原の戦起るや、越後の民衆上杉家の徳を慕ふもの會津と相應じて一揆を起す、堀氏の老臣堀監物直政力を盡して之を鎮定す、爲めに上杉氏の遺法廢せられ上杉家の故舊悉く没落し北越は殆ど改造せられたるが如し、秀治慶長十一年三十二歳にて歿し子忠俊嗣ぐ、偶徳川幕府山城廢止令を發せしを以て直江津の東方川を距て、築城す之を福島城と稱し慶長十二年移る、是に於て春日山城は廢墟となる、然も北越の中心は依然として頸城に在り、慶長十四年堀家内訌起る、翌十五年幕府忠俊の暗愚下を御するの力なきを口實とし其領土を沒收して磐城に流す、堀氏越後に入りて二代、春日山城に在ること九年、福島

越後少將忠輝時代

城に居ること四年、前後十三年にして其跡を絶つ、

越後少將忠輝時代。慶長十五年堀家沒收せらるゝや、松代十八萬石の城主松平忠輝越後及川中島四郡七十五萬石の領主として福島城に入る、忠輝は家康の子にして阿茶局の生む所なり、蓋し豊臣秀頼大阪に在りて附隨するもの頗る多く、殊に加賀前田家の舉動は徳川氏の苦慮する所なるが故に、曩に兄秀康を福井に、今は弟忠輝を越後に封じ以て腹背之を制肘せんとするの計にして、越後に徳川氏勢力の進入せしも實に此時なり、忠輝福島城に入るや北海の怒濤枕頭に騒ぐを嫌ひ、水難に托し高田に移城を請ふて許され、慶長十九年伊達政宗の繩張りにて東北の諸侯に命じ、菩提ヶ原に築かしむ、之れ即ち高田城なり、築城未だ成らざるに大阪の役起る、忠輝從軍して大和口の總大將を命せられしが、酒色に耽りて戰機を失し、家康秀忠の怒りに觸れて元和二年七月五日領地を沒收せられ伊勢朝熊に流さる、忠輝時に二十五歳にして越後入部以來僅かに六年五ヶ月に過ぎず、之より越後の統一破れて小諸侯割據し、上越は僅に北越の高頭を以て舊位を保つのみ、

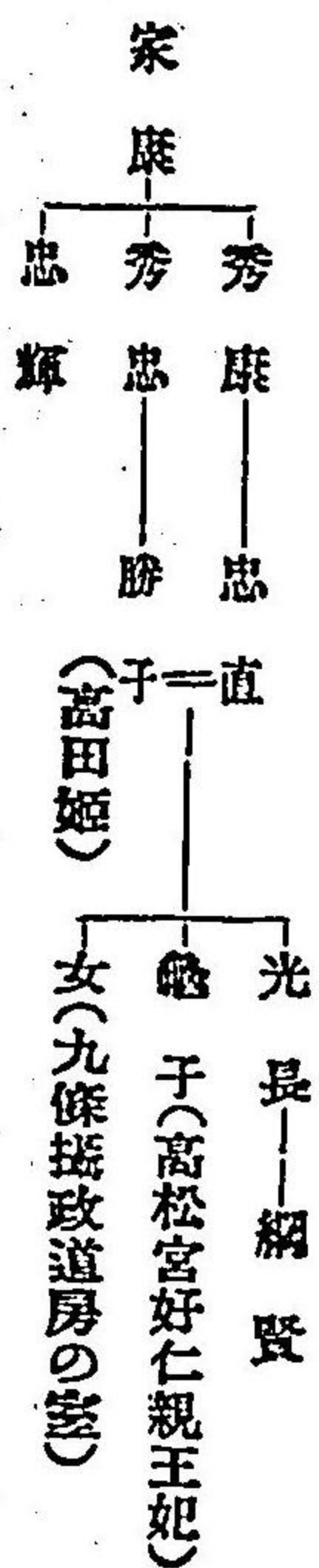
酒井氏時代。酒井左衛門尉家次は元和二年高崎より忠輝沒收地請取委員長と

酒井氏時代

して高田に來り其儘城主となり十萬石を領す、家次の家は三河より出で父忠次は徳川家譜代の重臣中最も老年にして井伊本多榊原家と共に四天王と稱せらる、家次初め碓氷三萬石を領し高崎(六萬石)に轉じ今大藩没落の跡に來り祿高頸城の半を有するのみにして長嶺に牧野氏(後長岡藩主)糸魚川には松平忠昌の分領あり、民を御するに頗る難し、家次没して子宮内大輔忠勝嗣き元和五年松代に移る、

▲松平伊豫守時代。松平伊豫守忠昌は越前家の祖秀康の次男にして、大阪役に勲功ありし故を以て松代十二萬石を領す、元和五年酒井氏と入り替り、高田城主として二十五萬石を食み、元和九年兄忠直の跡を嗣ぎて福井に封せらる今の侯爵松平康莊氏は其裔なり、

▲越後中將時代。元和九年松平忠昌に代りて高田に封せられしは家康の曾孫光長なり、世人越後中將若くは越後様と呼ぶ、



越後騒動の概要

光長の父は家康の孫忠直にして母は二代將軍秀忠の女(天臺寺の條参照)たるを以て忠直の正嫡として越前家を嗣ぐべかりしに、父忠直大阪役に功ありしも行賞意に満たず、不遜亂行を逞しふせし爲めに將軍に忌まれて豊後に流さる、時に光長九歳母に従ひて江戸城に養育されつゝありしを以て叔父忠昌越前を嗣ぎ光長は高田に封せられ、頸城三郡刈羽全郡及び三島の一部信州埴科の一部合せて二十五萬石餘を領す、其政權越後全體に及ばざりしも門地は國內を歴して威大に振ふ、光長慶安四年從三位に叙し近衛中將に任ず、光長の越後に入るや結城以來譜代の家臣を叔父忠昌と分配して隨ひ來りし者の内手腕ある士少からず、就中家老小栗美作守正矩は心を殖産興業にそゝぎ、用水江を開墾し新田を開墾し政法を改良する事多かりしかば、上杉移封以來紛擾を極めし上越は大に面目を新にするを得たりしが、在封五十九年にして一藩紛擾の結果遂に没落の非運に接す、世之を越後騒動と稱す。

越後騒動の概要

越後騒動の原因は複雑にして其真相を知るに難し、今二説を擧げて參考に供せん

一國朝記、越後騒動記、野史等の書には、家老小栗美作奸佞邪智驕奢恣に任せ、黨を作り派を立て、主

君を欺き、税を重くして民を虐げ、大老酒井忠清に賄賂を贈りて結託す、光長嗣子綱賢の死したるを機とし、其妻(光長の異母妹)をかんの方の生める子大六を越後家の嗣となさん謀る、是に於てを爲め方と稱する反對者頗れ、藩内二派に分れ騒擾極まりなく、遂に公儀の耳に入りて破滅するに至れり。

二御城主略年譜に曰く。小栗美作は得難き俊才にして門地さ云へ権勢さ云へ其右に出づるものなかりしが、大横目渡邊九十郎之を羨み取つて代らんとして邪智に長ける兄小野里莊助と謀り時機を待つ、時に光長の嫡子綱賢歿して嗣無く繼嗣問題起るや、美作の發言を以て光長の異母弟永見市正長頼の子萬徳丸を嗣となすに決す、萬徳丸の叔父永見大藏其溺れたるを憤れるに乗じ、渡邊小野里の兄弟は間を放ち言を飛ばして大藏を動かし遂に小栗と争ふに至る、萩田主馬等之に従ひ一藩の若輩血氣の勇に燥りて狂態を演じ遂に閥老の聞く處となり相方熟議の上和睦せしが、九十郎の奸計により再び擾亂せしかば、酒井大老怒つて延寶七年大藏を江戸に召し萩田主馬片山外記中根長左衛門及び九十郎の四人と共に不埒に就き諸家へ御預けせらる。

三五代將軍綱吉立つや越後の騒動を聞きて關係者一同を江戸に召し、延寶九年(此年改元)六月二十日江戸城に於て親ら訴訟を聽き翌日左の如く宣告す。

切腹

小栗美作 同大六

流罪

八丈島へ 永見大藏 萩田主馬

三宅島へ 岡島豊岐 本多七左衛門

伊豆大島へ 小栗兵庫 小栗十藏

諸家御預

數十人

光長は下を御するの力なきして領地没收伊豫に放たれ、養嗣子三河守綱國(萬徳丸)は備後へ流さ

勤番時代

る、後致され其裔に美作國津山を賜はり維新に及ぶ、子爵松平康民氏は其後なり。

▲勤番時代。親藩を高田に封じて失敗する事前二回、幕府之に鑑みて暫く高田を番城として善後策を講究することとし、天和元年より貞享三年まで六年間、水野隼人正と溝口信濃守、相馬彈正忠と秋田信濃守、内藤紀伊守と岩城伊豫守、仙石越前守と諏訪因幡守、堀周防守と井上相模守、交るゝ家臣を派して在番す。

此在番時代中天和三年檢地を行ふ、關川以西は諏訪因幡守、關川以東は眞田伊豆守受持にて奏功せり。

稻葉丹後守時代

▲稻葉丹後守時代。貞享三年三月稻葉丹後守正通勤番時代を受け、小田原より

來りて高田城主となり、十萬三千石を領す、正通は正勝の孫にして正勝の母は春日局なり正通は消極主義を取り侍屋敷の開墾せられたるもの少なからず、上越は稻葉氏入部以來公領私領犬牙錯綜す、公領も出雲崎脇野町等他郡の支配を受け時としては高田長岡兩侯の御預りとなる、私領にも高田糸魚川及丹波田沼間部諸氏の陣屋ありて郷村の分合常なく、政令多岐に出で、統一を缺き、人氣漸く惡質を帯ぶるに至れり、稻葉氏高田に在る事十六年にして元祿

戸田能登守時代
松平越中守時代

榊原氏時代

十四年佐倉に移る、

▲戸田能登守時代。戸田能登守忠貞六萬七千石を以て稻葉氏につぎて高田城主たり、此時代に市街を整理し政令頗る完全すと云ふ寶永七年宇都宮に移る、

▲松平越中守時代。寶永七年松平越中守定重伊勢桑名より入り十一萬三千石を領す享保年間に上越に質地騒動起るや松平家鎮撫に功あり幕府依つて幕領を松平家に預けられしを以て上越は稍々統一の政治を見るに至れり、松平家が封五代三十四年間、寛保二年白川に移る、此時代政治殿なりしにや左の落首をなせるものあり、

丹後鱒(稻葉丹後)能登鱒(戸田能登守)まではよかりしが越中鱒(松平越中守)の鹽のからさよ

▲榊原氏時代。寛保二年榊原家の九代政永姫路より移封して高田十五萬石の領主となる石高に於ては北越に首たりしも越後に領する處僅に六萬石、他は奥州にありて實收姫路の比にあらず、上下の困憊甚しかりしが、文化七年榊原家第十一代として政令主となるや勤儉力行を主義として、殖産興業を奨励し、實績顯著なりしを以て奥州領の内六萬石を減じて當郡に六萬石を加ひ幕

糸魚川の沿革

維新後

府領を預り藩勢を挽回するを得、政令五十歳にして江戸本所に隠居せしを以て世人本所様と呼ぶ、之れより政養政代を経て政敬に至り、維新の難局に處して大義名分を誤ることなかりしを以て賞典祿一萬石を受け明治二年版籍返後上藩知事となりて城を退き元の對面所に移り、明治四年廢藩置縣の結果悉く朝廷に委して東京に移住せり、

▲糸魚川の沿革。糸魚川は春日山時代より其支藩たりしが貞享二年城廓毀壞せらる、其後稻葉正通本田助芳有馬永純交る、領知し、享保二年松平直之に屬す、其領屬一萬石なり、松平氏陣屋を置き以て維新に及ぶ、

●維新前後の頸城

維新の初は猶ほ各領主の治下にありしが、明治二年版籍返上後高田藩主は高田藩知事、糸魚川は清崎藩として松平氏藩知事たり、明治四年七月十四日藩を廢して高田縣を置く、同年十一月柏崎縣に屬し、同六年六月十日柏崎縣廢せられて新潟縣管轄となり頸城を左の五大區に分ち治む、

第六大區(今の東頸城郡全部)
第九大區(今の西頸城郡全部)

第七大區(保倉川以北)
第十大區(關川以西)

第八大區(關川以東)

明治十二年五月大區の制廢せられ、頸城を東中西の三郡に分ち郡役所を安塚高田糸魚川に置き町村戸長役場を統轄せしむ、明治二十二年町村制實施せられ、同二十三年郡制發布せられ、自治機關漸く完備せんとす。

◎現今の上越

現今の上越
土地

◎土地

南北十一里餘、東西二十七里餘、其面積左の如し、

東頸城郡 二十九方里四三

中頸城郡 七十二方里

西頸城郡 二十九方里二九

合計 百三十方里七二

全國の約二百二十分の一、越後の五分の一に當る、

三郡の民有々租地田畑宅地鹽田鍍泉地池沼山林原野其他の合計左の如し、

(三十九年度調)

郡名	反	別地	價
東頸城郡	二萬一千五百七十二町九反		百五十四萬六千五百八十九圓

住民

中頸城郡	五萬五千四百七十二町六反	八百三十五萬九千五百三十圓
西頸城郡	二萬五千八百七十一町六反	百四十九萬二千四百五十一圓
合計	十萬二千九百十七町一反	千百卅九萬八千五百八十圓

◎住民

三郡内に本籍を有する戸口及男女の區別左の如し(四十年末調日)

東頸城郡 戸數九千八百八十五軒

人口五萬七千四百十三人 男二萬八千八百七十七人 女二萬八千五百四十三人

中頸城郡 戸數三萬五千八百八十六軒

人口二十一萬二千六十二人 男十萬三千二百四十六人 女十萬八千八百十六人

西頸城郡 戸數一萬九百五十四軒

人口六萬九千二百四十六人 男三萬三千九百五十一人 女三萬五千二百九十五人

三郡合計 戸數五萬五千三百二十五軒

人口三十三萬八千七百二十一 男十六萬六千六十七人 女十七萬二千六百五十四人

交通

▲道路。封建時代には道路の便開けず、徒らに迂回し險惡を通じ、犀濱の砂上の如き行人の腦む所大なりしが、今や親不知の嶮も、米山峠の難路も車上悠々として行くを得、近年縣營郡營の道路大に開けて山間僻陬の地と雖も便益昔日の論に非ず、

道路分	名	稱	起	點	終	點	延	長	
國	道	五號線	長野縣界	青海川			十九里九町十六間七尺		
同		廿一號線	高	田	境	川	十七里二十八町		
縣	道	松本線	糸	魚	川	長野縣界	六里六町十五間		
同		安塚線	高	田	安	塚	六里八町四十七間		
同		宮口線	新	道	村	鴨島	牧	村	三里二十一町五十二間
同		三郷線	高	田	榑	池	村	梨平	三里廿一町四十間八尺
同		針線	高	田	板	倉	村	針	一里二十六町十五間

鐵道

同	新	井	線	柿	崎	新	井	八里四町五十八間四尺							
同	飯	山	線	新	井	長野縣界	代	九里六町四十間							
同	大	島	線	直	江	津	松	十四里廿七町二十四間							
同	梶		線	湯	町	停	車	場	旭	村	梶	二十七町四十五間			
假	定	縣	道	直	江	津	五	智	十三町二十一間一尺						
同	上	條	線	安	塚	中	猪	ノ	子	田	刈	羽	郡	界	二里十四町
同	蟲	川	線	下	保	倉	川	安	塚	二里二十四町十一間					
同	松	ノ	山	線	松	ノ	山	本	湯	二里二十三町四十間					
同	岡	ノ	町	線	松	刈	羽	郡	界	二里二十三町四十八間					
同	十	日	町	線	松	魚	沼	郡	界	約二里					

▲鐵道。直江津より荒川に沿ふて遡り信濃國を経て上野國高崎に入るは信越線にして明治十八年一部開通す、碓氷隧道成り東京直江津間の全通せしは同二十一年十一月なり、直江津より海岸に沿うて柏崎に至り更に越後平野を貫きて新潟に達するものは北越線にして直江津柏崎間は明治三十年八月通じ、明治三十二年九月全線開通す、富山より海岸に沿うて直江津に来るべきは北陸線的一端にして四十年三月より工事に着手したれども四十一年十一月開通

し得たるは富山より魚津までの十五哩餘なり、然とも殘線六十一哩の開通も近きにあるべし。

線路	全線	里程	郡内線	里程	郡内停車場数
信越線	自高崎 至直江津	百十七哩八銀	自直江津 至四口	二十二哩八銀	六
北越線	自直江津 至新潟	八十五哩八銀	自直江津 至曾根川	十八哩四銀	六

馬車

▲馬車。直江津より糸魚川まで十一里の間乗合馬車の便あり、六時間乃至八時間賃金約九十錢を以て全線を通過するを得、又糸魚川より松本に通ずる縣道にも馬車の便あり。

人力車

▲人力車。縣郡營道路の發達と共に人力車の通ずる區域も大に擴大し、今や山間と雖も此便益あり、

汽船

▲汽船。海上の交通は直江津港を中心として右に鉢崎あり、左に糸魚川ありと雖も港灣の不完全と冬季海波の危険とは海運の發達を妨害すること夥しく、兵庫大阪及び北海道の各會社の汽船にありては航海期中絶することなれども、其他にありては年々三月若くは四月に航海を初めて十月若くは十一月に終る、航海季間と雖も海風一度吹き荒めば或は郷津に隠れ、或は佐渡に避

直江津より各地に至る汽船表

行	先里	程	航海時間	賃金
佐渡	小木	三十八哩	約五時間半	一圓廿錢
佐渡	澤根	四十四哩	約六時間半	一圓五十錢
同	夷	七十六哩	約八時間	一圓
越後	新潟	六十哩	約六時間	一圓
越中	伏木	六十二哩	同	一圓
越前	敦賀	百九十五哩	約廿時間	二圓五十錢
伯耆	境	二百八十五哩	約廿九時間	四圓五十錢
筑前	門司	四百六十哩	約四十六時間	六圓五十錢
攝津	神戸	七百哩	約七十時間	八圓五十錢
羽前	酒田	百廿六哩	約十三時間	二圓
羽後	能代	二百三哩	約廿一時間	三圓五十錢

難せざるべからざるの不便あり、長航海の汽船は概ね二千噸乃至三千噸、速力平均十節、佐渡往復及越中商船會社の汽船は船型小にして速力平均七節に過ぎず。

●直江津港より各地に至る汽船表

郵便

渡島函館	三百七	約卅二時間	五
後志小樽	四百廿五	約四十四時間	六
▲郵便。明治六年高田町に遞信局出張所を設けられしを初めとして今日の發達は左の如し、			

電信

郡名	局數	郵便函數	切手賣下所	無集局
東頸城郡	九	六八	六八	一
中頸城郡	二七	二六三	二六三	一〇
西頸城郡	一一	六二	六二	一
合計	四七	三九三	三九三	一一

▲電信。郵便局にして電信事務を取扱ふ所は左の如し、高田、直江津、五智、片原、新井、瀧町、柿崎、稻田、川浦、末野、安塚、大島、松代、松ノ山、糸魚川、名立、能生、梶屋敷、青海、鐵道停車場にして公衆電信取扱ふ所は、田口、關山、黒井、鉢崎(以上配達)新井、高田、直江津、瀧町、柿崎、

電話

▲電話。本縣廳と各郡役所各警察署との電話は先年より開通せしも、公衆電話は明治四十年十二月六日を以て高田直江津間、同年十二月十一日を以て長野松本上田間開通し、高田及び直江津市内電話は明治四十二年を以て開通す、

産業

農業

▲農業。三郡の田畑反別合計四萬六千九百九十九町七反歩、同 農專業戸數合計三萬一千五百二戸、同 農專業人口十八萬八千九百七十二人、右の外商工漁業を兼ねるもの少からず、三郡の米産額合計四十九萬八百九十四石、同 麥産額合計一萬八千三百三十七石、

右の外豆類、黍、蕎麥、玉蜀黍、甘藷、馬鈴薯、蘿蔔、胡蘿蔔、午莠、蠶、葉煙草等を産す、

(明治三十九年調)

近時農事に關する智識大に開け、郡農會村農會を組織し、農學校農事試驗場等を設け、農産物共進會を催ふし、研究に、奨勵に怠りなし、又農村經濟上の智識

も漸く開け信用、購買の組合を組織し、又報徳會を立て、勤儉の良風涵養に務むるの傾向あり、

○ 緑山臨海水田牛 到處村々打稻聲 歲饒醴醪價尤賤 好俸料喧勵風行

龜田 陽 齋

商業

▲商業○

三郡商專業戶數四千六百六十七戶

同 商專業人口二萬五千五百六十六人

同 銀行

東頸城郡 銀行數 二 資本金四十萬圓

中頸城郡 同 九 同 四百八十二萬圓

西頸城郡 同 十二 同 八十二萬圓

合計 同 廿三 同 六百四萬圓

取引所

株式會社直津江米穀取引所、資本金十萬圓

會議所 直江津商業會議所

株式會社

三郡合計 二十九個所、資本金貳百三萬圓

合資會社

三郡合計 二十八個所、資本金三十三萬圓

合名會社

三郡合計 七個所、資本金五萬三千圓

市場

新井市、毎月六日、十日、十六日、廿六日、三十日、

春日新田馬市、天正年間創り、六月一日より五日間、

東郷市(柿崎) 明治三十八年 年賦拵紀念毎月十日、廿五日、

杉野澤牧場市、(明治三十) 六年創り 毎年十月十日より三日間

古城牛市 (明治二十三) 年十月創り 毎年八月、十月、

原ノ町市、一月廿一日より廿六日、八月一日六日十一日廿六日

鴻町市、毎月一日、廿一日、八月二日、七日、

松代市 (夏市毎年陰曆六月十九日より廿一日迄、秋市毎年陰曆十一月二十三日より二週間、

工業

大島市 夏市毎年陰曆七月十三日より十八日迄、冬市毎年陽曆十二月一日より七日間、安塚市 毎年十一月二十日前後一週間、湯本、小黒及び菖蒲にも年々市場を開く、

▲工業。三郡の工專業戸數一千六百三十戸

同 工專業人口八千七百二十四人

同 工業の種類 羽二重斜子紬、太織、透綾類、二子。其他糸入木綿、上

布類、酒類、醬油、茶、油類、製油、漆器、煉瓦、玻璃、木蠟、製藍、燐寸、紙、製革、墨表、蓼蔴、團扇、製麥粉、製糸、木通葛細工、諸器械鐵器類、

三郡の工場數、

東頸城郡六個所、中頸城郡十箇所、西頸城郡六個所、合計二十二箇所

行政 行政區劃

●行政。

▲行政區劃。

警察

郡	所在役地所	町數	村數	大字數
東頸城郡	安塚	〇	一四	一七六
中頸城郡	高田	三	四九	八四八
西頸城郡	糸魚川	三	一七	一六九
合計	三	六	八一	一一九三

▲警察。

高田警察署、管轄一町十四ヶ村駐在所十六ヶ所
 直江津警察署、管轄一町八ヶ村駐在所十一ヶ所
 新井警察分署、管轄一町十七ヶ村駐在所十五ヶ所
 柿崎警察署、同十ヶ村駐在所十二ヶ所
 糸魚川警察署、同一町十三ヶ村駐在所九ヶ所
 能生警察分署、同二町四ヶ村 駐在所六ヶ所
 安塚警察署、同十三ヶ村 駐在所八ヶ所
 巡查部長派出所 田口及松代の二ヶ所

財務及

▲財務及財務。

高田稅務署(高田町) 中頸城郡一圓の稅務、

安塚稅務署 (安塚村) 東頸城郡一圓の稅務、

糸魚川稅務署(糸魚川町) 西頸城郡一圓の稅務、

長野鹽田(高田出張所) 中頸城郡一圓の稅務、

長野鹽田(糸魚川出張所) 西頸城郡一圓の鹽務、

直江津小林區署(直江津町) 頸城三郡及刈羽郡の官林、

小出雲葉煙草收納所(新井町小出雲)、

▲工務。

小出雲支局葉煙草收納所(新井町) 新潟縣、長野縣(下伊那郡を除く)を管す、

高田土木工營派遣所(高田町) 頸城三郡を管す、

司法

○司法、

新潟地方裁判所高田支部 (高田町) 頸城三郡を管す、

高田區裁判所及び登記所 (高田町) 中東兩郡を管す、

高田區裁判所所轄出張所は左の如し

軍事 陸軍

○軍事。

飯田(高)、關山、烏坂(除)、直江津、中吉川(原の)、柿崎、安塚、松代、糸魚川區裁判所及登記所(糸魚川) 西頸城一圓を管す同登記所、能生出張所、

地方裁判所は新潟に、控訴は東京控訴院に屬す、

新潟監獄高田分監(高田町) 頸城三郡を管す、

▲陸軍。第十三師團管轄にして歩兵は第二十六旅團第五十八聯隊に屬し、其他は騎兵第十七聯隊、砲兵第十九聯隊、工兵第十三大隊、輜重兵第十三大隊に屬す、工兵隊を除くの外は司令部及び兵營を高田に置く、聯隊區は高田聯隊區に屬す、

▲海軍。第四海軍區管下において舞鶴海軍鎮守府に屬す、

▲軍事上の團隊。各郡軍人團。各町村軍人團は在郷軍人を以て組織し、各郡尙武會、各町村尙武會は町村人民を以て組織す、

○教育。

▲初等教育、

海軍 軍事上の團隊 教育 初等教育

中等教育

郡名	小尋常	高等尋常	高等小尋常	學級數	教員數	就學兒童數	不就學兒童數
東頭城郡	二二	一	一六	一三二	一四〇	七〇六〇	一五〇
中頭城郡	六八	四	三七	五一八	五九一	二五〇九一	一一一八
四頭城郡	三一	二	一四	一七六	一九〇	一一二七九	二二三
合計	一二二	七	六七	八二六	九二二	四三四三〇	一五九一

明治四十二年四月一日調

中等教育

師範教育

●中學校。縣立高田中學校は學級十六、職員三十二人生徒定員六百人卒業生八百四十四人、縣立糸魚川中學校は、三十九年高田中學校の分校として開校し、四十年三月獨立せり、私立有恒學舎は明治廿八年の創立にして生徒定員二百名板倉村大字針にあり、

專門教育

●師範學校。高田師範學校は學級七職員二十人生徒定員本科二百八十人卒業生三百五十餘人を有す、
●農學校。縣立高田農學校は學級三職員十三人生徒定員百二十人卒業生二百名に達せんとす
●水産學校。縣立能生水産學校は三十一年九月創立四十一年縣立となる學級

女子教育

三職員九人生徒定員七十五人及専科若干名卒業生四十九人を有す
其他私立訓蒙學校は高田にありて盲人を教育し、又農業及商業補習學校の小學校に附屬するもの多く郡立の各種實業學校も郡會の決議を経、其設立近きにあり、

女子教育

●女子教育。
縣立高田高等女學校は學級九職員二十人生徒定員四百人卒業生三百六十四人を有す、郡立には糸魚川女子職業學校あり、私立には女子裁縫學校、高陽女學校女子技藝學校等高田にあり、

孤兒院

●孤兒院。
和敬孤兒院は春日村字木田にありて清水佳之助氏の設立せるものなり、

圖書館

●圖書館。
高田に高田圖書館、通俗高田圖書館、謙信文庫、潟町村に大川文庫あり、安塚村に通俗安塚圖書館新に設立せらる、

教育上の團體

●教育上の團體。
各郡に郡教育會、町村に町村最寄教育會あり、有志の團體には上越教育會あり、上越婦人會あり、

教育上の團體

新聞

現今の上越

雑誌

▲新聞。

高田には高田新聞、高田日報、高田時報、北越新報、高田夕報、新高田、直江津には直江津新聞あり、

▲雑誌。

春日山校友會發行、修養 高田中學校、修養會發行、高田農學校學友會雜誌を發刊す、

◎宗教。

神道

▲神道。頸城人は古來敬神の精神敦く、既に延喜式神名帳に記載せる古社、關川の東に八社川西に五社合せて十三社あり、其祭神の多くは出雲に關係あるは、早く出雲の文明に接觸して啓發する處多きを感謝せるの證にして、祭禮神事の壯嚴なるは今に及んで絶えず、家々神棚を設けて大神宮を祀り、村々字々到る處大小の神祠あらざるはなく、又他國に比して淫祠少きは思想の眞摯なるを證すべし、

東頸城郡	縣社	郷社	村社	無格社	合計
中頸城郡	三	二	三五	八二〇	八六〇

佛教

西頸城郡

合計	三	二	五五	一三二一	一三七一
----	---	---	----	------	------

縣社居多神社	祭神大國主命	(春日村)
同 春日山神社	同 上杉謙信	(春日山)
同 榊神社	同 榊原康政	(高田町)
郷社風卷神社	同 級長津彦明	(上杉村)
同 日枝神社	同 級長戸邊命	(高田町)
同 大山咋命		(高田町)

▲佛教。頸城の佛教史を案するに、昔法道及裸形來つて釋教の基を創め、繼で秦澄行基來りて諸山を開くと傳ふ、聖武帝國分寺を五智に創建し給ふや上越は政治上の中心たると共に佛教信仰上の中心ともなる、平安朝時代には空海も來越せりと云ふ、斯くて密院の道場至る處に昌盛にして山寺三千坊舎の如き上越に威を振ひ、人文開發の上に尠からざる貢獻をなし、眞言天台の二宗最尊崇されしが嘉應年間加賀國司藤原師高の亂上越に影響し、密宗漸く傾きぬ、偶親繼流誦せられて五智に居る事前六ヶ年、一向宗の信者日に増せり、日蓮佐渡に流され當郡通過の途次を以て法華宗を布き、其高弟越後阿闍利日

辨續で来る曹洞禪宗も上杉長尾兩家の尊信によりて興る、長尾爲景一向宗と不知なりしを以て令を下して之を禁せしより同宗の越中方面に遁逃せしもの頗る多かりしが、上杉霜台公一向門徒の上洛の道を妨ぐるを憂ひ、之と和して北越に布教するを許す、堀氏入部するや一向宗頼に勢を得、關ヶ原の戦に眞言天台兩宗の僧俗上杉氏に應じて上杉家の舊臣と共に所在一揆を起す、堀氏極力鎮壓し大に迫害せしかば、同宗のもの或は他國に遁れ或は改宗して衰頽を極め、獨り一向宗のみ勢あり、松平氏入部後浄土宗廣まりしも一向宗に及ばず、現今三郡中最も多きは一向宗にして禪宗法華宗浄土宗之に次ぎ、眞言天台時宗に至つては實に寥々たり、而して信仰心の深き事昔日の如しと云ふ能はされども、舊禮猶存し、老爺老媪の念佛の聲は依然盛なり、

近年寺院分合整理の舉あるが爲めに寺院數及び僧侶數を確知することを得ず

▲基督教。記録に存する處を案するに、天正十三年越後國に於て盛に切支丹發興す、「幕府因て善導寺僧智譽幡隨意上人に退治を仰付られ速に御請申ける云々」であるによれば三百年前越後に信者ありしを知るべし、切支丹禁令嚴にし

基督教

人情風俗

て宗門帳制度功を奏し、信者の跡を絶ちしが維新後信仰の自由となるや、明治二十年前後には元一致教會派に屬する信者ありて下小町に教會堂を置き女學校を設け異人を教師として稍盛なりしが、女學校は二十九年廢校し信者も亦離散せり、現今高田に日本聖公會の會堂あり直江津に出張所を置く、メソヂスト教會は高田町新井糸魚川に會堂を有す。

人情風俗

北越の地僻険に位して文明の曙光に浴する事遅きも、頸城人は下越に比して出雲の文明の影響を受くる事早く、且つ國府所在地なりしによりて人智の發達速なり、然も上越人は下越よりも質朴にして或る所には、古の風を存し稍頑陋の失あり、上杉氏時代は上下共に剛健、其意氣熾なりしが爾來幾度か領主を替え、幕領私領錯綜して政令の統一を失ひてより、幕領民は驕慢にして權勢を弄し、私領民は卑屈に流れ、風教習慣上に影響する處甚だ多し、且一般に經濟思想に乏しく、損益を顧みずして争ふの傾あり言語動作活潑を缺き、性質鋭敏ならざるは雪國の常弊なり、北越の兵士は朴直にして柔勁の評を得、頸城人は親切にして正直、從順にして辛抱強しと

せらるゝは他國に優る特色なれども、近時石油事業勃興し、交通の便開け、師團設置の結果として諸所より入り込む者多き爲めに、頸城人の特色を殺ぎ輕薄に流るゝの風を増すは嘆すべし、

越後國の風俗、千人が九百、人に負る事を嫌つて勝つ事を好み、假初にも勇を嗜み、痛き事云事なばかゆき事云、途中にてけつまつきて倒れ痛じ事云事不云て、意得たり餓鬼目杯と、幼き者の育にも教ゆる風俗にて、さしか、りたる意地多く、後道のつまりを不考人多し、さるに因て、臆する氣の人寡く而、差かゝりたる分別のみにて、義理の心強く、主は被官を哀み、被官は主を頼み、意地 臆なれども、物の理に至る人鮮ふて、其執行之道に赴く人無之と見へたり、故に名人と名を呼ぶ人すくなかるべし、去程に勝事を好む時は、必我非を不知る者なり、唯我善惡を知て、道理に従ふ志あらば、無双國の風俗なるべきを羨多き事なり。(人國記)

後篇上越の地理と歴史終

附 録

高田驛
汽車發
車時間
表

高田驛汽車發車時間表

上リ	下リ
午前五時四十四分	八時四十七分
同 八時十三分	十一時廿七分
同 十一時二十八分	
午後三時	二時二十九分
同 五時四十三分	四時三十四分
同 八時三分	八時二分
	十時二十二分

電話使
用料一
覽

電話使用料一覽

對話地名	通話料	呼出料
長距離電話	東京	七十五錢
東京	横濱	八十錢
呼出料		二十錢
		二十錢

72
389

市内外
人力車
賃金表

市内及び市外人力車賃金表

一區六錢、一區を越す毎に四錢増し返り半額
 時間待一時間に付五錢、一日雇八十錢、半日雇五十錢。
 高田より一人乗

直江津…二十五錢。新井…三十五錢。五智…三十錢。川浦…二十九錢。飯田…三十六錢。

- 北
- 九區 六ノ辻 北五ノ辻 四ノ辻 三ノ辻
 - 十區 東二ノ辻 西二ノ辻 京橋岡島 作事中段通 中々殿 新中殿 主永 西會所通
 - 十一區 木築 南土橋 北土橋 尾張 蓮池蓮池板 内馬塚 馬場先 南會所 鷹部屋 北出丸 樹形 外馬塚
 - 十二區 五分一全體

附 錄 終

市内人力車
區劃表

市内人力車區劃表

市街電話	新	長	松	上	長	三	小	柏	直
	新	野	本	野	岡	條	千	崎	江
	湯	野	本	野	岡	條	千	崎	江
	四十錢	二十五錢	二十五錢	二十五錢	二十五錢	二十五錢	二十五錢	二十錢	十錢
	二十錢	十五錢	十五錢	十五錢	十五錢	十五錢	十五錢	十五錢	十錢

一區 伊勢 出雲 關
 二區 横春日 堅春日 府古 藏番 上紺屋
 三區 横 吳服 上小 新須賀 須賀 兩替 上田端 下田端 檜物屋 中等 上職人 市の橋
 四區 中小 下小 下紺屋 桶屋 元府古 本大工 本杉鍛冶 新本杉鍛冶 大鋸 寄大 工下寺 下職人
 五區 土橋 刃物鍛冶 陀羅尼 新田 四村
 六區 善光寺 長門 中屋敷
 七區 直江 本誓寺 稻田鍛冶 鍋屋
 八區 新川原 表川原 裏川原 四ノ辻通 中殿通り 中々殿 中々殿ノ内師範學校裏門以

附 錄

三

附 錄

二

明治四十二年十二月廿五日印刷
明治四十三年一月三日發行

不許
複製

編纂者 布施秀治

發行者 富澤清明

印刷者 林甲子太郎

印刷所 公木社

新潟縣中頸城郡高田吳服町百二十四番地

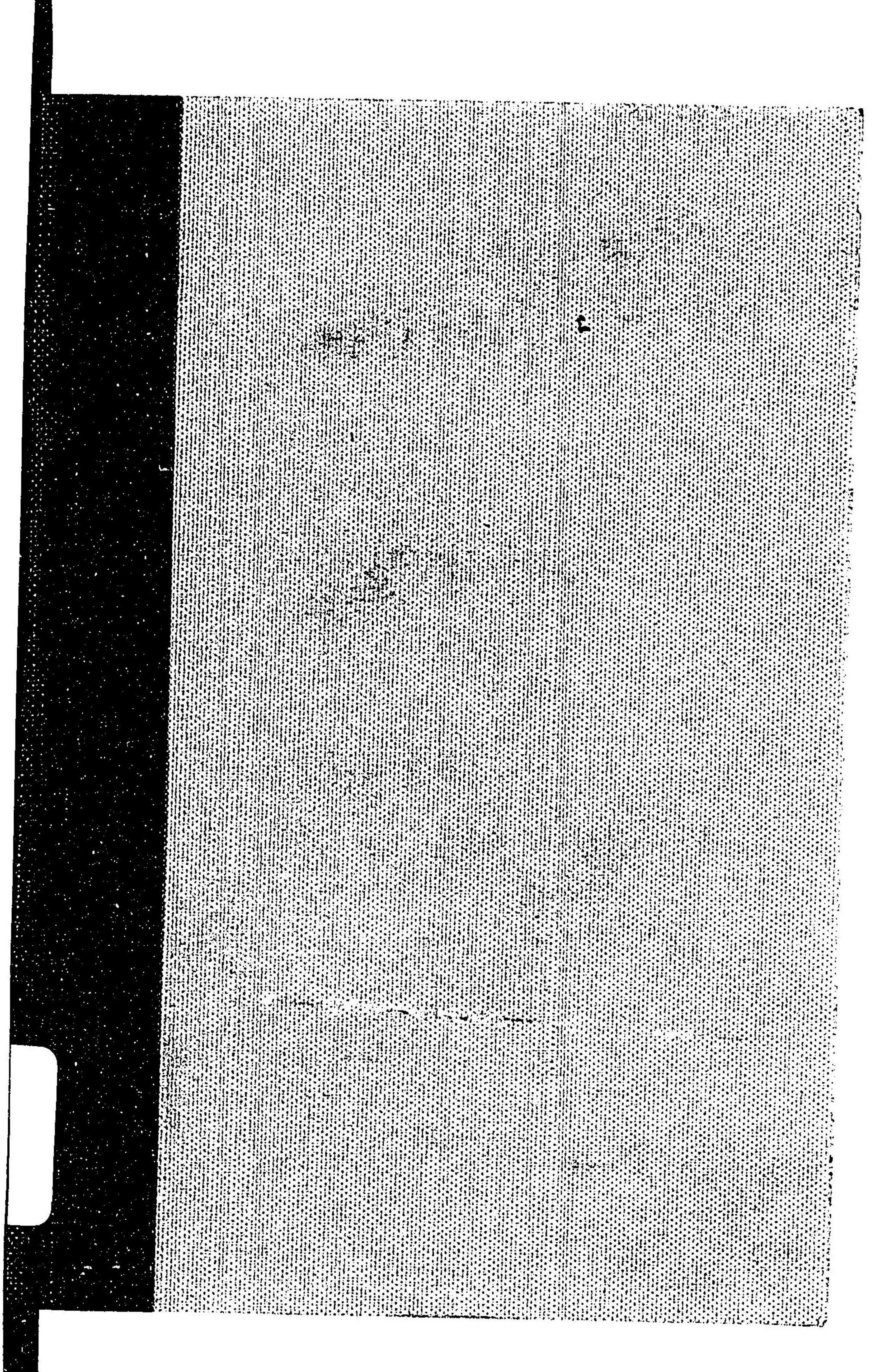
東京市淺草町須賀町十八番地

東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地

越後高田吳服町

發行所 西澤高田支店

電話長二四三番
振替貯金口座第壹五四六番



特20

520

高田案内

国立国会図書館

024530-000-9

特20-520

高田案内

布施 秀治/編

M43

ADC-1764

